

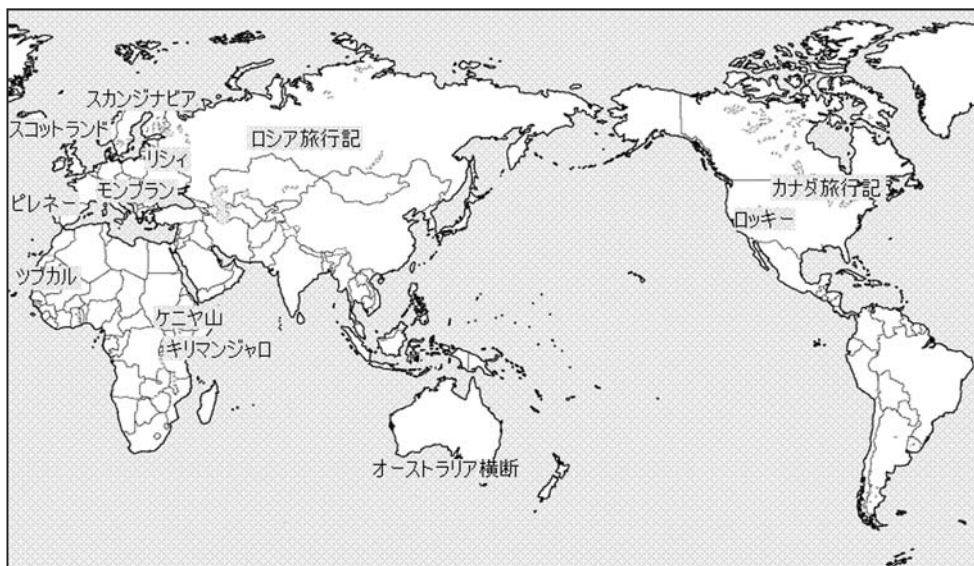
# 私の山、私の旅

浦川明彦

雄文社

私の山、私の旅

浦川明彦



この本に出てくる地名

## まえがき

山歩きを始めて、かれこれ43年になる。これまで、日本の山、外国の山を歩いたが、折にふれてウェブで公開してきた。ここらで、一区切りつけて、これまで書いてきたものをまとめてみようと思いついた。その結果がこの本である。

写真などは、ウェブサイトを見ていただければ多数収録しているので、そちらをご覧くださいただければ様子がわかる。

urakawa@post.officenet.ne.jp

山歩きについて、特に外国の山歩きについて考えていることは、数年前に、乞われて、「私の山、私の旅」という文を書いたので、ここで再録して、まえがきとしたい。

### 「私の山、私の旅」

山登りを始めたのは、高校入学の15才から。九州の港町、門司の海のそばで育った私にとって、山は「遠いところ」へのあこがれを満たすものだったのかもしれない。高校時代、山岳部で山登りの基本を学び、トレーニングによって体力を養った。これがそれより40年になんなんとする登山活動の基礎となっている。日本アルプスをはじめ、北は北海道から南は石垣島まで、山歩きを続けてきた。

外国へは、あこがれを持っていった。アルプスやヒマラヤの登山史を読み、異国の山の風景を思い浮かべていた。しかし、高校生の頃は「外貨割り当て」とかいう時代で、個人が自由に外国へ行ける時代ではなかった。それでも、大学一年のころ、当時「外国」だった沖縄へ足をのびした。大学を終え、東京都に職を得て

何年か経った一九八八年、弟がイギリスで就職したのを機に、ヨーロッパへ行くことにした。時代は、個人が自由に旅行できるようになっていた。初めて外国に行くのに、無謀にも航空券と鉄道パスだけ買って、パリに降り立ち、スイスに夜行列車で移動した。あのマッターホルンを見、四〇〇〇mの氷河のある山の頂き（フライトホルン）に初めて足跡を記した。

それ以来、アフリカのキリマンジャロ・ケニヤ山、ヨーロッパアルプス（モンブラン山群やベルナーオーバールント）、スコットランドの山々、アトラス山脈、ヒレネ山脈と足を延ばしているのだが、これらの地域では、ヨーロッパ人たちが登山し、そのためのサーブिसが長年に渡って培われてきた。地域により差違はあるが、ヨーロッパ流の登山のためのインフラ（ガイド、ポーター、ヒュッテ、食事など）が整備され、アフリカでは、地元もそれに乗って、外貨を獲得する、というパターンである。ヨーロッパでは、「山歩き」は国民的な「レジャー」とされコースその他は整備されている。

また、「山歩き」だけでなく、「鉄道の旅」も楽しいものだ。鉄道には、様々な地元の人や旅行者が集まり、散っていく。車内も楽しいが、車窓に移り変わる景色も、テレビの映像と違って、一歩外に出ると「現実のもの」となる。冬のシベリア鉄道、太平洋から大西洋へとカナダ横断などの長距離の旅は、さらに変化が感じられた。

## 旅と言葉

私の外国の山歩きのパターンは、「登山ツアーの旅」に加わらず、航空券を買って外国に行き、現地で宿泊を調達し、現地の人の乗り物を使って麓まで行き、そこから登山活動を始めることが多い。「登山ツアー」は、交通機関や宿泊施設が準備されており、専用の貸切バスなどを使うので、きわめて効率がよい。山の麓とい

うのは、たいてい、交通の便がいいはずがない。従って、地元の人を使う交通機関を使うと、「不自由」で、時間の無駄が多くなる。また、泊まるところを探しながらの旅である。このような旅をするためには、事前の調査（交通事情、宿泊事情、食料調達その他いろいろ）と、現地でコミュニケーションする必要がある。そのために、これまで、いろいろな言葉を学んできた。仕事をしながらの言葉の準備であるから、語学スクールに行くということはしたことがない。メジャーな言語は、ラジオ講座と本、そうでない言語は本とあれば付録のCDなどである。目標は、「辞書があれば看板が読める」という程度。日常会話ペラペラなどはとてもとても。これまで、学んできた言葉は、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、ハンゲル、スワヒリ語、アラビア語などである。特に、文字を覚えなければならぬ言葉は大変だ。どれも、使わなくなったら忘れてしまっただけだが、一人で旅行している最中に、周りが、全くわからない言葉ということを経験すると、周りに書いてあることが「読める」ことの安心感は、絶大なものがある。「世界中で英語が通じる」という人もいるが、それは、大きなホテルに泊まり、空港や大きな鉄道駅での話で、そうでないことは、日本の田舎を考えてみればわかるだろう。そういうところで、泊る場所を探し、交通機関を探すなら、その土地の言葉が欠かせない。ただ、年々しんどくなってきているが。

## 治安と平和

日本にずっと暮らしていると、治安と平和は当たり前、という気になるが、この二つが当たり前なところばかりではない。治安、という点からいうと、かつて旧社会主義国は、「不自由だけと治安だけは安心」であった。それに対し、アフリカや南ヨーロッパ諸国では、治安はよくない。経済的に安定しないことが治安の悪化を作り出すようだ。旅行中は用心深く行動しているつもりだが、一度、モスクワの地下鉄で白昼堂々と

物取りに襲われたことがある。最近、日本でも治安の悪化が目につく。

治安が悪いだけなら、まだ旅をすることができるが、平和が維持できていなければ旅などといってられない。戦争地域では、山登りも鉄道旅行もないのである。

一九九六年に西ドイツからチェコスロバキアに夜行列車に入ったことがある。真夜中に国境の駅で停車。銃を持った兵隊が乗り込んできて、パスポートとビザのチェック。このとき、日本のチェコ大使館でもらった書類を申請書だと思い、持参しなかった。「あれがビザだったのか」と気がついた。銃を持った兵士に、パスポートに押された大使館のスタンプを見せ、日本のチェコ大使館で手続きした。と言ってはみたが、「まずい、ここで降ろされる」と観念した。パスポートを持って何か上官と話していたが、突然、白紙のビザの用紙を出して、「書け!」。銃を目の前にした国境通過は、こういう緊張感があった。

また、一九九八年にモンブランに登ったとき、途中の小屋でユーゴスラビアの若者と知り合いになった。日本から来たと紹介し、「君たちは近いから何度も来れていいなあ」というと、「私の国は、今、とても難しいことになっている」と暗い顔で話した。その当時、ユーゴスラビアの紛争は、日本ではあまり知られていなかったが、帰国後、国中で戦争が勃発し、多くの人々が犠牲となったことが報道された。あの青年も渦中にあつたのだらう。平和がないところには山歩きもない、ということを実感した。日本は、60年にわたり戦争の状態にない。最近、教科書問題や自衛隊派遣などでキナ臭い動きが広がっているが、平和であればこそ、山にも行けるし旅にも出られる。

## 旅の記録

一人で、非効率な旅をしていると、時間がたくさんある。そこで、記録をつけ始める。特にお金の管理。

買ったもの、食べたもの、払ったものを克明に記録する。そうして、旅の途中から、旅行記を書き始める。夜や帰りの飛行機などはそのチャンスだ。日本に着いたときには、原稿は出来上がっている。文に残すと、一層印象深い。それをインターネット上に公開すると、思わぬところから問い合わせがくる。「ロシアのイルクーツクの地図を見せてくれ」とか「モンブランにはヘルメットを持っていくのか」とかである。また、美しい写真が色あせないことは、楽しいことである。年に一回しか更新しないサイトであるが、積みもり積みもりと結構な量になる。旅のノートとともに、手塩にかけた宝物である。



私の山、私の旅 目次

まえがき

第一章 諸国の名山を訪ねる

ヨートウンハイメンの山を歩く

TMB ツールドモンブランを歩く

カナディアンロッキーを旅する

ポーランドの山 RYSY に登る

スカンジナビアの山を歩く

ガルホツピゲンに登る

アビスコ国立公園クングスレーデンを歩く

ケブネカイセに登る

ツブカル登山記

ツブカルの麓、イムリルにたどり着くまでの顛末

モロッコからスペインまで

ピレネ山脈を歩く

56 53 49 45 40 36 33 33 27 18 8 2 1

スコットランドの山を歩く

ベンマクドゥイ (Ben Macdui) に登る

ロツホナガール (Loch Nagar) に登る

ケルンゴルム (Carn Gorm) に登る

ベンネヴィス (Ben Nevis) に登る

ベンロワーズ (Ben Lawers) に登る

ベンローモンド (Ben Lomond) に登る

モンブラン登頂の記

アフリカの山旅 ケニア山とキリマンジャロ

ケニア山登山記

キリマンジャロ登山記

アフリカ雑感

## 第二章 鉄道で大陸を横断する

オーストラリア横断鉄道の旅

カナダ横断鉄道の旅

ロシア旅行記

## 第三章 日本の山あれこれ

梅海新道を歩く 白馬岳から日本海へ

34年ぶりの屋久島

白神岳に登る

あとがき

195 189 186 185

表紙写真／ツールドモンブラン・ボンノム小屋の夕暮れとアイベックス

第一章  
諸国の名山を訪ねる



氷河に削られた山地を行く

## ヨートウンハイメンの山を歩く

北欧ノルウエーにあるヨートウンハイメン山地 (Jotunheimen) は、北欧の最高峰ガルホッピゲン (Gardhøpiggen 2469m) を含む山地である。標高こそ低いが北緯60度を越えた地域であり氷河が刻んだ地形で作られている。この山地を2010年夏に歩いた。

8月20日オスロへ

前日夜、ヘルシンキ経由でオスロに入り、宿泊した。午前中に、DNTの事務所で、買い物と情報収集。ガスボンベ、靴下、シューズ(編製450NKもする)を購入し、Gjendesheimへの交通を調べてもらう。宿の予約は必要ないとのこと。

8月21日 イエンデスハイム (Gjendesheim) へ

9:30オスロバスターミナル、14番よりバスが出る。チケットは乗る時運転手に行き先を言い、支払う。ノルウエーのバスは広くて、長距離バスはトイレ付である。バスは、昼過ぎにRegenesで乗り換え、途中の乗り換え駅で昼食にサンドイッチを購入し、車内で食事。山岳地帯を走り、イエンデスハイムに1時半ころに着く。

イエンデスハイムはイエンデ湖のほとりにたつロッジである。道路のそばにあるので、「山小屋」という雰囲気ではないが、DNTが経営する山小屋である。ノルウエーの有人小屋は日本と違い、「山のホテル」という言葉がにつかわしい。個室を持ち(ドミトリーも当然)シャワーがあり、食事はコース料理ができる。



ヒュッテ近く。道標がある。



イエンデ湖

このビュッテがあるイエンデ湖は、コバルトブルーの湖でユネスコの遺産に登録されているということが書かれている。この湖は奥ゆきがあり、連絡船が運航され、ムムルブー (Memurbu) イエンデブー (Glendebu) を結んでいる。これに乗ると、湖水観光もできるし、勞せずして奥の2つの山小屋に行くこともできる。

当日は土曜日で満員とかでドミトリー3食付きで泊まった。夕食はスープ、エルク肉、ミートボール、フロッコリーがたっぷり、それにデザート、コーヒーであった。翌日の朝食はビュッフェ方式で好きなものをほしただけ、品数も豊富であった。ただ、始まりは8時と遅い。ランチを注文する人は、サンドイッチを作って袋に入れて持っていく方式。支払いは、ワインハーフボトルを入れて654NKであった。

(当時のレートで9000円) DNTの会員割引での価格である。物価の高いこの国で3食付きでこの値段はうれしい。支払いは、カードでもキャッシュでも可。カードが生活の至る所に入り込んでいる。山小屋でもだいたい使えるようだ。

なお、入国直前に、インターネットでDNTの入会手続きをした。ノルウエーでDNTの山小屋に3泊すると年会費の元が取れるらしい。

8月22日(日) ベッセゲン稜 イエンデスハイム、ムムルブー (Memurbu)

本日は、イエンデスハイムからムムルブー (Memurbu) までの行程。ガイドブックによると7時間、標高差1000mとされている、イエンデ湖の北側の山稜を歩くコースである。ここに有名なベッセゲン稜 (Bessegren) がある。南側のコバルトブルーのイエンデ湖の湖面が北側のベス湖の湖面より400mも低い瘦せ尾根である。左は400m切れ落ちている。

8:40にイエンデスハイムを出発。天気は曇りで寒い。はじめ700m登り、ピークのケルンでは気温4

度。1035m地点から250m近くの岩稜の下りになっている。右側が湖面に近いのに左側は400m以上ある断崖の下にコバルトブルーの湖面が見える。

この稜を越えて登り返し、最後に400mの急な斜面を下り、湖の畔にあるメムルブー小屋に着く。4:00。

この小屋は改築されたばかりのようでとてもきれいだ。4ベッドの部屋をあてがわれて広々と過ごす。シャワーはコイン式、10Kで6分。

夕食は、25人ほど。鮭入りクリームスープ、ゆでぶた、インゲン、人参、ジャガイモ。そしてデザートはムース、ピールは65K。食事後、疲れがどつとで、たっぷり寝た。支払いは、前納で724Kであった。ここはDNTの小屋ではない。

8月23日(月)メムルブーグリッターハイム(Glitterheim)

本日は、メムルブーからグリッターハイムまで約17kmの道のり。歩き始めに昨日下った400mを登り返す。これはつらい。

1時間余でようやく分岐。ここからどんどんKussatnet湖めがけて下ってゆく。湖の畔に降りると、ここから湖を右にみながら平らな道を進む。昨日と違って、ほとんど人はいない。スペイン人らしきグループを抜いた後、若者ペア(後にオランダ人とわかる)と抜きつ抜かれつで進んでゆく。

途中、左手に大きな滝があり、これを見る道に入り、また湖畔の道に戻る。初めて向こうから来る3人とすれ違う。そのほかには全く人と会わない。

湖と分かれて左に上り、台地をトラバスしたあと、吊り橋を渡る。地図では、夏の間だけ架かる橋とある。これを越えて、400mの登り、岩がががらの道をべ



ケルンを示す道



左右の湖面は400mもちがう

ンキのマークがあるケルンをみながら進む。視界は良好であるが、ガスに巻かれたら怖いところだ。

ようやく3:50に峠。グリッターハイムが見えているが、ここからだらだと下り、川を渡るために大きく右に迂回し1時間以上かかるようだ。はたして、ひたすら下っても、ちっとも近づいたような気がしない。結局、最後の吊り橋を渡り、Glitterheimに着いたのは5:15。8時間かかった。

グリッターハイムでは、23号室。一人用の小さな部屋だ。ビール65K、シャワーを浴び、夕食。カリフラワーのホワイトソース煮、挽き肉料理、ジャガイモ、サラダ、デザート。赤ワインをグラスで。宿泊客は25人くらい。天気予報は明日から1週間くらい雨。グリッターティンデンに登るのは無理なようだ、残念。疲れて夕食後、ぐっすり眠った。宿泊費668K。

8月24日(火) グリッターハイム→スピーターストゥレン(Spierstulen)

朝起きると雨。小屋前の温度計は4。8時からの食事を済ませ出発準備。雨支度をして9時15分出発。スペイン人(?)のグループと前後して出発。グリッターティンデンのピーク(Glittertinden 2465m)はあきらめて、迂回ルートを通る。残念。

平らな道を川に沿って1時間ほど歩くと標高1750mの峠まで300mの登り。雨が冷たい。気温も低下して、曇になる。とても止まっていられず、ひたすら歩くしかない。峠には大小5つくらいの池がある。越えると広い斜面をひたすら下る。途中、風をよける場所もない。オランダ人2人連れが歩いている他は人はいない。途中にあった大岩の陰でランチ。食べないと体温が奪われてゆく。登りの3パーティとすれ違つと、12:10にピークからの道の分岐を過ぎて、徒渉地点。



オランダ人の若者



3回徒渉してしばらく歩くと、スピーターストウレンへの急な下り。350mを下つてようやく到着。3時ちょうどで、約6時間の冷たい雨の中の行動であった。濡れたものを脱いで受付を済ませ、部屋に入る。部屋は一人用の小さな個室。温かいシャワーがとてもありがたい。人心地ついてから、本館で休憩。天気予報は、連日雨。残念だが、予定を変更して西へ横断するのはあきらめ、ここで2泊するににする。

夕食は、アスパラスープ、鱈フライ、ゆでた野菜、グリッターから道中をともにした2人と同席。そこでこの2人がオランダ人だとわかる。夕食後、早々に寝る。

#### 8月25日(水) 新雪のガルホッピゲン (Gathoppigen)

休養日の予定であったが、朝起きると雨は降っていない。天気予報は、昼まで曇りのち雨、となっているので、ガルホッピゲンに行ってみる。山頂まで標高差1300m。7:30に朝食。8:25出発。2005年に一度登っているので、山の様子はわかっている。8:50にユーバスヒュッテへの分岐、10:15には標高1900mまで登る。

この頃から、雪が所々に見える。昨日の雨がこの標高では雪になっていたようだ。さらに進んでゆくと、一面の雪とガスの中になり、12:20に着いたSvetnose (2278m)のピークでは、積雪が15〜20cm。視界は数メートル、風も出てきて寒い。この先小さなピークを2つ越えて雪原を登りつめると山頂、標高差は残り200mくらいなのはわかっているが、この天気で雪の支度もしていないので、ここで登頂を断念する。

標高2000mで8月に15cmの新雪!さすが、高緯度の山岳である。下山を開始。途中、岩陰でガスコンロで湯を沸かし、インスタントパスタの昼食。さらに下山を続け2時にスピーターストウレン。これで今回の登山行動は終了。



荒地に立つ道標

8月26日(木)ベルゲンへ

この時期には、「ヨ」に行くバスはないとのこと、タクシーを呼んでもらい、バス停まで行き(326K)、ソグンダル経由でバスを乗り継ぎベルゲンへ行く。

2泊の後、オスロ発、ヘルシンキで1泊の後帰国した。日本は、30を越える猛暑の中であった。数日前に、新雪の中を登っていたことが、真夏の夜の夢のようであった。

グリッターハイム  
小屋



Kussratnet湖

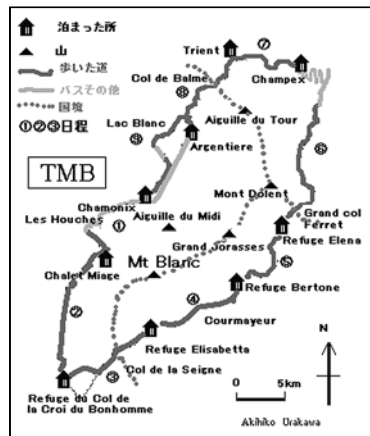
# TMB ツールドモンブランを歩く

ツールドモンブラン (Tour du Mont Blanc) は、アルプスの最高峰モンブランの周りにあるトレッキングコースで、フランス、イタリア、スイスの3カ国を約150kmにわたって歩くコースだ。2008年夏、9日間で歩いた記録である。今回歩いたコースを地図でたとると距離にして約120km登りの高度累計で7000m以上であった。

第1日 8月20日(水)

シャモニー (Chamonix Mont Blanc) ミアージュ小屋 (Chalet de Miage)

ジュネーブを8:00に出発したバスは、1時間半でシャモニーへ。ツリストオフィスで情報を集め、ミアージュ小屋の予約をし、買い物をして、バスでレズーシユへ。モンブランの登山口、ニーデグルへの鉄道の乗場ベルビユーへロープウェイで向かう。ベルビユーは雲の中。なにやら暗い幕開け。ここで道標を確認して、ミアージュ小屋へ向かう。標識では2:40。はじめ、斜面をトラバスする道、そこからピオナセイ氷河の末端を経て、吊橋を渡り、トリコット峠へ400m登り峠から600m下る。途中からガスが晴れてきた。ミアージュ小屋は集落の真ん中にある。庭のテーブルでコーヒーを飲んだりおいしそうなケーキを食べたりビールを飲んだりしている。15:50早めのチェックイン。シャワー、乾燥室、水洗トイレ、二段のカイコ棚式の一人1枚のマットのある寝室。シャワーを済ませ、外のテーブルでビール。4000m以上あるミアージュのドームの白い峰が見え隠れし始める。遠くで放牧された牛のカウベルの音。3時間ほどすると夕



食。陶器のデカンタのワイン。巨大なジャガイモ入りのオムレツ、サラダ、パン。ポリウムたつぶり。デザートのおいしいそうなケーキは、バス。食後、空は晴れてきた。が、9:00に寝てしまふ。まだ、時差ぼけの影響が残っている。1:00過ぎに目を覚まし外に出てみると、月が昇り始めている。写真を撮る。うまく取れるかどうか・・・寒くなって、またベッドに入り寝てしまふ。

第2日 8月21日(木)

ミアージュ小屋 (Chalet de Miage)    コンタミンヌ (Contamines)    ボンノム小屋 (Refuge du Col de la Croi du Bonhomme)

翌朝は7:30に目が覚めた。食事を済ませる。フランスの朝食は、カフェオレとパン、バター、ジャム、蜂蜜。ちょっと物足りない。霧の中だったが、見る見る晴れ上がり、正面にミアージュのドームがそびえている。

荷造りをして、8:40に出発。400mの登りで9:20トゥルク小屋に着く。すばらしくいい景色。ここからコンタミンヌへの下り。どんどん下って10:15バス停に。バスまで時間があるので、町まで降りてしまふ。町は結構にぎやかだ。ここで本日の宿ボンノム小屋へ予約電話。1/25000の地図2枚を買い、銀行のATMでお金を下ろし、午前中に3本あるバス(1€)でノートルダムドラゴルジュへ。

ここから登り始める。結構きつい。人がたくさんいる。持ち物から見ると日帰りのようだ。1時間でナンポーラン小屋、さらに1時間でバルム小屋。ここから3時間半の行程。ベジェ湖の分岐のところ、家族連れやハイカーは左の湖の方に行き、TMBを歩く人の数はごくわずか。ボンノムのコルに向けて、歩いても歩いてても景



ボンノム小屋への道



ミアージュ小屋



TMBの道標

色の変わらない道を進む。ようやく15:30に峠。標高2300m。沢では高山植物が咲いている。

峠を過ぎると緩やかな登りでトラバス。1時間でCroix du Bonhommeのコル。眼下にCAFの立派な小屋が見えている。チェックイン。4人用の2段ベッドの部屋にフランス人の若者が一人いた。この若者は、自炊しながら歩いている。シャワーを済ませ、ビール3・8€。7時から食事。夕食時には、約50人が食堂にいた。収容能力100人というから、半分くらい。

スープ、ビーフブルギニヨンとクロセットという名の Pasta、パン、チーズ、ケーキのコース。うまい。誰かの誕生日だったらしく、ろうそくを立てたチーズケーキとシャンパンが回ってきた。

食事中に小屋の従業員が、電話がかかっているからでろ、という。一体誰かと思ったら、シャモニー観光局のベルナデットさん。メールが手違いで届かず今日見たとのこと。心配で電話をしてくれたのだそうなの。何とかなってる旨伝えると、最終日のシャモニーは大きなイベントがあるので宿をとっておくほうがいいとのことなので、お願いした。

夕暮れ、夕焼けが美しい。シルエットのアイベックスまで出てきていい景色だった。

第3日 8月22日(金)

ボンノム小屋 (Refuge du Col de la Croix du Bonhomme)    セーニユ峠 (Col de la Seigne)    エリザベッタ小屋 (Refuge Elisabetha)

6時起床6:30朝食、支払い45・5€、エリザベッタ小屋の予約をしてもらう。7:35出発。昨夜、ベルナデットさんから今日の天気予報は午後雨所により雷、と聞かされたので、とにかく国境を早く越えなければ

ば、とあわただし。

Croixまで登り返して、フル峠をめざす。このコースはVarianteとなっているが、峠の雪解けが遅いかららしい。8月末なら大丈夫だろうとこちらをとる。シャビユーの村を経由するより近く自動車道路を通らなくてもよいからである。

フル峠に8…20。峠には少しであるが残雪があった。この傾斜で雪に覆われていれば、アイゼン無しでは怖いであろう。峠を過ぎると、どんどん下ってゆく。途中、登りのパーティに何組があっただけで、見渡す限りの広々とした景色の中をただ一人で歩いてゆく。途中から車が通る道になり、9…55グレーシャーの村に着く。

駐車場があり、ここから歩き始める人たちもいた。広い道を30分歩くとモッテ小屋。ロバと馬が何頭かいる。ここでは、頼むとロバが荷物を国境のセーニュ峠まで運んでくれるそうだが、横目で見ながら、九折れの急坂を登ってゆく。時々、荷物を運んでいく馬が通る。途中から小雨が降り始め雨具を着る。峠が遠くに見えているが、歩けども歩けども景色が変わらない。

12…35ついに峠に着く。雨は上がった。セーニュ峠。フランスとイタリアの国境。標識の石があるだけで、何のことはない。が、イタリア側には、これまで見えなかった山々が見える。そのなかにモンブランの山頂もある。ここから先は、フランスではなくイタリアなのだ。ここで湯を沸かして、カップ・スパゲッティを作り昼食。昼食後、峠を下り今夜の宿、エリザベッタ小屋に向かう。途中の小屋の看板や標識がイタリア語に変わっている。道が緩やかになったころ小雨。もうすぐ小屋なのだ。が、雨具を出す。

道は平らになり両側が削られて、U字谷の底を歩いている感じ。しばらくすると



エリザベッタ小屋

右側の斜面の氷河の下に小屋が見えてきた。これがエリザベッタ小屋。

なお、これまで、「小屋」という言葉で表現したが、この地域では、石で小屋を作っているので、日本の小屋に比べて、がっちりとしている上、規模も大きい。3〜4階建の建物で、フランス語では、REFUGETという言葉であらわされている。雨の中、坂の上のエリザベッタ小屋に駆け込む。

チェックイン、ここはイタリア語の世界だ。シャワーは50リットルのコイン、夕食は7時、寝室はここ、などを聞いて、落ち着く。ここはイタリア山岳会が経営している。3段ベッドで、建物は3階建て、結構合理的に設計されている。シャワーを浴びて一息ついてビールは2・5€、夕食は野菜スープ、豚肉ソテー、マッシュポテト、グリーンサラダ、りんご1個。途中、ベルナデッドさんからシャモニーの宿が取れたと連絡あり。日本語を話すのが懐かしい。

第4日 8月23日(土)

エリザベッタ小屋 (Refuge Elisabetta)    クールマイユール (Courmayeur)    ヘルトーネ小屋 (Refuge Bertone)

6:00起床、6:30朝食、7:00出発。支払い48・10€。ベルトーネ小屋の予約をしてもらう。小屋を出てコンバル湿原の脇を通る道を1時間で橋。ここから尾根へ取り付く。ウシの群れの中を通ったりして600mを1時間半で登り標高2440mの尾根に出る。谷の向かいにはモンブラン山頂が見え隠れしている。ここからこの尾根の左側にモンブランからグランドジョラスまで連なる山脈を見ながらの「山上のプロムナード」。真っ白なモンブランの頂は雲に隠れては見えず、左前方にはグランドジョラスの黒い山体が見えてくる。1時間半ほどスキー場の山小屋「古い家」ピーユメゾン、ここから下りリフトがあるはずが、動いていない。クールマイユールまで歩いて降りる。12:30クールマイユールに着く。石畳の細い路地を抜けて、バスターミナルへ。ここでトマト味のパスタの昼食。切手を買いはがきを投函し町の東側に抜ける道を通ってベ

ルトーネ小屋へ。1000mの登り。フランス人の子供のグループと抜きつ抜かれつ歩く。15:45ルトーネ小屋。モンブランを望む絶好ポイント、だが雲をかぶっている。日本にはがきを書いて15枚ほど送る手配。このころモンブランの雲がなくなる。フランス側の景色とは違ったモンブランの姿。夕食は19:00、フランス人のグループとおなじテーブル。野菜スープ、ソーセージの煮物、卵とチーズをオープンで焼いたもの、えんどうとにんじんの煮物、デザートは缶詰のフルーツ、ワイン0.5リットル、前の席のフランス人と話を少々、カメラのバッテリーを充電、ここは支払いは夜だったようで、明日の朝支払うように言われる。システムが違うんだなあ。夜中に起きると、降るような星、星空とモンブランのコントラスト。写真を撮らず、残念。

第5日 8月24日(日)

ヘルトーネ小屋 (Refuge Bertone) エレナ小屋 (Refuge Elena)

6:45起床。朝食、支払い45€。エレナ小屋の予約をしてもらう。快晴。7:50出発。10分で展望台。モンブランからグランドジョラスまでくつきり。今日の稜線は、左手に山岳屏風絵の雰囲気。9:00ピークで一休み。白いモンブランと黒いグランドジョラスが対照的。ピークに柵がある。何だろうか？稜線にモンブランを映す池がある。カール壁を歩き、10:10 Tefe de la Troucheのピーク。絶景！ここでしばし休憩。昨夜話したフランス夫婦がいる。ここは、ツールドモンブランの中でも見所の一つだろう。早回りのツアーでは、クールマイヨールからバスでアヌーバまで行ってしまい、省略しているようだ。急な下りを1000m、峠に出る。左に行けばTMB、多くの人は右に降り、クールマイヨールに戻っている。昨日から、土日に一泊の旅をしに来たのだろう。TMBは左のカールに続いている。カールの底に小屋があり、



池に映ったモンブラン



ここでガスをつけ昼食。ここから、地図上ではTMBは峠を越すようになってきているが道標は下るようになって  
いる。また、フランスのIGNの25000分の一地形図では、3630のCHAMONIXと3621のST-  
GERVAISの両方から外れているので注意。(50000分の一には入っている。)2521mのアントレ峠を  
越える道をとる。峠から最後のモンブランの姿。下るとボナッチ小屋、さらに下って自動車道路に出る。バ  
ス停を確認できず、少し歩くとバスが通過。暑い道路をテクテク歩く。終点アヌーバで一休み。ここから、  
エレナ小屋に向け、200mの登り。途中で初めての日本人グループに会う。程なくエレナ小屋。この小屋  
は新しい。ベッドもシャワーもゆったりと作られている。夕食にはパスタ、肉と野菜、チーズと卵を焼いた  
もの、リンゴがでた。21:00過ぎ、子供が騒々しく引率者に怒られていたが、寝た。

第6日 8月25日(月)

エレナ小屋(Refuge Elena) フェレ峠(Grand Col Ferret) シャンペ(Champex)



イタリア・スイス国境のフェレ峠

今日はイタリアからスイスに行く日。朝7時朝食、7:40出発。イタリア・スイス国境のフェレ峠への登  
り。8:55に峠に着く。これまで歩いたイタリア領が見渡せる。スイス側はゆった  
りとした下りの道。フリーからシャンペまでバスで行くつもりでゆっくり下る。フ  
ーリに11:30。村の入り口でバスの時刻表を見て、スーパーでの買い物は後にして、  
レストランで昼食。マカロニの料理を注文すると、パン、サラダにペンネ・ハム・  
ジャガイモにチーズをのせてオープンで焼いたものがでた。おいしかった。さて、  
次は買い物、と思いきや、スーパーは12:00~14:00昼休み。ここはイタリアなの  
か?バスの時間まで1時間半以上あるので、村をぶらぶらしていたら、それらしい  
バスが通った。変だなーと思いつつバス停はどこか聞くと、郵便局の前だという。  
その時刻表を見ると、8月21日からダイヤが変わっている!次のバスは2時間半

後！このまま待っているのもいやなので、途中からバスに乗ることにして、TMBを歩き始める。途中FORI付近で15:00。ここからシャンペまで歩くと6時過ぎるので、バスに乗る。バスは鉄道のオルジエール駅経由でシャンペに向かう。駅での待ち合わせ時間に宿を予約した。17:10シャンペ着。バスは20人くらいの子供が乗っていてうるさい。走り回り、途中で運転手が車を止めて、子供たちをしかって、その引率者の大人にも何か言っていた。この国も一緒か……。バス停に着き運転手に宿の場所を尋ねると子供をつれて来て、この子の家が宿だと教えてくれた。一緒に歩いて行ったのがこの日の宿、エンプロネールであった。一人用の部屋は空いてないのでドミトリ。この宿の寝室は窓に向かって居心地がよい。荷物を片付けて、シャンペ湖のほとりまで散歩。何軒かホテルや店が並んでいる。雑貨屋で絵葉書を買ひ、郵便局の自動販売機で切手を買ひ湖畔のレストランでビールを飲みながら葉書を書いた。いい景色だ。宿に戻ると夕食。野菜サラダとチキンカレー。大館でTAをやっていたというスコットランド人夫妻（奥さんはアリゾナ出身）と同席し、いろいろと話をして盛り上がる。

第7日 8月26日（火）

シャンペ（Champex） フォルクラ峠（Col de la Forclaz） トリアン（Trient）  
今日はフォルクラ峠まで。晴天。8:00に出発しシャンペの村を過ぎ、林の中の道をから草原の道へとを500m登ったボピヌというところで昼食、途中、マウンテンバイクの3人連れとすれ違う。こんな所に、という急坂。遠くスイスアルプスが見えている。そこから400m下るとフォルクラ峠。車の行き交う音がうるさい。峠にも宿があるが、ここから200m下ったトリアンで宿を探す。ルレドモンプランという宿で個室OK、49・3€久々に広い部屋でくつろぐ。この宿では5時から7時まで雑貨屋の店が開店する。村の人の買い物時間。食料を少々調達する。夕食は、



遠くスイスの山を望む



スイス・フランス国境のバルム峠

スープ、サラダ、チキン煮込み、えんどう豆入りライス、このルレ (Relais) とは、リレー、という意味で宿駅ということらしい。久々に、広々とした部屋で寝る。窓からは、アルプスらしい山と教会の景色。

第8日 8月27日(水)

トリアン (Trient) バルム峠 (Col de Balme) モンテ峠 (Col des Montets)  
アルジャンティエール (Argentiere)

今日は、バルム峠を越えてフランスに戻る。7:50に出発。8:20村はずれまでは平ら、ここから樹林帯の急登が続き、9:35にやっと樹林帯を抜け、はるかにバルムの小屋が見える。そこから1時間、10:40についにバルム峠へ到着。峠に立つと、突然、モンブラン、シャモニ針峰、赤い針峰という大展望。「峠を越す」という言葉はまさにこの通りだと実感。30分ほど景色を眺めた後、TMBのルートに沿って下山開始、途中でレストランに寄り昼食。メニューを頼むと焼いた骨付きの牛肉、野菜付け合せそしてビールで一人で祝杯をあげる。

その後、モンテ峠に下り、本日はアルジャンティエールに泊まることにして下山する。観光案内所に行くと15:00から。30分くらいぶらぶらし再訪。宿を探してもらった。街中のホテル。53ユーロ。宿の窓からモンブランが見える。夕食は隣のレストランでシャンピニオンパスタとワイン。まあまあだったが、ウェイターの態度がよろしくない。宿に戻り、モンブランの夕暮れを楽しむ。

第9日 8月28日(木)

アルジャンティエール (Argentiere) フレジエール (Fregeres) シャモニ  
(Chamnix Mont Blanc)



バルム峠からモンブラン



アルプスの王者アイベックスと  
メールドグラス氷河

朝起きると、窓から絵のように、モンブランとエギユドミディに陽があたっているのが見えている。今日は、シャモニーまで電車で行って、予約していたホテルに荷物をおいて行動とする。ホテルは観光案内所のベルナデッドさんに取ってもらった。ホテル。今回最大の驚沢。駅のそばのメルキュールだ。1泊の泊まり賃が4日分の生活費。案内された部屋はペランダが付いていて、そこからモンブランが見える広い部屋だ。シャワーを浴びた後に「空身」に近い格好で出発。Les Prazaまで歩いて行く。ここからフレジエールにケーブルで登り、さらにリフトでindex。こんなに楽しいのかしら、と思っている間に着いてしまつ。16€。バラグライダーでフワフワと飛ぶ鳥人たちとその入門者がたくさん。ここからラックブラン Lac Blancに向かって歩く。空身の軽さよ！12..30ラックブラン。氷河が溶けたコバルトブルーの湖が2つ。反対側にはモンブランとそれから続くアルプス。レストランで昼食。シャンピニオン入りオムレツ。その後、昨日のモンテ峠に向け下る。人も少なくなりこれこそTMBの雰囲気。15..00に峠。昨日の峠だ。ここから、鉄道のMontroc駅に行く。15..30に着くが、電車は16..11までない。来た電車はMont Blanc Expressで、シャモニーに戻り、行動終了。シャモニーを出て9日間、毎日毎日歩き続けてシャモニーに戻ってきた！宿で風呂に入りくつるぐ。その後、観光案内所のベルナデッドさんに会って礼をいい、話をする。ちょうどシャモニーでは翌日ウルトラトレイルのスタートで、このレースでは、今回十日かけて歩いたコースを22時間で走るらしい！翌日は、7..45にシャモニー駅前のバスに乗り、ジュネーブ、アムステルダムを経て、帰国した。ひたすら歩いた12日間の旅であった。



ラックブランから見るモンブラン

# カナディアンロッキーを旅する 2007年8月15日～27日

カルガリー

ロサンゼルス発のAC573便は遅延との表示が出ていた。本来の接続時間6時間に加えて長い待ち時間だった。もっとも、アメリカの入国手続きで延々並ばされた1時間以上が差し引かれる。ただのトランスファの客にも両手の指紋を取り、顔写真を撮影する。荷物も、全部持たされるし、靴を脱いでの検査もある。PCも出させる。これが「テロとの戦い」。かくして、ようやく、夜23:00に、カナダの中央平原の西、ロッキー山脈の東のふもとの大都市カルガリーに到着。タクシーで予約していた宿へ向かう。着いてみると、そこは、よくアメリカ映画で見る「モーター」だった。いい経験だ。部屋は広くベッドも大きい。

翌日、カルガリーの町を見物。ここは、東から「開発」

を進めたその昔、中央平原の最後、ロッキー山脈への入り口の町であった。人口87万人のカナダでは大きな町である。泊まった宿からは、トラムウェイという電車四駅で町の中心に出る。この電車は中心部では、路面電車になり、無料らしい。「グレイハウンド」のバスターミナルに行き、バンフまでの便を予約し、チケットを購入。その後、町を歩く。美しい公園でランチを食べたり、遊んだりする人々の姿が印象的であった。博物館に行くと、とにかくいろんなものが陳列している。その中で、先住民（インディアン）の生活と文化についての展示、カナダの開発の歴史に



バンフの町とボウ河



トータムポール

ついでに展示には、特に力が入っている。また、MEC (Mountain Equipment Coop) は、巨大なフロアを持つ山やアウトドアの道具屋であり、カナダのアウトドア活動がどのようなものかを見せてくれる。トレッキング、ハイキングをはじめ、クライミング、サイクリング、カヌー・・・いろいろな道具が広いフロアに並んでいる。が、5ドル払ってメンバーにならないと、買い物ができない、本来の「COOP」であった。バンフへ

翌17日は、7:30のバスでバンフへ移動。グレイハウンドのバスは初めてだ。荷物には行き先を記したタグをつけなくてはいけない。バスはカルガリーの町を出てから国道1号線(トランスカナダハイウェイ)を西に向かう。1時間もすると鋭い山々が道の左右に見えてくる。8:54にバンフ到着。夏のバンフは泊まるところがない、と聞いていたので気がかりだったが、ツーリストインフォメーションで宿のリストをもらい、そこから電話すると、すんなり3泊する宿が取れた。ヨーロッパとは違い、ここはツーリストインフォメーションは、リストを配り電話を貸すだけで、予約を取ってくれない。「全部自分でせよ」という姿勢である。このあたりは、いろんな国の人間が訪れるヨーロッパとの違いだろうか。泊まったのは、町のはずれにあるB&Bである。荷物を置いて早速町の探検。とりあえず今日は「トンネル山」に登ることにする。町の中心のバンフ通りは現在工事中で通れない。はじめにツーリストインフォメーションに行き、いろいろな情報を仕入れ、地図を購入。次にATMで現金を入手。スーパーでサンドイッチを購入。バンフは人口6000人余の小さな町で、日本で言うなら「村」である。中心街も30分で一通り回れるくらいだ。11:00ころ、トンネルマウンテンめざして出発。町の中心から東へ、住宅地を抜けると、しっかりとしたトレイルが続いている。下ってくる人も多い。ジグザグにつけられた道をどんどん登っていく。1時間余で頂上。バンフ



バンフから見たランドルマウンテン



スクールバスのようなシャトルバス

の町が真下に見える。また、周りには、巨大な岩の塊をドンドンとばらまいたような岩山が見える。カスケード山、ランドル山、ノーケイ山などである。川の流れば青く美しい。川に沿って鉄道が走っている。昼食のサンドイッチを食べた後、下山。1時間弱で町へ。見物した後に宿に戻る。

翌日はシャトルバスでサンシャインメドウへ行くことにした。ヨーロッパバスと違い、カナディアンロッキーはハイキングコースの入り口までの交通機関がタクシーしかない。また、入り口には電話がないところも多いので車の手をどうするかが問題である。サンシャインメドウは、冬は大スキー場になると夏には高原まで専用のバスで上がり、リフトも動いている。ハイキングコースになっている。入り口までは、車で行くか、パンフの町から1日1便出ているシャトルバスを使う。バスは町外れのパンフフェアモントホテルを8:15に出るらしい。予約の取り方がよくわからない。町を歩いていたら、たまたま、このスキー場のポスターを掲げた運動具屋があり、そこで予約。8:00に町中のロイヤルホテルに黄色のスクールバスみたいなバスが来るとのことであった。

#### サンシャインメドウ

翌日、朝食後に宿を出て、指示された駐車場で待っていたが、バスが来ない。そのうち、黄色いバスが通過してしまった。あわててタクシーを拾って、フェアモントホテルまで追いかけ、バスに乗り込んだ。バスには6人の日本人がガイドとともに乗っていた。聞いてみると、バスはこのあと、町の中心の駐車場に寄って行くとのこと。8:30まで待ってればよかったのだ。そんなトラブルはありつつも、バスは町を出て、トランスカナダハイウェイに出て、スキー場への道を走る。山道に入り10分くらいで道の途中にエルクやマウンテンゴート（ヤギ）がえさを食べている。スキー場の駐車場についた後、バスは、ここからの客を乗せ

て、スキー場内の山道を登り始める。9:30にスキー場サンシャインヒレッジ着。バスの運ちゃんの方がハイキングの注意などを述べた後、下車。メドウ Meadow とは「牧草地」転じて「高原」。3つの湖があるハイキングコースがある。最初にアッシニポインに続くトレールを、ハワードダグラス湖まで往復することにした。地形図を見ると緩やかに等高線が走る高原である。実際に歩いてみると、思ったより傾斜がある。途中、地形図をよく見ると、等高線の間隔が、25mである。日本の10m等高線を見慣れた目からは、緩やかに見えるはずだと納得。とにかく4kmの道を歩くが、人がいない。大きな荷物を持った2人組に会う。彼らは、キャンプしてアッシニポインのふもとまで行くのだろう。3時間かけて往復して、湖をめぐるコースに戻ると人でいっぱいであった。ロックアイランドレークをはじめとする3つの湖は美しい。高台の展望台に登ると多くの山々が見えている。横縞の地層が見られる山もあるし尖塔のような山もある。サンシャインヒレッジに戻り、16:30のバスに乗る。翌日はここからヒリーバスに行くことにして、予約を取る。

パンフに戻ると、天気は急に悪くなり、入道雲がわいてくる。突風が吹き、大粒の雹が降ってくる。体に当たると痛い。雨宿りをした後、ジャスパーまでのバスを予約。これは、観光ツアーなのだが、アイスフィールドパークを通ってジャスパーに行くツアー。ユースホステル会員証で割引がある。カナダの、グレイハウンドも、ユースホステル会員証での割引がある。

翌日も朝、シャトルバスに乗ってサンシャインメドウに。天気はよくない。9:30にバスを降り、サンシャインヒレッジからヒリーバスへの道をたどる。小雨が降ってきて、雨具を着る。広々とした高原を進む。植生限界より少し上なので両側には、荒地が広がっている。遠望は利かない。湖を回る道から分かれ、尾根を越え少し下ったところから樹林帯に入る。両側は針葉樹林で下草も生えている。人影はまったく見えない。道は、



アッシニポインへ向うトレール



林の中を細く続いている。「熊が出たらいやだなー」などを考えつつ、1時間余で、シンブソンパス（シンブソン峠）。ここはまったく見晴らしが利かない。雨が強くなくてきたので、ヒールーパスまで行くのはやめにしてここで引き返す。1時間余森林の中を戻る。途中、この日初めて登山者とすれちがう。尾根まで戻り、昼食。このころから天気は持ち直し、雨は小降りになってきた。こんなことならヒールーパスまで行けばよかったと後悔。帰りのパスまでは時間があるので、湖経由でサンシヤインビレッジまで歩く。14…30のバスに乗り、パンフに戻る。宿へ帰る途中、パツファローネーシヨンス博物館の売店でお土産を購入。

#### ジャスパールへ

20日は、8…30発のジャスパール行きのツアーバスに乗り込む。一行は9人。大型バスに、てんでに席を取って座る。一人141\$では赤字かな。トランスカナダハイウェイ（1号線）を通り、キャツスルマウンテンを右に見る。巨大な岩の塊。レークルイズに着くと、バスは左に入り山の中の道を進む。ルイズ湖に出る。ピクトリア氷河を正面に、青色の美しい湖で、畔にフェアモントシャトーレークルイズというホテルが建っていて、古城の趣を出している。バスは、1号線からアイスフィールドパークウェイをたどって、ポウ湖、ペイト湖と短い停車の後、ちょうど昼時にコロンビア大氷原へ着く。1時間の昼食時間の後、バスを乗り換え、雪上車に乗ってアサバスカ氷河の上に行く。コロンビア大氷原から流れ出る6つの氷河のうちの一つである。とにかく寒い。長袖の上に雨具のゴアの上着をはおる。観光客は、真夏の氷の上で遊んでいる。10分くらいの滞在の後、雪上車に乗り、観光センターに戻る。人でいっぱいである。コロンビア大氷原は、分水嶺になっており、ここから太平洋、大西洋、北極海へ注ぐ川が流れている。なんとも雄大な話である。また、アサバスカ氷河も、この数十年で大きく後退している。それが、展示していた昔の写真との比較で、



シンブソン峠

明らかにわかる。ツアーのバスは出発し、両側に岩の塊のような山々を見ながらアサバスカ川に沿って下っていく。途中、アサバスカの滝を見物して、ジャスパーの町に入る。

ジャスパーでは、町の真ん中にある古いアサバスカホテルに泊まる。ジャスパーは、前回のカナダ旅行の時に立ち寄った町であるが、そのときは、冬の真っ只中で、列車の1時間くらいの停車時間に町を歩いただけだった。ジャスパーの町は、バンフよりさらに小さな町で人口も4000人くらいだという。少し歩くと町並みも終わってしまう。

## マリンレーク



マリンレーク

21日(火)はマリンレークへ行くシャトルバスに乗りこむ。日に4便。マリンレークは、カナディアンロッキー最大の湖で観光船が出ている。広々とした湖である。そのマリンレークの畔に、オパールヒルという3時間くらいの軽いハイキングコースがある。今回の旅行では、膝を痛めていたため、しつかり歩くことができないのがもどかしい。マリンレーク湖畔から標高差400mの登りである。登山口を探し回って、ようやく見つけた。熊に注意、という警告が書かれている。天気は悪く、寒い。雨模様なので、途中から雨具を着る。1時間の急登でループの分岐点に出る。左の大回りルートを取る。樹林帯の中を進んでいくが、突然、見晴らしがよくなる。左側に、頂上に雪がかぶった山が連なり、右には小さな丘のピークが見える。これがオパールヒルのようだ。広々とした草原である。この草原を進んでいくと、十字路に出る。間違えて、まだ上るのだと左の道を取り尾根を200m以上登ると、眼下にマリンレークの青い色が鮮やかである。



オパールヒル入口の掲示版

荷を降ろしルートを確認する、なんと、コースから外れてしまっている。ここで景色を見ながら昼食にする。寒い。温度計を見ると3。手袋もないので手がかじかんでくる。8月でこうである。大急ぎでサンドイッチを食べて下山。十字路まで戻ると、樹林帯の始まり。急坂をどンドン下る。途中、2人、4人の若者のグループとすれ違う。『熊はいたか?』ときかれ、いない、と答えると、笑っていた。歩き出すうちに温まってきた。あつという間に登山口に帰り、レストランで飲んだスープがおいしかった。バスの時間まで、湖畔を散歩。広々とした、しかし夏にもかかわらず、寒い湖である。3:15のシャトルバスでジャスパリーに戻る。

ジャスパリーにて

翌日は、マウンテンバイクを借りて、トレールをたどってみることにした。バイクを借りるとき、店の女の子にここに行く、というとそのコースは「タフ」といい、サスペンション付きの自転車を選んでくれた。国道を走ると、カナダの大きさを感ずる。橋を渡り、トレールに取り付く。サイクリングトレールは、すべて番号が打たれており、その交差点、分岐点には地図の看板がつけられている。Old Footという、昔の岩のあるトレールをたどってみる。とにかく、「自転車道」ではない、普通の山道。登りはギアを切り替え、下りはルート選択が大変だ。親子4人の家族連れが走っていた。アサバスカ川沿いのルートを取って戻ることにする。こちらもなかなかの道で、ところによっては、左側が数十m川まで切れ落ちている。こういうところは安全第一で、自転車から降り、押していく。なんとか自動車道まで戻ったが、カナダのマウンテンバイクはすごい、と感じた。ジャスパリーパークロッジを通過して町まで戻ったのが3時。ハイキングとは違った疲れ方の一日であった。

翌23日は、ジャスパリーエローヘッド博物館へ。小さな博物館ながらカナダ西部の「開発」の歴史を展示している。ここに見えるべきものは、アルバータ山のピッケル。横有恒らのパーティーが、カナディアンロッキーの第5の高峰、マウントアルバータに初登頂したのが1925年。昔、横の本(山行)を読んだが、記

憶に残っていなかった。改めて、これは大事件だったのだ、と感じた。第二登まで20年余。初登の際に山頂に置いてきたピッケルの上部をアメリカ隊が回収しニューヨークのアメリカ山岳会に持ち帰り、第5登の長野高校OB隊が下半分を持ち帰ったという「因縁」のピッケル、これが飾られていた。物語としても面白いが、それ以上に横有恒らの業績をいまさらながら認識した。帰国後再度読み直した横の「山行」では、ジャスパーに鉄道が入った直後にアルパータ登山が行われたようで、その当時の記述が面白い。彼らは、パークロッジに泊まり、ここを拠点として、登山活動をしたようだ。バス会社のプリュースターの名も「馬方」の名で出てくる。

#### カムループスへ

その後、12・15のグレイハウンドのバスでロッキーの西の麓、カムループスへ。バスは、ロッキーの最高峰ロブソンの麓を通るが、残念、山頂部は雲に隠れている。この前、鉄道で冬に来たときには、くつきりで見えていた。バスは、どんどんと下っていく。途中のブルーリパーというところで休憩。この地名は、横の「山行」の中にも登場する。

山地と平原との境にカムループスの町はある。ここは、トンプソン川の合流地点で、交易の町として発展してきたようだ。人口6万人余りの町である。町を散歩していたら、公園に赤い鳥居がある。何かと思って行ってみると、この町が、京都の宇治市と姉妹都市で、公園の一角にそのモニュメントがあるというわけだった。トンプソン川の雄大な流れの前の赤い鳥居。ちょっと変わった景色であった。

#### バンクーバーへ

一泊の後、旅の終わりは、太平洋の港町、バンクーバーへ。この町は、北側に山がありハイキングコースもいくつがあるが、天気が悪いので、ゴンドラのかかって



グラウス山の樵のショー

いるグラウス山へ行った。トータムポールがあったり、「樵のショー」をやっていたり。ここで見たグリズリ  
ー熊。これがカナダの山中に居るのだ。改めて、熊と会わなかったことに感謝して旅の終わりとなる。最後  
に、カナディアンロッキーのピークに立つなら相当な覚悟と準備が必要、トレッキングはレンタカーを借り  
どこかに長居するのが得策、カナダ山岳会の山小屋を使う山旅も面白そうだ。



アッシニボイン



ボウ湖



カムループスの町

## ポーランドの山 Rysyに登る 2006年8月

カルパチア山脈の東部ハイ・タトラ山地にある、Rysy（リシ、リシイ、リスイ）2499mに登った。

「カルパチア山脈」といってもなじみがない地名である。映画「タイタニック」で、救援に来た客船が「カルパチア号」という名であったのだが。ヨーロッパの東の延長がカルパチア山脈である。

その中で、スロバキアとポーランドの国境に沿って東西に延びる山地が「ハイ・タトラ山地」（高・タトラ ポーランド語ではTatry）と呼ばれている。最高峰ゲララホフカが2654m、標高2500mくらいの山が連なっている。南のスロバキア側では、2634mのロムニツァ（Lomnica）までのロープウェイがあるなどの山岳リゾート地であるが、この山々の中で、ポーランド側の最高峰が、リシイ2499・6mである。

ポーランドの南部にある古都クラクフから、約100kmのところには山岳観光地ザコパネ（Zakopane）がある。この町が登山のベースになる。クラクフからバスで2時間半〜3時間で到着する。

### ザコパネ

8月16日午後、ザコパネに到着。バスターミナルから10分少し歩いたところに中心街があり、インターネッ卜で探しておいたホテルのromadaに入る。シャワー共同、1泊106ウズオティ（以下社と表す）の気持ちの良い部屋である。（1社 35円）。地図は前もってワルシャワに住む知り合いに頼んで入手していたので、ザコパネからバスに乗り、そこから歩くことはわかっていた。バスの時間を聞くと、始発が6:30であ



モルスキイ・オコ



ザコパネの中心街

つたが、朝食の後のバスが7:30にあるという。そうかと、軽い気持ちで聞いていたのだが、後で後悔することになる。

ザコパネは、考えていた以上のリゾート地で、中心の通りは夏の軽井沢のようになぎわいである。夕食をすませ、翌日の昼の食料を買い、宿に戻り地図を見てから寝る。登山口まで

翌17日、5:00過ぎに起きると、天気は良好。支度をすませ荷物をもって7:00に食堂に行くが開いていない。フロントで何とかしろというが、係の女の子は「連絡しても誰も出ない」・・・そうこうしている内に10数分経過。ようやく開く。バスが出るまで15分しかない。しかたなく、ジュースでパンとハムを流し込み、大あわてで出発。食べた気がしない。ホテルの前に運良くタクシーがいたので、バスターミナルまで乗ってようやく間に合う。6:21。バス停で乗るバスを探すのだが、Polana Polenskaに行くバスがわからない。手帳に書いた文字を見せると、道路の反対側にあるマイクロバスを教えてください、ようやく乗り込む。地図にはバス終点の場所に、Polenica Biatozainskaと書いてある。朝食からバス出発まで30分は短すぎで、本当なら、宿の朝食はバスして、6:30のバスに乗り込むべきであった、と後悔する。

バスは、満席で出発。途中、中心街のそばのバス停で何人かが乗り込む。40分ほどで終点。7:21を払い下車。広い駐車場に売店が有り、テーブル・椅子を置いてコーヒーなど飲んでいる。オレンジジュースを3:21で購入。帰りのバスを確認。15:00、15:40、16:20、17:00、17:40、18:20、19:00。最終は19時ちようど。それまでに戻ってこなくてはいけない。コースタイムが片道5時間だから、往復する



馬車が走っている

と余裕はない。ここでも、始発にすればよかったと後悔。が、しかたがない。8:20に歩き始める。入口にゲートがあり、入園料だかをとっている。4社払う。100人ちかくのごどもの団体と一緒にいる。中学生くらい。引率する教員らしきおとなもいる。ゲートを過ぎたところに、観光用の2頭立ての馬車がいる。だから道を約10km歩くのでここで少し稼がなければ、と脇目もふらず歩き始める。舗装された広い道を歩いていく。子供の団体を抜こうと少し急ぐ。両側は高い木の林だ。約30分で滝のところに来る。大勢が休んでいる。移動式のトイレがずらりと並んでいる。横目で見ても、通過。途中で馬車に追い越される。当然のことだが、人が急いで歩いても、馬車の方が早い。時間の短縮と、体力の温存を図る目的に利用するのもいいかもしれない。

リシイへ

ひたすら舗装道路を歩き、10:00に湖の畔に着く。Morskie Oko(モルスキ・オコ)という名の湖だが、氷河のカールの底がモレーンでふさがれて水がたまった、丸い形の湖だ。モルスキは湖、オコは瞳だそうで、青い瞳のような澄んだ水が印象的だ。(英文パンフレットではLake of Eyes)。畔には建物がある。これは、



モルスキイ・オコのロッジ

レストランのようだ。ここで10分休憩。湖畔には一周する道が付いている。ちょうど対岸あたりに上に登る道が見える。左の道を選ぶ。30分は湖に沿った平らな道。そこから上の湖まで標高差200mを30分で登る。上の湖も丸い形のカール底にできたもので、Czarny Staw pod Rysami(チャルニ・スタフ・ポトゥ・リサミ)「リシの下の黒い湖」だそうだ。透明な青い水をたたえている。ここまでが、観光客が来るところだ。ここから山頂まで約1000mの急な登り。3時間かかる。

さて、この湖を半周するとカール壁を登る道が始まる。高度差約500mのカール壁をジグザグに登っていく。大きな石で道はしっかりつけられている。ところどころに花が咲いている。下に2つに湖がくっきりと見えている。とても美しい。尾



根の先端の広い岩場でカール壁は終わり。

ここから岩稜に取り付く。標高差500mくらいの岩稜につけられた鎖場の連続である。岩自体はしっかりしているので落石などはあまり心配しないがトラバースなどで高度感がある。天気がよいので、2つの湖が足下に見えている。下山中のグループと鎖場ですれ違うために、時間のロスが非常に多い。タターツと登り、待ち時間。この繰り返しなので、登高のリズムも崩れるが、ただひたすらに高度を稼ぐ。交わされる声は「ジンドウブレイ」というポーランド語のこんにちは、が多いが、中には英語で「ここは初めてか」と聞かれ、そつたと応えると、「上はすい景色だ。」と励ましてくれる人もいる。途中2回の休みをはさんで、上の湖から

3時間。主稜線に出る。ここから<sup>2500m</sup>の頂上は目の前だ。30人くらいの人が山頂部にいるのが見える。やせた稜線を鎖をたよりにトラバースする。足下はスパツと切れ落ちていいる。下まで数百mはあるだろう。10分

ほどで待望の頂上。時に14:05。予定通りの時刻に到着した。これより遅れると、最終バスに乗れなくなってしまう。

### 山頂

頂上部は狭く、人がひしめき合っている。これまで登ってきた北側（ポーランド側）の他、南側（スロバキア側）の山々が見えている。いずれも鋭い岩峰である。RySyの標高は2499mで、同じような高さの山々が見えている。頂上には、ポーランドの看板（RySy）とスロバキアの看板がつけられ、国境の山であることがわかる。天気は晴れ。見通しよく、スロバキア側の登山道が、2つの山上湖の脇を通っているのが見えている。西側にも、東側にも峰々が続いている。このあたりは東経20°05'北緯49°



リシィ頂上



奥の湖がモルスキイ・オコ

11'と緯度が高いのでこの高度でもはるかに植生限界をこえているから、どれも浸食された岩山で、日本であれば、北アルプスの穂高連峰のような岩山である。

## 下山

山頂で写真を撮ったり、一休みして、15分後に下山開始。19時の最終バスを意識しての事である。登りに5時間半かかっているから、4時間半で下山しなければならぬ。こういうところにも朝の1時間の影響が出ている。トラバースをし、登ってくる人たちとすれ違いながら、岩稜を鎖を頼りにどんどん下っていく。登りであればどあえぎながら通ったのが嘘のようだ。20数分で相当下まで降りてしまった。山頂が遙かかたに見える。登山者の数は相当少なくなり、待ち合わせの時間が少なくなっている。1時間で尾根の下の広場に出る。鎖場はここで終わり。少し休んでから下山を続ける。急なカール壁にジグザグにつけられた道を降りていく。途中、2人の修道女がああロングスカートの裾をはしりながら歩いて降りていたのにびっくり。40分で上の湖「黒い湖」に着く。

ポーランド語でこんにちはは、「ジンドウプリ」、ありがとうは、「シンクイエ」というようで、何度か耳にしたが、挨拶しない登山者の数が多いように感じた。また、「上り優先」「早い人に道を譲る」はあまりやられていない。後で地元の人に聞くと、リシイはあまり山に登っていない人も来ている(日本の富士山のようなもの)からそうなのでは、と言っていた。

5時にモルスキーオコ。レストランでトイレを借りたら、「日本から?」と聞かれ、「コニチハ。アリガト」と挨拶された。今回は見なかったが、日本人もここまでは来ているらしい。最終バスまで2時間しかない。そこから少し降りたところまで、馬車乗り場に着く。待っている人が100人近くいて、どうしようかと迷う。乗れ



ポーランド側の頂上標識



アウシュビッツ収容所の門

れば、楽に早く着くが、こんなに待っているのだから、乗るのが遅くなるとアウト。今なら急げば歩いて間に合う。しばしの思索の結果、安全策で歩くことにした。緩やかな下りの舗装道路を11kmを2時間で歩く。早足で歩いていると、次から次へと馬車が来る。空身で登り客を乗せて下るから、早い早い。しまった、と思ったが後の祭り。ひたすら歩いてバス停に着いたのは6時30分。30分早く着いたが、臨時バスなのか、町へ行くバスが待っていた。乗るとすぐ出発。ザコパネの町に着いたのは7時30分。出発からちょうど12時間。

好天のもと、ハイタトラ山地の<sup>25</sup>に登った1日であった。暮れ始めた街角で飲んだビールがうまかった。

その日は、ザコパネの宿に連泊し、翌日、クラコフに戻った。

### ポーランドの旅

その後、オシフイエナムとビルケナウにある、ドイツのアウシュビッツ強制収容所跡を訪ね、広大な跡地を夏の日ざしに照らされながら歩いた。100万人の人間を殺害するために、人間はこんな事もできるのかと考えながら。ワルシャワに出て知人を訪ね、ワルシャワの街を歩いた。街には、第2次世界大戦のワルシャワ蜂起記念碑をはじめ戦争の跡が至るところにあり、パヴィアック（Pawlak）の収容所跡の記念館も訪ねた。戦争の爪痕を目の当たりにし、当たり前であるが、平和な時代であつてこそ登山ができるのだと改めて実感するとともに、それを次の世代に伝える努力をしている街と、全くと言っていいほどやっていない日本の現実を考えさせられた。

いい旅であった。



ワルシャワ蜂起記念碑

## スカンジナビアの山を歩く

ガルホッピゲン (Galthoppigen) に登る

ノルウエーの首都オスロの北西200kmにあるヨートウンハイメン国立公園は、氷河によって作られた山岳と湖により見事な風景を見せてくれる。その中に、北欧の最高峰ガルホッピゲンがある。

オスロよりバスまたは列車でオッタ (Otta) に入り、ここからバスに乗りロム (Lom) でさらにバスで1時間行くと、その麓、スピテルスツレーン (Spiterstulen) に着く。ここには、山小屋、いや「山岳ホテル」というべき宿泊施設があり、食事つきで快適に過ごすことができる。今回は、オスロにあるDNT(Den Norske Turistforening= The Norwegian Mountain Touring Association、「ノルウエー山岳旅行協会」とでもなるのだろうか)でコースを教え

てもらい、そのときにシングルルームの予約をとってもらった。

スピテルスツレーンのロッジはいくつかの木造の棟からなり、メインの建物は受付・食堂・売店等の機能がある。宿泊棟はいくつか分かれている。その中の一つに割り当てられた部屋はあった。ホテルの女性管理者が小さい部屋だ、といていたが、3畳くらいの広さにベッドが置かれている。廊下にシャワーとトイレ。食事はメインの建物でとるが、夕食は山の中の食事とは思えないような雰囲気。朝はさまざまに置かれた食材を自由に取って食べる形式で、日本の山小屋から考えると、別世界である。ランチバック(朝食時に自分でサンドイッチをつくる)も頼むことができる。



Spitersturen小屋



ガルホッピゲン山頂直下

スピテルスツレーンの朝はゆっくりだ。朝食は8:00から。これが終わると、あわただしくなる。いろいろな方面に向け出発してゆく。この標高は1100m。ガルホツピゲンへは、Visa川の橋を渡り、西側の斜面をピグロフ川（Pigrove）に沿って急登。はじめは高山植物などもあるが、苦しい登り。1800m位までひたすら登る。これを過ぎると傾斜はゆるくなり、雪の斜面を登ってゆくようになる。正面に見えるピークは Svelnose（2278m）まっすぐ登って、カールの壁の上に出る。ここまでくると、この山が氷河の上にある山だと実感できる。そそり立つカール壁。道は左に進み、カール壁に沿って高度を上げてゆく。ガラガラ岩だらけの急斜面の道を登りつめると、スベルノゼ（Svelnose）のピークが間近になると雪の斜面は急になってゆくが、マイゼンを使うほどではない。このピークを左に捲いて、先にまたピークが見える。ケイルハウストップ（Keilhaustopp）2555mである。道はゆるやかになるが、また急な雪の斜面になる。

ケイルハウストップの頂上は広く、目の前にガルホツピゲンの頂上が見えている。右側から登ってきたユーパスヒュッテからの登山者の行列が点々と見え、山頂左には、小屋が見える。一旦、岩と雪の道を下降すると、約150mの登り。左側には雪のない道があるが、雪の斜面を直登するトレースも何本かついている。ここでは傾斜のゆるい左側の道から稜線沿いに登っていった。稜線からは雪に変わりと頂上。たくさん登山者が休んでいる。頂上には、望遠鏡のついた方向指示盤がある。頂上の向うは切れ落ちていて、数百mのカール壁であり、今登ってきた側とは全く異なる様相である。周りをぐるりと見渡すと、至るところに氷河があり、それが作ったホルン、U字谷、カール、そして削られた丸い頂きと、白と黒の世界が広がっている。気温は10、快晴、無風。絶好の天気だ。歩き出してからここまで4時間。ノルウェーに来て3泊したので時差は



山頂の望遠鏡付き方向指示盤



氷河が削ったU字谷

けは直っていると思っていたが、夜中が明るいこともあり眠りが浅いので結構つらい登りであった。一緒に歩き始めたスペイン人の若者たちは、まだ着いていない。結構年配の登山者や子供もいて、にぎやかだ。

山頂でしばらく休んだ後、ヒュッテに寄ると、飲み物や絵葉書を買っている。絵葉書を10枚買うと、ヒュッテのスタンブを押してくれた。1枚15 NOKだから250円位。ノルウエーは物価が高い。従業員のお兄さんに「コンニチハ」と挨拶された。昼のパンを食べ、1時間近くたつたので、下山開始。登りと違って軽やかだ。特に雪の道は硬くもなく、柔らかくもない歩きやすいコンディション。日本の春先のようにズボット沈むこともない。2つのピークを右に捲いて左側の雪原にトレースがついている。これは快適。稜線の岩の道に戻り、岩の中を降り続け、カール壁の上部まで1時間で戻る。ここから東へ雪原をどんどん下る。礫混じりの道になると、雪原から雪解けの流れが始まる。ここから高山植物が見られる。これより上は、岩と雪だけの生物のいない世界。日本で見たことのあるような花もたくさんあるが、印象深かったのは藍色の花。目だたないが、青でも青紫でもない色であった。午後なのだが、この時間に登ってくる人ともすれ違う。日本の感覚で言うところ「何してるの？」となるのだが、この地では真夜中になっても暗くならないのだ。ここまでは、隣のグリッターティンド（Glitterindfjell）第2の高さの山がよく見える。山頂部に大きな雪原を持っている。その下に、スピテルスツレーンの建物が真下に見えてくる。花の写真をとりながら700mを下り、テントサイトに出る。川にかかる橋を渡り、ロッジに着くと4時半。出発してから7時間後の下山であった。45 NOKのビールで一人祝杯を挙げた。

翌日、ロム（ROM）に戻り、フィヨルドを越えて、この国第2の町ベルゲンへと、10時間のバスの旅である。

アビスコ国立公園クングスレーデンを歩く

スウェーデン北部にあるアビスコ (Abisko) 国立公園は、ラップランド地方にある。大陸氷河が作り出した地形の美しい公園である。この国立公園の中に、Kungsleden (クングスレーデン・王様の道) という、ハイキングコースがある。この道は、北はこのアビスコから始まり、同国の最高峰ケフネカイセ山 (Kebnekaisef ケフネカイセ) というのが現地の発音(の麓までの100kmを1週間かけて歩く道である。今回は、これを全部歩くことは日程の都合で無理なので、その雰囲気だけでも、1日分歩き、翌日戻ってくることにした。



ラップルトの貫通谷

その始まりのアビスコは、スウェーデンのキルナとノルウェーのナルビクを結ぶ鉄道の途中に位置する。



クングスレーデンの入口

① Abisko Turiststation という、山岳ロッジがある。日本の山小屋というより、「山岳ホテル」というほうが近い。ノルウェーのナルビクから入り、ここに泊まり、地図その他の情報を得た。ロッジは、シャワー付きのシングルルームで3食付で95 SEK (内夕食210 SEK)。食事はすべて食べたいものを食べたいだけ、というBuffe形式であった。その日は鮭のステーキ、ジャガイモ、サラダ、コーヒー、ケーキなどが出ていた。売店では、地図や登山道具のほか、食料も売っていたので、地図とガスボンベ、クノールの即席パスタと「出前一丁」ラーメン (DEMAME RAMEN) を購入した。このロッジから南東に、「ラップルテン」という、ラップル人たちがここを通ってきたといわれた、氷河の貫通谷がある。あいにくと雲が低くた



クングレスレーデンの道標

れているので、一番上は見えないが、特徴ある丸く抉ったような地形が見える。翌朝、朝食時にランチパッケージをもらった。リンゴやお菓子、行動食ジュースなどが入った袋に、自分でサンドイッチをつくって詰めていく方式である。荷造りをして、出発。今日の行程は、アビスコヤウレ（湖）にあるロッジまでの14kmである。

アビスコステーションを出ると、Kungälvの入り口のゲートをくぐりアビスコ川に沿っての道になる。といっても、この日のゴールのロッジとは、標高差にして100mしかない「平らな」道である。道はよく踏まれていて迷うことはない。途中、アビスコ東駅からの道を合流し、キャンプ場への分岐点を通り、川にかかる橋を2回渡ると、右手の川幅が広くなっていき、ついには湖の一部となっていく。前方には雪を残した山が雲の中に見え隠れしている。やがて対岸に建物が見えてくる。それが本日のゴールのアビスコヤウレのツーリストヒュッテである。橋を渡り建物に近づくと、STFの旗が高々と掲げられている。アビスコを出て4時間。午後1時であった。天気は悪く、今にも雨が降りそう。気温は8°。

着くと、おばさんから突然「Welcome Abiskojaure! 寒いでしょう」と話しかけられ、一瞬びっくりするが、この人がこの管理人なのであった。「スウェーデンの山小屋のことは何も知らないから教えてほしい」と言うとその管理人さんはヒュッテのベッドルームに連れて行き「窓側の一番いいところを使え」といい、次にキッチンのことを教えてくれる。ここには、プロパンガスのレンジやなべ、やかん、包丁や皿、フォークにいたるまで何でもそろっている。水は、バケツで湖の水汲み



木道もある





ヒュッテのヤナギラン

場から取ってくることに、シンクで洗い物をする。汚水は別のバケツに入れ汚水捨て場に捨てること、などを説明してくれ、宿泊者リストに記入するよう言われた。次に管理棟に行き、宿泊料の説明。ここで、日本のユースホステル会員証を見せると、STHのメンバーと同じ割引が受けられることを知った。宿泊料は255SEK。150SEKの割引であった。売店では、食料のほか、ビールやジュースなども売っている。食料を調達しながら、旅を続けることができる。早いせいかあまり人はいない。夕方になると、ヒュッテの客やテントを持ったハイカーたちが続々と到達。夜中まで明るいので夕方という気がしないのだが、6・45にサンドイッチの残りとかノールのインスタントのパスタで食事。8時ころまでにほとんどのグループは食事を終え、寝ていく。外に出ると、まだまだ明るい。気温は12。持ってきたワインを飲んでベッドに入り、読書していたが、そのうち寝てしまった。外が明るいのはつとしたが、夜中の12時。結局一日中暗くならないのだ、この時期は。何となく体の調子がおかしいのはこのせいかもしれない。

翌日は5・30に起きたが、ほとんどみんな寝ている。「出前一丁」をつくって食べてから、6・10アビスコに向け出発。途中雷鳥の群れに会う。オスは鶏冠が赤いのですぐわかる。少し体の小さい子ども2羽を連れて母親が歩いていった。昨日来た道を戻って行く。旅の荷物を全部担いでいるので結構な重さだし、長時間歩けるザックではないので疲れ方がひどい。いろいろな荷物をアビスコに置いて、1日に歩く距離を伸ばすと、ケブネセカイセ・ロツジにあと3日で着くのだが、そこで山に登った後キルナに出、アビスコに荷物を取りに戻る手もあったが、今回は見合



アビスコヤウレのヒュッテ

せた。時間に余裕があれば、この「王様の道」を歩き通してみたいものである。  
4 時間後、アビスコのゲートに戻り、11時半発のバスで、ケブネカイセの最も近い入り口、キルナの町に出ることとなった。



アビスコツーリストヒュッテ



吊橋がかかっている

ケブネカイセに登る

ケブネカイセは、アビスコ国立公園にある、スウェーデンの最高峰である。

アビスコをあとにして向かった町、キルナ(Kiruna)はスウェーデンの北部、北緯68度であり、鉄鉱石の産地として有名である。鉄道の駅で下り、便利が良さそうなのですぐ隣のホテルに宿を取る。それから町の中心のツーリストオフィスに行き、情報を集める。ニカロクタ(Nickelokta)までのバスは1日2便、昼の11:35とあとは夕方の便。タクシーなら600クローナだそう。夕方まで町の見物をし、夕食を取りに駅のすぐそばのRaiareneというホテルレストランに入ってみると、なんと日本人女性のカウンター内にいる。結婚してこちらにお住まいだとか。久しぶりに日本語を話し、トナカイの肉のバスタを食べる。あつさりとしたおいしい肉だ。

翌日、不要な荷物は宿に預けて、荷物が半分くらいになり、移動は楽だ。町で昼食など買った後バスター

ミナルからバスに乗る。運転手は女性だ。日本ではあまり見かけない光景。

12:35ニカロクタ着。レストランや売店、シャワー、ロッジなどがあり、駐車場には車がたくさん止まっている。準備をすませて出発。親子連れやグループなどでにぎやかな出発。少し行くと、木の柱を組んだゲートがあり、KEBNEKAISEと書かれた板がある。なおこの地名は、現地では、「チエブネカイセ」のように読むようだが、ここでは、ケブネカイセと書く。ここから、木のチップを敷き詰めた気持ちのよい道がしばらく続く。左右に氷河の貫通谷を見ながら林の中を進む。しばらくして、木のチップがとぎれ、ゆっくりした坂を上り詰めると、前方にケブネカイセが見えている。山頂部は雲の中だが、特徴のある左側の2つのピークが見えている。



ボート乗り場：遠くにケブネカイセ



ニカロクタのスタート地点

少し進むと、ボート乗り場に着く。40分後に船が出るということで、時間の節約にはならないが、氷河湖の上の船便を経験してみるかと、乗ることにする。往復で200SEK。待つ間に、売店で「ランフルカレ」という、ハンバーガーのようなものを食べる。乗客が多いので、2艘の船に分かれて出発。氷河湖の上を両側と前方の山々を見ながら進んでゆく。広々とした水面がやがて細くなって水路のようになって行く。40分くらいでボート乗り場に着く。ここから8kmでロッジという標識。よく踏まれた平らな道を歩く。

2時間弱でロッジ（KEBNEKAISE FALLSTATION）に到着。何棟かの建物がある。受付に行くと、混んでいるらしく個室はもとより、ベッドも空いていないらしい。夜21:00過ぎにサウナのレストルームに来るように指示される。2食付き2泊で930SEK（日本のユースホテル会員証の提示で割引されている）。19:30頃に夕食にする。夕食はbuffetスタイルで、自分で好きなものを好きなだけ食べるようになっていく。今日は鮭とゆでたジャガイモ他にパン、スープ、サラダ、コーヒー、デザートなどがずらりと置かれている。

21:00になったので、指定された場所に行ってみると、サウナの時間が終わり、休憩室、シャワー室にマットを並べて敷いている。その1枚の上に寝袋をおき、ねる場所を確保。日本の山小屋と違い、「1畳に3人」などということはない。22:00になっても外は暗くない。シャワーを浴びて、外で景色を眺めながらワインを飲んでいたら、日本人の男性が声をかけてきた。今日はツァーで山頂まで行ったとのこと。天気はあまりよくなかったらしい。23:00になり「夕焼け」を見て、眠る。

翌朝、6:00に起きて支度。いろいろな物を置いていく。7:00に朝食になる。パン、ハム、チーズ、野菜、その他シリアル、飲み物等が並んだテーブルから取って食べる。ランチパックを頼むと、飲み物やお菓子が入った袋に、自分でサンドイッ



ケブネカイゼの登り



ケブネカイゼ山頂

チを作って入れていくシステム。

7:40に出発。今日は山頂まで、標高差1400m、途中登り返し2000mの1600m分を登って下りてくる行程。天気は快晴。10分歩くと、クングスレーデンへの分かれ道。なお30分行くと、西（West）の道と東（Ost）の道の分岐点。東の道は、氷河を歩き、崖を登っていく道で、ガイドツァーが使っている。西の道は、氷河はないが、登り返しがある。今回は、単独行で山頂まで行く、ということ。西の道を進む。平らな谷底の道から、カールから流れる川に沿って急坂を登る道に変わる。1時間ほどでカールの底に出る。一休みした後、また急坂を登る。ガラガラ石だらけの道だが部分的に岩の上を通過する。右側には直登する雪深が見え、滑って下りたとレースもついている。トルバゴルニ（Toullpogorni 1662m）の尖ったピークと、ヒエランバレの丸いピークの鞍部にでる。ここから、シグザグの急登。グループや親子連れ、単独行などの登山者が、休み休み登っている。ヒエランバレ（Vieramvare 1711m）の頂上は、広くて平ら。ここに来ると、雪で真っ白なケブネカイゼの山頂が見えてくる。おびただしい数のケルンが積まれている。

ここから、200mの下り。せっかく見えてきた山頂があっという間に見えなくなる。鞍部は、貫通谷の谷底で平らだ。谷底のカフェタレン（Kaffetalen 1520m）まで降りて、またシグザグの道を登り返す。真後ろに今降りてきた斜面が見えているつらい登りだ。シグザグの道が右方向に進み始めると、傾斜がゆるくなつていき、小さな小屋に着く。ここから10分ほどトラバースするともう一つの小屋につく。ここが、氷河を登ってきた東コースとの合流地点のようだ。小屋の標高は19



ケブネカイゼ山頂から北方を見る



ピエランバレのピーク、おびたしいケルン

00m。緩やかな斜面を北に進んでいくと、雪が増えてくる。2000mを超える  
と、白い雪の山頂が見えてくる。残雪がますます増えるゆるい斜面を進むと雪に覆  
われた山頂の真下に出る。ちょうど、ヘリコプターが離陸するところであった。

山頂までは高さ50mの雪の斜面を登ることになる。傾斜は結構ある。ちょうど人  
が切れて、山頂に二人だけになったので、一気に登る。13..10山頂に着くと、その  
向こう側は、細いリッジの先に、北峰が見え、左右は数百m以上も切れ落ちてい  
る。こちら側とはまったく違う世界だ。山頂は、細く狭い雪の上で、構造物は何も  
ない。周りを見渡せば、雪の白と岩の黒の氷河地形の世界である。丸く削られた峰も見  
える。尖った峰も見える。お椀で挟られたようなカールも見える。貫通谷も見  
える。岩と雪だけの、日本の山とはまったく違ったラップランドの氷河の景色。気温は8  
くらい。天気は快晴だ  
が日差しは緯度の関係で強くない。東に昨日歩いてきた、二カロクタあたりの湖と谷が見えている。数分  
後、次の人が来たので山頂を後にする。下りも結構な急斜面である。平らなところ  
まで来て、昼食にする。そうしているうちに、ロッジからの登山ツアーの一行が到  
着した。ヘルメットをかぶり、ハーネスでザイルに繋がれている。日本人女性の  
一行もガイドに連れられ到着した。

食事後下山。ゆつたりとした斜面を下り、小屋まで戻る。小屋はあまりきれい  
ではない。急な斜面を下っていると、昨夜話した日本人男性が、奥さん？と一緒に登  
ってきた。言葉を交わした後、下山。谷底まで一気に降り、そこから200mの登  
り返し。平らなピエランバレの頂上で一休み。また急な坂を下り、カールの底に出  
る。この先は、花が咲いている高度である。花を見て写真を撮りながらのんびり下山。



トナカイを見た

急な坂を下り、平らな道に出たところで、トナカイが悠々と目の前を通り過ぎていった。カメラを向けても急ぐでもなく、前を横切り、斜面を登ってゆく。ここはラップランドだ、というのを実感した一瞬だった。2つの分岐点を通過し、ロツジに着いたのが13…25。9時間余の登山だった。

その夜、ロツジにもう一泊し、翌朝、8…00過ぎに出発。船着場への道を歩いてみると、トナカイの角を拾った。その先には、トナカイの死骸があった。10…15の船に乗り、ニカロクタに11…45に戻る。

バスまで時間があるので、レストランで食事。「鹿肉のステーキ」とかいう、淡白な肉のステーキを食べた。その後、バスに乗り、キルナへ。そこから、列車ダイヤの関係でフィンランドに行くのはやめて、ストックホルム行き列車に乗った。



ケブネカイゼロッジ

# ツブカル登山記

2004年8月

モロッコにあるアトラス山脈の最高峰ツブカルToubkalの登山口、イムリルImililの集落は、土産物屋やカフェが一本の道の両側に並んだ周りに広がっている。規模で言えば、「村」といったところ。タクシーを降りると、若い男が話しかけてきた。「ツブカルに行くのか、地図を持っている・・・」。ネルトナー小屋までは、ロバで荷物を運ぶポーターがいるのはわかっていたので雇うつもりでいた。麓まで行けば、何とかなるだろうと思っていたが、案の定、話しかけてきた。それにしても、地図を持っていて、聞き逃しにできない。結局、カサブランカでもマラケシュでも、地図を手で

きながったから。ついて行くと、食事付きで、反対の渓谷に下りる道をガイドする、という。1600DH（ティルハム。約10円）。食事なしなら1300DH。地図は、政府発行の4色刷5

万分の一地形図であった。ガイドと食事はいらさない、往復のポーターと地図がほしい。800DHで手を打った。この値段が高いのかどうかは定かではない。が、地図はぜひほしかったし、この値段だと、そんなにぎりぎり値切ることもない、と思ったからだ。話がまとまると、ロバと少年を連れてきて、この子が一緒に行く、という。名はハッサン、年は15歳とのこと。まあいいかと言つことで、荷物を預け、出発。少年が自分の家に寄ってから行くというのでついて行く。

あれがツブカルだと言われた先には、こつこつした岩山が見える。村はずれのベルベル人の住まいであった。中に入れというので、入ると、姉らしい少女、弟らしい子



ロバで荷物を運ぶポーター



ツブカル小屋への道



供、そして母親がいた。ベルベル人の家は、天井は低いが、涼しい。パンと卵焼きをこちそうになり、ハッサンが支度をした後、家を出る。途中、干し草を買い、ロバに積み込み、イムリルの村を出る。標高は1600m弱。時刻は10:00。最後の集落 Around を過ぎ、開けた河原の道を進む。途中から山腹にのぼり、等高線に沿った道をゆっくりのぼる。ロバと人が行き交っている。12:00に沢を渡り、白い大きな岩のあたりに店が数軒出ているところで休憩。ここまで、結構速いスピードでついてきたが、つらい。これから先はマイペースで行くから、とゆっくり登る。とはいえ、周りに登っているスペイン人の団体などは、少し歩いて休み、の繰り返しで、結局先になっってしまうのだが。道は、急にジグザグの上り坂になる。上りつめると、ゆったりと溪谷の左岸につけられた平らな道を登ってゆく。ロバや馬とすれ違い、ヨーロッパ人のグループや馬子のアフリカ人などとすれ違いながら、歩いてゆく。周りは、背の低い草ばかりになり、そこに羊が放牧されている。



ツブカル小屋

時折、花も咲いている。途中、水場を2回ほど通過。土産物の水晶や飲み物を並べた店を過ぎ、溪谷をどんどん詰めてゆく。15:00、正面に石造りの建物が見えてきた。ここが、ネルトナー小屋だ。着いてみると、小屋は、CAF (Club Alpin Francais フランス山岳会) Refuge Tubcal (ツブカル小屋) という看板があった。ネルトナー小屋というのは古い名で、現在はツブカル小屋になっているようだ。小屋といっても石造りの立派な建物で、食堂・炊事室・談話室などが1階に、2階には、2段ベッドが並んだ寝室が数室、地下には、洗面所・水洗トイレとシャワーの設備がある。受付をした。宿泊費が1泊80DH、夕食が1回50DH、シャワーが1日10DHで、2日分で総額280DH支払った。フランス山岳会の会員だと宿泊費は半



河原の道を進む



ツブカルの登山道

額になるようだ。夕食まで、周りをぶらぶらしたり、小屋の中を見学したりで時間を過ごす。夕食は、スープとパンとスパゲッティであった。ハッサンが翌日山頂まで一緒に行くということで翌朝は6:00出発ということにする。土曜日ということもあって、日が暮れるころ、即興の「音楽会」が行われている。アフリカらしいリズムが響いている小屋の前の広場に行くと、アルミの大きな缶、ポリタンクを打楽器にし、ギター1本で演奏している。周りではそのリズムに合わせて踊っている。ここはアフリカだなーとしばしばぼんやりと聞いていた。9時には寝てしまった。

翌8月8日は4:40起床、まだ暗い。食事を済ませ支度をして5:45に外に出ると、ハッサンは待っていた。荷物を持つ、というので、カメラと水以外を渡す。すぐに出発。ようやく、足元が見える時間になった。小屋の標高約3200m、頂上まで約1000mの登りである。小屋の東側の斜面をジグザグに登り、1時間くらいで狭い谷を通る。さらに1時間で、砂礫の広い

谷を登る。残雪がところどころにある。7:45に3920m地点、8:45に稜線に出る。あと一息で頂上という、さくさくの岩だらけの道を行く。右側は、切れ落ちている。これがツブカルの北面の荒々しい姿である。

9:15ついにツブカルの山頂。あつけない、山頂到着であった。3mくらいの高さのピラミッド型の鉄骨が立っている。標高4167m、気圧は630Hpa、高度計は「FUI」の表示、気温は8。無風。山頂には15人くらい人がいて、休んでいる。空は快晴。青いというより紺色の空の色だ。蒼天という言葉がふさわしい。周りには、赤茶けた鋭い山々。遠く北側には、緑のイムリルの集落が見え、東の遠くは霞んでいるが、山の向こうがサハラ沙漠の方向だ。南には、高い山がある。地図で見



小屋の夕食、パスタとパン



ツブカル山頂近く

ると、4000mを越える山々である。東には地平線が霞んで見える。ここが、ギリシャ神話にうたわれた、巨人アトラスが天を支えていたアトラス山脈の最高点なのである。山頂にいたオランダ人青年に写真を撮ってもらったり、撮ったりして、9:45に山頂を後にする。下りは実に早かった。富士山の砂走りと同じような斜面をどんどん下ってゆく。先ほどようやくたどり着いた稜線まであっという間に降りてしまった。さらに岩がゴロゴロの広い斜面、狭くなった谷筋と降りて行き10:40に一休み。急な斜面を降りて、11:30には小屋についてしまった。これから下って也十分に明るい時間にイムリルまでは降りれる時間だ。しかし、そこから先の交通機関が明日の予約なので、今日は、この小屋でゆっくり過ごす。昼食を食べた後、午後は、のんびりする。夕食は、たっぶりのタジンであった。夜中に目がさめた。外に出ると、ちょうど南北に広がった空に、北極星・鷲座・琴座・白鳥座・さそり座そして天の川がくっきりとみえた。

翌8月9日、5:30起床。ゆっくり夜明けの景色を見る。月と金星が輝き、夜明けがやってくる。ツブカルに向かう人たちがあわただしく出てゆく。6:00の食事、6:30支度、7:00直前までハッサンが起きてこない。ポーターたちの小屋に起こしにいった、あわただしく7:00過ぎの出発。昼までに降りればよいのでゆうゆうだ。途中、口バ(ミヨールという)に乗るかと思われたが、歩いた。途中、牧羊犬を2頭つれたハッサンの友達とすれ違った。道の両側には放牧中の羊がいっぱいだ。花を見ながらのんびりする。8:40白い石(Chararouch)、10:10にイムリルに着く。残りのポーター代金400DHとべつに10ユーロ払った。タクシーが来るまで、昼食。羊の焼肉(メシユイ)とパンで30DH。12:00過ぎに来たタクシーで、一路マラケシ



山頂にて



カサブランカ空港

ユへ向かう。途中、道端に果物売りがいるところで止まる。運転手が果物売りから買って食べている。すすめられて食べるど、みずみずしくておいしい。何かと聞いたら、何と、そこに生えているサボテンの若い果実？であった。その後、マラケシュまで、恐ろしい速さで走りぬけた。マラケシュ駅に13:40に着いた。ここで荷物を降ろし、列車でスペインめざし北上。ツプカル登山は終わった。

### ツプカルの麓、イムリルにたどり着くまでの顛末、モロッコの旅行事情

2004・8

いや、何があるかわからないものである。

成田からパリで乗り継いでカサブランカの空港に夜22:40に着いた。時差9時間を考えると、初めて行くところに、こんな遅く着く強行日程を組んだのが間違いの元だと後悔しつつ、イミグレを通り、荷物を待つが、さっぱり出てこない。そのうち人はいなくなり新たな荷物が出る気配もなくなったところ、脇のカウンターで何人かが並んで係官となにやら話している。順番を待つて、荷物がこない旨話すと、番号を端末から打ち込み、「今パリにある。明日の昼にもう一度連絡しろ。」と、日常茶飯事のような対応で「遅延証明」フランス語。そのまま訳すと「あなたの荷物は遅れている」「カードにファイル番号とエールフランスの窓口の電話番号を書き、明日11:00に電話せよ。」「ホテルまで届けてくれるのか?」「NO、取りに来い。」昔、ジュネーブで荷物がこないときの対応とえらく違う。しかたなく、機内持ち込みの小さなザックを持って、カサブランカ市街の予約しているホテルに向かう。とりあえず、キャッシュデュイスペンスを見つけ現金を入手。列車の駅に行くと、最終列車は



ツプカルヒュッテの小屋番

もう出てしまった、ということ、バスに乗ることにする。この国の交通システムがわかっていないので、不安である。発車するまで小一時間ある。時間は0時を過ぎていく。タクシーで行こうと払い戻しを求めたら、「できない」。仕方なしに空港で待つ。人がやたらとうるうるしている。こんなに遅く、出発便もないのに。ようやく時間になってバスが出る。道路をものすごい速度で走り(100km以上)30分ほどで市内のバスターミナル。ここからホテルまで、歩くと20分くらいのようなのだが、深夜に知らない街でホテル探しをする気もしないので、タクシーに乗る事にする。この国のタクシーは、町中は「プチタクシー」といって、プジョーの小型タクシー、郊外まで走るの「グランタクシー」というベンツのタクシーと分けられている。プチタクシーもその後何回か乗りシステムがわかるのだが、運転席の右下の方にメーターがあるのだ。それで乗ればなんと言ったことがないのだが、事前の情報不足で、料金交渉をしてから乗れ、などと言ったので、フランス語で値段の話 30DH(ディラハム。約10円)ということを手を打つ。ほんとは、もっと安かったのだが、『授業料』のつもり。で、ようやく予約していたアルムーニアホテルに着いた。1:00を過ぎていた。時差が9時間あるから、徹夜して翌朝10:00にホテルに着いたことになる。日本で5900円だったから、もっとひどいところかと思っていたら、街の真ん中にある大きなホテルだ。少し古いけれども。これでモロッコの物価の雰囲気があったような気がした。

とにかく寝て、翌朝起きた。予定では、今日のうちに、マラケッシュに行くつもりだったが、荷物がなくて移動できない。11:00まですることもないので、ホテルの周辺を散歩する。街の雰囲気をすることは大切なことである。歩いているうちに、国連広場に出た。今日は出発できそうもないので、腰を据えることにして、この近所にある。PLAZA HOTELで今日の宿泊の予約をする。その後、カサブランカの市内を歩き、壮大なハッサン2世モスクなどを見物してからアルムーニアに戻り、ホテルの電話係の女性に話を話し、エールフランスの窓口に問い合わせてもらった。「荷物は来ていない、夕方18:00に電話しろ」とのこと。いったいどうなっているのだ? 18:00に電話して、それから空港まで取りにいったのでは、また遅くなってしまいます。事情もわからないので、

空港に行くことにした。プラザホテルに荷物を移し、空港に行く。昨夜バスで来たときには30分くらいできたのだが、鉄道で、カサブランカ・ポール駅から行くと、乗換を含め1時間以上かかる。2時過ぎに空港に着き、窓口に行き事情を聞くと、パリからのAF第1便には荷物はなかった、第2便は5時に着く。という返事。荷物は積み込まれたのかと聞くと、わからない、何ともいい加減なことである。しかたがないので、17:00の便が着くまで待った。17:30過ぎて荷物係に行くと、そこを探せ、とのこと。探してみると、荷物があった。一安心。これで旅行を続けられる。しかし、このムタな1日は何だったのだらう、という思いと、これがこの国のありようだ、こういう国を旅しなければならぬのだ。というあきらめに似た心構えとが錯綜していた。荷物を引き取り、カサブランカの駅に戻ると、夜21:00を過ぎていた。しかし、町中眠る気配どころか、ますますにぎやかになっている。サンドイッチとビールと水を買ひ、ホテルに戻り、簡単な夕食とした後、22:00頃寝る。時差ボケはまだ続いている。

翌朝、食事の後、チェックアウト。タクシーに乗り、列車の出るカサブランカ・ボアジャー駅に行く。切符を買って行列の途中で、パスポートを返してもらっていないことに気づき、タクシーに乗ってホテルに戻り、パスポートを受け取りまた駅にとって返す。この間タクシーの運転手は待ってもらっていたのだが、この運転手、英語は全く、フランス語もよくわかっていない「新米」らしい。乗るときホテルの住所と名前を行ってもわからず、その係員になにやら指示されていた。片言のフランス語で、ホテルに忘れ物をしたのですぐに駅に引き返す事を伝え、ウターン。マラケシュ行きの列車にはなんとか間に合った。いや、危ないところであった。パスポートなしに旅行することはできない。

列車は、カサブランカの街を離れ、次第に内陸へと進む。緑が減って行き、赤茶けた丘が続く景色になる。サボテンのような植物と木がまばらに生えている。時折、集



ベルベル人の住居

落が見える。羊を放牧している。3時間余で、「オアシス」マラケシュに着く。町中にあるツーリストインフォメーションをめざし歩く。とにかく焼け付くような暑さだ。町中のレストランで、一休み。昼食にする。オレンジジュースとサンドイッチ。オレンジジュースがやたらとおいしく、2杯飲んだ。そのレストランのはず向かいにあるホテルに2泊することにする。荷物を置いて一休みし、街の見物に出かける。スーク(市場)にある有名なジャマ・エル・フナ広場やクトウピアという塔、伝統工芸館などを見て帰った。夕方18:00前で、日射しが痛いように暑い。スーパーで水などを買い、ホテルのレストランでクスクスの夕食、それから寝る。地図とガスポンペは、買えなかった。

翌日は、朝から体調が悪い。疲労がたまっているようなので、思い切って休養日とする。午後まで何もせず、夕方、登山に備え買ひ物。食料などをスーパーで買う。ホテルのフロントで、イムリルまで行きたいがどうしたらいいか相談。フロントの男は、フランス語しか話せず、話が進まなくなり、友達(?)の英語を話す若者を連れてくる。そこで、タクシーの話や、仕組みの話や、タクシーの運転手らしき男と引き合わされ、なんだか話がついたようだ。明日の朝、迎えに来るとか。本当に「予約」がとれているか半信半疑だが、まあしかたがない。

翌朝、約束の7:00に下りてみると、「運転手が来ている」と言われ一安心。「グランタクシー」という黄色いベンツの車が来ている。宿の勘定をすませ、荷物を積み込み、朝のがらんとした街を出発。運転手は、アーメドという陽気な年配の男。いろいろ話をしたり、解説したりしながらも、飛ばすわ飛ばすわ、恐ろしくなる早さで車は走る。街のはずれの道では、120km以上で走っている。山間部に入ってから少し速度を落としたものの、曲がりくねった道を、クラクションをブーブー鳴らしながら走る。途中は、赤茶けた景色が続く、時折ベルベル人の集落がある。アスニという街から左に曲がり、めざすイムリルへと車は進む。道は狭くなるが、一応舗装された道路だ。2時間かかるといわれていた道を、マラケシュを出て1時間10分後の8:10にイムリルに着く。ここで、2日後の正午に迎えに来ることを確認し、往復のタクシー代800DHを渡して分かれる。

## モロッコからスペインまで

アトラス山脈の麓マラケシュからピレネ山脈の小国アンドラまで

アトラス山脈の麓マラケシュを15:00に発車した列車は、砂漠地帯を過ぎ、カサブランカを通り、首都ラバトに着く。マラケシュからタンジエまで一等で282DH。駅前に宿を取る。食事に街に出るが、駅前の国会議事堂の広い通りは、たくさんの人が行き交っている。警備の警官、軍人もたくさんいる。食事後、宿に戻り、そのままダウン。さすがに、ツプカルから下り、旅行を続けてきたので疲れている。

翌朝、7:17発の列車で北上する。シディ・カセムで乗り換えになる。ここで乗った列車で、日本語を聞く。パリを出てから1週間ぶりに聞く日本語。タンジエま



タンジエへ向う列車

で徐々に日本語を話す。左に大西洋が見えてくる。タンジエは終点でここからフェリー乗り場まではタクシーに乗るのだが、パレンシアに行くモロッコの大学生と同乗できた。たったの5DH。フェリーの切符を279DHで買った後、先の日本人一行と食事。油っぽい料理だった。海まで来たので、おいしい魚でも食べたかったのだが、……。出国手続きをあっさり終え、フェリーに乗る。大きな船だ。16:50出港。対岸のスペインが近い。ジブラルタル海峡はこんなに狭いところだったのかと、改めて実感。約1時間の船旅で、スペインのアルヘラスに着く。向かいに、小山のようなジブラルタル島が見えている。時差が2時間あるので、夜8時。今日はこの町に泊まることにす



アルヘラスへ到着





セビリア発のAVE

る。先の日本人一行と別れ、宿探し。混んでいるのか、何軒も断られ、ようやく込み入った町中の宿を探す。なんと10ユーロ。古いが、一応バスタイレ付きの部屋である。RENFE(スペイン国鉄)の駅に行き、翌日の列車でマドリッドまで予約。その後食事。ハモンハムを食べる。それでも15ユーロ。そこで、ゆつくり先の鉄道の切符を見ると、なんと、途中で4時間も待ち合わせがあるではないか。おかげで、朝7:00に出てマドリッド着は18:30となっている。スペインの高速鉄道AVEに乗るのに、こんなに時間がかかるのはばかばかしい。バスで行くことにして、払い戻し。ここで、フランススペインバスを使うのだが、これに間違った日付を書かれ、後で面倒なことになる。

翌日、朝9:00発セビリア行きバスに乗り、12:00にセビリアバスターミナル。そこから鉄道駅までタクシード行き、マドリッド行きのAVEの指定席をとるために窓口へ。ここで、フランススペインバスの日付が違うことに気づき、窓口の担当者に言う。すると、あちらの窓口に行け、といわれ、そこで待たされたあげく、また別の窓口にとららい回し。あげくの果てに、最初の所に行かされ、延々1時間以上も待たされる。ようやく手書きのバスを渡される。2時間近く余裕があったのに、発車間際。

14:00に出た<math>\times</math><math>\times</math>はさすがに快適であった。3つあったクラスだが、よく調べてなかったもので、中のクラスにしたのが正解。機内食のような食事が出た。スペイン流でワインも付いている。マドリッドでは、翌日の朝に出る列車でバルセロナに向かう予定だったので、アトーチャ駅近くに泊まり、駅近くのトレド美術館だけが目的であった。列車は、アトーチャ駅に入る。ホテル紹介所で歩いて数分の所にある



ゲルニカがあるソフィ王女美術センター



グエル公園

ホテルをとる。急いでチェックインし、トレド美術館に行く。さすがに有名なだけあって、おびただしい数の絵がある。有名なゴヤのコレクションなどを先に見て回った。閉館時間になったので残念だが出た。その後駅に行き、翌日のバルセロナまでの切符を買おうとしたら、売り切れ。午後の便までないということになって、結果的には幸いした。夕食を食べたが、安い、と実感する値段だった。

翌日、予定外にできた午前中の時間に、近くのMNCARS（ソフィア王女美術センター）に行き、ピカソの「ゲルニカ」他の作品を見ることができた。それから、ティッセンボルネミッッサ美術館、トレド美術館と共通券を買って回った。歴史的には、現代美術からさかのぼって見たことになるが、それはそれでもおもしろかった。午後

の列車でバルセロナに向かい、夜21・50着。宿はマドリードで予約していたので、地下鉄で向かい、チェツクインの後、夕食。ここは2泊するので、余裕がある。

バルセロナでは、ガウディがテーマ。一日中かかって、ガウディ巡り。グエル公園、カサパトリヨ、サグラダファミリア……。すごい、の一言に尽きる。

2泊した後、アンドラに向かう。バスが12:00にサンズ駅から出るのを確かめていたので30分ほど前に行き、列を作って待った。アンドラまで、というのと、何やらわからない対応。きちんと説明もしないで、切符売り場の男は席を立ち、うろつろしている。そうこうしているうちに発車時間。隣の席にいる女の人に聞くと、「FULL」。結局、バスは出てしまった。次はあと6時間後だという。しかたなく、北駅のバスターミナルに行くと、3時発のバスに乗れた。アンドラまで19・5ユーロ。3時間のバス旅で、ピレネ山中の小国アンドラに着く。



サグラダファミリア教会

# ピレネ山脈を歩く 2004年8月

ピレネ (Pyrenees/ Pirineos) 山脈は、フランスとスペインの国境で、大西洋から地中海まで続く山脈である。その最高峰は、アネト (3404m) であり、緯度は日本と似かよっている。

2004年夏、この山脈の一部であるが訪れた。次は、その経過と印象である。

## 1. アンドラ (Andorra)

この山脈の中に、独立国アンドラがある。この国は、縦横20kmほどの大きさで、人口6万余人、山の中の小国である。この国は、観光と商業で立国している、ということであるが、行ってみるとまさに「免税品店国家」という雰囲気。一方の観光のほうは、それはよく整っているらしいことが、ツーリストインフォメーションに行くだけで感じられる。バルセロナからバスに3時間ほど乗ればアンドラの首都？アンドラ・ラ・ヴェリヤに着く。公用語は、カタルーニャ語だそうで、スペイン語とフランス語も使われているらしい。

さて、夕方アンドラ・ラ・ヴェリヤに着くと、ツーリストインフォメーションでホテルリスト、ハイキングの資料、バスの時刻表をもらい、アンドラ政府発行の2万5千分の一地形図(全国が1枚に収録、9ユーロ)とハイキング用の地図(1・5ユーロ)を購入し、5万分の一地形図(5ユーロ)も売っている。宿を決め、町を散歩。

翌日は、この国の最高峰Coma Pedrosa (2946E)をめざす。登山口Arinsal



登山口 Arinsal



コマペドロサ小屋近くで



コマペドロローサ小屋

へ7・30発の朝一番のバスで向かい、8・00頃に歩き始める。GR11の赤と白の標識を見つけ、たどってゆく。バス停から雪崩よけのトンネルをくぐり、右に道は伸びてゆく。車が通れる道を30分行くと分岐点。左側の山道を進む。沢を2回渡り、林の中を進む。日本の山とよく似た雰囲気である。いろいろな色の花がたくさん咲いている。途中、開けた谷からの沢の流れがある場所に行くと、ワタスゲに似た白い花が咲いている。

3時間で峠、突然展望が開け、Coma Pedrosaが右側に聳え立ち、山脈が左にくると続いている。目前には、広い谷が広がっており、Coma Pedrosa小屋は、左に少し上ったところに立っている。小屋の標高は2260mで登山口から800m登ったことになる。山頂へは標高であと700m余残している。ここからさらに3時間かかることになり、そこから下山すると、最終バスが18・00だからまったく余裕がない。考えてみると、標高差1400mを10時間で往復するというのは、かなりきついことなのだ。旅行中で疲労もたまっており、山頂はあきらめ、小屋から少し上がった広々とした草原で昼寝。天気はよく、青空に雲が浮かんでいる。周りはぐるりと山である。日本の山と形が違って、「山らしい」というか、どっしりとしたものがたくさんある。標高2500mくらいまで植生があり、放牧地となっている。小一時間ほどのんびりしてから、下山を開始。途中、黄、白、赤、紫などさまざまな色の花を眺めながら2時間弱で降りた。バス停前のホテルのBARでビールを飲みながらバスを待ち、15・00のバスで町に戻った。

Coma Pedrosaに登るには、Coma Pedrosa小屋に泊まるか、タクシーかなにか交通機関を調達し行動時間を延ばす必要がある。また、町を起点にした日帰りのハイキングコースは、たくさん整備されており、こつした楽しみ方もできる。

こうして訪れたアンドラではピレネの山の雰囲気を感じることができた。このアンドラを後にして、フランス側のガヴァルニーへ向かう。当然のことながら、山脈の反対側に出るわけであるから、交通機関はあまりよくない。アンドラから日に2便のバスを使い鉄道駅のおスピタルに出て、そこからトゥールーズ、ルルドを経て、又バスでピレネの山懐に抱かれたガヴァルニーをめざす。アンドラからの1本目のバスは、朝5・45発であった。

## 2. ガヴァルニー (Gavarnie)

トゥールーズに9:43に着いた列車を乗り換えて10:04発のバイヨン又行きに乗り、ルルド着は12:05、ここからSNCFのバスに乗りリユーズ・サン・ソベに行き、1日2便のバスに乗り換え、ガヴァルニーに着く。ルルドからは、6便あり駅前から出ている。便によっては直通でリユーズに行くが、途中のピエレフィツテで乗り換える便もある。ルルドを13:41発の便は直通で、リユーズに15:00前についた。ガヴァルニーに行くバスは、17:30。それまでにお金を下ろし、地図を買う。ガヴァルニーに着いたのが18:00過ぎと、この日は一日移動のために費やした。バス停にツーリストインフォメーションがあり、宿のリストを貰って、1番近いところに決める。ここは、ホテルというより、『貸し部屋』の様子だ。荷物を置いた後、夕食をかねて、『村』の探索に散歩に出る。ここは、さすがに山懐の村だけあって、すぐ後ろに山々が聳え立っている。遠くには、「ガヴァルニーのサーク」という、カールが見えている。鴨肉の夕食を済ませ、明日からの山行の準備。登山に必要な道具とそうでないものを分ける。はじめ、スペイン側からの縦走を考えていたが、荷物が重すぎるので断念した。不要な荷物は、宿に預けて、山行に必要な物だけを持ってゆく。



ドッソウ避難小屋

目標は、「最も易しい3000m峰」Petit Vignemale (フチ・ジュニアル3002m)とPic de Tailion (ジュクトタイエン3144m)。

翌8月17日7:00に起きると雷が鳴り雨が降っている。朝食の後様子を見る。宿の人の話だと、今日は天気は悪い。どうしようかと思っていたが、小降りになってきたので、意を決して9:20出発する。今日はRefuge Baysseance (ベイセランス小屋2631m)まで行く。約1300mの登りだ。GR10は通らずに、近道の自動車道路を通り、11:30にCavane D'ossoue (ドゥソウ避難小屋1807m)に着く。ここで雨具を着て本格的な雨中登山。

しばらく平らな河原を行くと、急な斜面が見える。右の沢は大きな滝となって流れ落ちている。滝を巻くように左の斜面をジグザグに上ってゆく。やがて滝の上に出ると、モレーンに出る。2つの雪渓があり、横断する。カールの右端のさらに急な斜面をジグザグに登り、越えると次も大きなカールに出る。岩を砕いて作った道は、右側が数十m切れ落ちている。それから、カールの底にゆっくりと下ってゆきカール壁から流れ落ちる小川を2回渡る。大きなカールである。右の壁をジグザグに登り、乗り越



氷河地形を削る滝

える。雨は降り続け、風も結構ある。足元には、高山植物が次々と表れ、目を楽しませてくれる。途中で、先行する3人パーティーを追い越す。下りのパーティーもいくつかすれ違う。標高2500mくらいまでは、視界が利いていたが、それより上は雲の中。連続する急坂を登って、途中、洞窟が3つ並んでおり、泊った跡がある。坂を登り切ったところで、突然遠くに小屋が見える。標高2500mくらいまで来た。そこから20分ほどで、思ったより早くベイセランス小屋(Refuge Baysseance)に着いた。CAF(フランス山岳会)の経営する小屋である。濡れた雨具を脱ぎ、荷物を入り口の土間に置き、受付に行くと、予約はしたか?。NO

と言うと、今日は満員だ、との事、床にマットをひいて寝ることになるがそれでもいいか、というので、良いと答える。聞いてみると、ピレネの小屋では、基本的に予約が必要なシステムになっているとの事。CAFでもモンブランのエギユグーテ小屋やツプカル小屋ではそういうわけなかったが、ピレネは違うようだ。合理的だといえばその通りであるが、日本と事情が違うのでこういう事が出来る。この日は、あとで、キャンセルがたくさん出て、ベッドで寝られることになるのだが。宿泊料と夕食、朝食で35・22ユーロと、かなり安い。夕食は19:00で朝食は18:00とのこと。外は相変わらず強い風が吹いており、目前に見えるはずのPetit Vignemaleはガスで全く見えない。とても登れる状態ではない。

「定員制」の小屋はさすがにゆったりしていて、ちゃんとテーブルと椅子が全員にいきわたっている。こういう制度もいいのかもしれない。自炊用の部屋もちゃんとあり、ラーメンをつくって食べた。ただ、「乾燥室」というのはないので、濡れた物は「体温で乾かす」しかない。トイレは「手動式」水洗（アラビア式？）シヤワーは故障中であった。そうこうしているうちに、夕食。ポタージュスープ、牛肉煮込みバターライス添え、チーズ、そしてケーキと一応のコースの料理。終わると20:00、外はまだ明るい。強風がやみ、一瞬ではあるがPetit Vignemaleの頂上が見えた。明日もこの天気なら登れる、と思った。寝室は2段ベッドで1人づつに幅80cmくらいのマット、枕と毛布2枚。21:00には寝てしまった。夜明け前に目をさまし、外を見ると、オリオン座が登ってきている。すごい星空であった。風は強い。

明けて8月18日、7:00朝食(変更になった)、カフェオレとパンの簡単なもの。外は雲がちょうどこの高さまであり、晴れたり曇ったり。風は強い。雨が降ってないので、行ってみるか、8:10出発。出かける前に、麓のカヴァルニーにあるCAFのオレ小屋(Grange de Holle)の予約を取ってもらった。



プチビニユマルのケルン



下山途中

峠になつてゐるHourquette d'Ossoue (2734m)まで20分。ここから左のPetit Vignemale 峰をめざす。踏み跡がいくつもついている。右側にカールの切りたつた崖の向つてGrand Vignemaleが下部に雪を抱いて聳え立っているのが見える。道標は全くないが、所々にケルンが積まれている。5分も行くとまたガスの中。800mに背の高いケルンを通過。踏み跡がいくつもついている。晴れていればなんでもない道だが、下りに道を間違えたと、とんでもない方向へ降りてしまうので、方向を確かめながら、目印を覚えながらの登りである。ひたすら登っていくとついに最後になる。岩の向うに細く切れた道があり、そこを通ると、山頂であつた。到着9:15、岩陰に3人のスペイン人がうすくまつて風をよけている。山頂には何もな

くケルンがあるだけ。風は強くガスの中、気温は2℃だから体感温度は零下である。写真を撮つてもらい、9:25下山開始。視界は数m。方向を間違えないよう神経を使いながら降りる。途中見覚えのあるケルンにたどり着いて一安心、峠までほとんど降りる。6人パーティが登ってくるのとすれ違ふ。9:50峠に着く。峠からは視界があり、安心して下る。

10:10ペイセランス小屋の前を通りそのまま降りる。標高2700m以下は、晴れている。昨日の雨の中のとつらい登りもすっかり忘れて、氷河の大地形の中を下る。カールの壁をジグザグに降り、10:52カール底の渡渉地点を通過。花の写真をとりながらゆっくり下つてゆく。とにかく花はいろいろとある。途中雪渓を2つわたり、急坂を降りる。平らな河原にて、Cavane d'Ossoue (ドッソウ避難小屋1807m)に着いたのが12:05。ここで昼食にするが、昨日から調子の悪かつたガスコンロがついに燃えなくなる。せつかくバルセロナで手に入れたボンベなのに……。



崖から落ちる滝



仕方なく、リンゴとクラッカーにする。よくみると、靴に穴が開いている。それでは西から雲が次々に流れてゆく。きつと、上はガスのなかで強風が吹いている。

今日はE<sub>10</sub>小屋を予約しているので降りるだけだ。自動車道はやめて、GR10を通ってゆく。斜面をしばらく登ってゆくと、道はほぼ水平につけられている。谷をトラバスしながら、牛の放牧地の中を通る。牛が至るところに放牧されている。2つの小屋を過ぎ途中でマーモットを見たり、フランボワーズをつんで食べたりしながら、E<sub>10</sub>小屋に着いたのが、15:40、1泊2食シャワーつきワインつきで27・5ユーロの快適な小屋の生活であった。(夕食11€、宿泊10€、朝食4€、ワイン2・2€、絵葉書0・3€)ここでは、4人1室の快適なベッド。夕食も野菜スープ、タブリ(粒々小麦、レーズン、たまねぎなどを炒め味付けした料理)鶏肉煮物、インゲン煮物、パスタ、デザートとワイン0・5リットルと充実したものであった。

翌8月19日は天気がよければ、Saradet小屋に行きもう一つの3000m峰Pic de Tailionに登る計画だったが、あいにくの天気が続き、山の上は激しく流れる雲に覆われたままであったので、ガヴァルニーのサーク(カール)を見物したのち、今回の登山活動を終了した。

その後、「ばら色の町」トゥールーズ、「ワインの町」ボルドー、そしてパリを経て、帰国の途についた。

### 3. ピレネの山歩き概観

ピレネ山脈は、大西洋から地中海まで、フランス・スペイン国境にある、約430kmの山脈である。山歩き、という点から重要なのは、この山脈に沿って走るフランス側ではGR10、スペイン側ではGR11という、



Holle小屋



GRのマーク

長大な歩道である。(GR10: Grande Randnee【仏】、GR11: Gran Recorrido【西】) これらの歩道は、整備され、共通のマークがつけられている。そのほかに、HRPという歩道がある。(Haute Randonnee Pyreneenne: "the classic high-level coast to coast route" Trekking in the Pyrenees【仏】)。これらの道は、山麓の町(村)から町(村)へと結ばれている。次の印がGRのマークで、順に、コースを示すもの、行っていないことを示すもの、コースが曲がる事示すもの2つであり、赤と白のペンキで岩や道路などにかかれている。

町(村)にはホテル他の宿泊施設があるし、山中には、有人・無人の山小屋(REFUGE)やCabaneという小屋(避難小屋に近い)もある。有人の山小屋では、寝具・食事が利用できる。ただし、予約が必要とのことである。フランスの2万5千分の一地形図のREFUGEのマークはRadioとあるのは、無線電話があるということ、小屋に直接つながる電話のようである。フランス山岳会の山小屋については、同会のウェブページにデータが掲載されている。また、フランス山岳会の会員には半額割引、他にも割引のシステムがあるようだ。テント場も用意されている。

地図は、フランス側は、IGN(フランスの「国立地理研究所」)の2万5千分の一地形図、5万分の一地形図。アンドラには、アンドラ政府発行の25000、50000の地形図があった。今回は買わなかったが、スペイン側には、GR11の地図、Editorial Alpina社の地図、スペインの軍用地図、カタルニア地理研究所の5万分の一地図などがあるらしい。

ルートの取り方だが、基本的にはGR10なりGR11、エスコロを歩き、そこから山頂



「行っていない」マーク

への道をたどることになるようだが、プランの立て方としては、ある町からある町へのRをたどる計画がよさそうだ。ただし、日本から行くと、旅行の荷物がじゃまになるため、入り口の町（今回で言うトルルド）に、余計な荷物を預け、登山用具だけ持ち縦走しながら山に登り、入り口の町に戻るのがよさそうだ。もちろん、ガヴァルニーやコトレなどに泊まって、日帰りハイキングを楽しむのもよいが。スペイン側からフランス側（その逆）は交通が不便で結構難しそうだ。ただ、レンタカーなどの足を調達できた場合は別であるが・・・。

装備については、真夏は、普通の夏山装備でよさそうだが、残念なことに今回は氷河を通過することをしなかったため、このための装備がどうかはわからない。ただ、ピッケルを持つ登山者も多数いたし、アイゼンを持っているグループもいた。山小屋で食事つきなら、炊事道具も寝具も不要である。

ガイドブックとしては、日本語では、見つけることができなかった。次の2冊の本は、英語であるが非常に有用であった。

(1) TREKKING IN THE PYRENEES, 2nd : Douglas STREATFIELD=JAMES, Guide Trailblazer ISBN 1873756 50 X Price USA\$18.95

(2) WALKS AND CLIMES IN THE PYRENEES: Kev REYNOLDS, A CICERONE GUIDE ISBN1-85284-328-4 USA\$19.95

(1)は概観の他、各コースの手書き概念図が添えられ、きわめて読みやすく、使いやすい本であった。必要なページをコピーし行動に使うと具合がよい。ただ、この本は、GR10、GR11そしてそれを結ぶ道のトレッキングルートの記事をしている。



「コースが曲がる」マーク

(2) はそれぞれのピークについての記述がある。それぞれのピークがどういついつものものであるかを知るのには必要であった。

右記2冊は、米amazonで入手したが、日本のアマゾンからでも入手できるようで、この方が早く安い。また、「世界の山やま」古今書院「地理10月増刊」1995にも記述がある。

WEBサイトでは、次の2つが有用であった。

(1) アンドラ政府観光局(英文)

<http://www.turisme.ad/>

(2) フランス山岳会(仏文)

<http://www.clubalpin.com/fr/index.html>

(1) は、アンドラの概要、地図、バス路線、ハイキングコースなどの情報が豊富であった。

(2) は山小屋(refuge)などの情報がある。

# スコットランドの山を歩く 2001年11月

2001年の夏、スコットランドの山を歩いた。灼熱の日本から冷涼のスコットランドへ。18時間の飛行のちロンドンへ。さらに2時間の飛行でスコットランドの中心エジンバラへと丸1日の移動のちスコットランドの地に降り立つ。スコットランドの地を2週間余にわたり旅し、6つの山に登った。日本の山歩きとはいくつかの点で違っているという感じた。そのいくつかを、述べてみる。

## 1. 気候と地形

スコットランドは、日本に比べ、緯度が高い。たとえば、今回登ったケルンゴルム(Carn Gorm)山脈の場合、北緯45度で、これは東京が北緯35度、秋田が北緯40度であるのに比べても、相当な差で、樺太北部に相当する。したがって、相当寒冷なはずなのだが、北大西洋のメキシコ湾流の影響で、緯度の割には温暖である。

氷河期には、完全に氷河に覆われたようで、山頂部は削られて平らになり、カールなどの氷食地形も残っている。降水量が少ないせいも、日本のように河川による侵食が進んでいないために、日本の山とは異なった地形である。すなわち、山頂部は平らで、緩やかな丘状の地形であるが、ところどころにカールの急な壁がある。

山の標高自体は最高でも1355mと低いが、寒冷なため植生は、日本の高山と同じような状態である。すなわち、おおそ標高1000mを越えると植物はなくなり、岩と石の世界になる。およそ標高500m以上では、樹木も少なく、草原の状態で、羊の放牧に使われている。それ以下には、針葉樹を中心に林もある。



キリンにて、バグパイプの行進



氷河に削られた地形

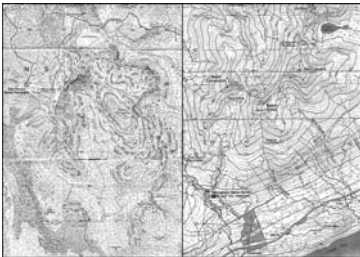
## 2 Munro List

スコットランドの山歩きにMUNROの名は欠かすことができない。スコットランドの3000フィート(910E)以上の山のリストではじめて作成したMunro男爵の名に由来しているそうだ。スコットランド山岳会でリストの管理をしているCOLLINSが1/35万分の1のMUNRO MAPが出ている。284座の山頂が登録されている。「日本百名山登頂」のちびっ子 Munro-baggingというイギリスのヒルウォーカーたちの目標ともなっている。

## 3 地図と道標

スコットランド(イギリス)の地形図は、Ordnance Survey(OS)が発行している。そのOrdnance Surveyの地形図を求めると、いくつかの種類がある。Outdoor Leisureというシリーズ(二万五千分の188cm x 112cm 両面印刷) EXPLORERというシリーズ(二万五千分の188cm x 112cm 両面印刷) Landrangerというシリーズ(五万分の180cm x 80cm)であり、前の二者は限られた地域について発行されている(集成図のような感じの地図)。この地図は多色刷りで美しい地図のだが、登山活動に使うには、なかなか曲者であった。

Ben Macduiの地図(OS)は路(PATH)は細い黒の破線で記述され、他の実線や色のついた線は、よく見にくい。また、constituency(選挙区)の境界線も、似たような破線である。もちろん、岩がけの地形になると、pathは消えてしまふ。(忠実だといえはその通りだが)だから、この地図を使うには、日本の登山



2種類の地図



めずらしい道標 (Ben Navis)

地図とは全然異なった「癖」を知っていないとまずい。

一方、HARVEYから出ているSUPERWALKERというシリーズの地図はすっきりして分かりやすい。日本の地図を見ている人間にとって、OSのものより数段使いやすい。BEN LAWERS (£7・95) を入手したが、他の地域も発行されているようだ。(www.harveymaps.co.uk)

さて、道標についてだが、山の中には、ほとんど0といっていいほど『道標』はない。6つの山に登ったが、例外的にあるだけだ。麓のナシヨナルトラストが管理している土地、ベンネピスのような人のたくさん入る山(それでも、ニカ所だけ)、など、見た道標の数は、全部で10にも満たなかった。また、岩場でのペンキの印なども皆無だ。山頂にも立て札などというものはない。どこも同じように、三角点の標識と思われる円筒と方向表示板(これにかろうじてその山の名前が書かれている)だけ。「こちらは イギリス人らしい、徹底振りだ。」「迷子になるのも自己責任」なのだろうか。

その上、地形は先に述べたように、山頂部は削られて、広い、平らな地形である。これで天気でも悪くガスが出たら、全く方向を失つ。そのため、地図とコンパスは必携である。

#### 4. 資料

登山事情についての日本語の資料の少なさは、驚くほどだ。書籍をさがしたが、ほとんどない。平凡社ライブラリーの辻村伊助著『ハイランド』は貴重な一冊である。が、なにぶん古い。1914年、今から80年以上も前の本である。辻村は、その直後、帰国し、関東大震災の際に、箱根湯本で山崩れに吞まれ命を絶っている。今回の旅は、80年前の、辻村の跡を追っての旅であった。所々に、辻村が書き残したのを見出された。

当地では、資料は、たくさんある。書店に行けば、地図もあるしガイドブックもある。今回は、弟が入手し、送ってくれた「SCOTLAND'S 100 BEST WALKS」を半年にわたり、折に触れて読み、コース選定の参考にした。

また、the Internetも便利に使った。とくに、スコットランド山岳会のwebサイトは、参考になった。問合せのメールにも答えていただき、つくづく便利な道具だと思った。Scottish Mountaineering Club (<http://www.smc.org.uk/>)

現地に行けば、書籍、地図、ガイドブックなど数多く出ている。その中で使い勝手が良かったものが「THE MUNRO ALMANAC」である。重厚なイギリスの本の中では、新書本の大きさとコンパクトに必要な情報が載っている。携帯に苦にならない。

## 5. 行程

今回のスコットランドの旅の行程は、次のようであった。

Edinburgh---Braemar---Aviemore---Inverness---Fort William---Killin---Drymen---Glasgow---London

## 6. 交通機関

今回のスコットランド旅行は、バス、鉄道の公共交通機関を利用した。しかし、山歩きの目的では、この選択はあまり賢くなかったようだ。道路はよく整備されており、また、人口密度が低いところでは、交通機関の便は悪い。特に、登山口へのアプローチは、交通機関もなく、タクシーさえないとところもあった。こういうところは、マウンテンバイクを借りて、サイクリングでアプローチを辿った。また、町から町への移動もたっぶり時間がかかった。車であれば、途中で小さな山に登って・・・などの「寄り道」も出来ただろうが、それもむづかかった。スコットランドの山旅は、レンタカーで行くのがお勧めである。次に6つの山の登山の記録を記す。



ベンマクドゥイ (Ben Macduj) に登る。

2001年7月29日(日)「ブレマーに宿泊」

ロホナガルに行く予定であったが、日曜日で、一番のバスが運休のため、急遽変更し、ベンマクドゥイに向かう。

リンオブデイーに行く交通機関がないため、8:25にマウンテンバイクを借りる。一日15ポンド。

ブレマーの町を後にし、9:10にLinn of Deeにつく。ここで舗装道路は終わる。左のテリーロッジへの道に入る。未舗装だが車が通れる広さの道である。といっても、一般の人は歩いている。

9:40にテリーロッジ。自転車置き、川を渡る橋をロッジの手前で見つける。ところがこれは、農家に行く道で、川を渡れなくなり引き返す。ロッジを過ぎたところに小さな橋がかりこの橋の向こうに標識がある。道をたどりGlen Luibegを進む。右の、Carn Cronnが姿を変えて行く。まっすぐ行くと、ラーリヒグリーヌを経てAvenmoreアヴィモアに行く道だが、今日はLeibeg Burnを詰めて、ベンマクドゥイに取りつく道である。

右への分岐があるはずだが、見つからずとつとつ、Luibeg橋へ来てしまう。数多くいたハイカーたちはみんなこの橋を渡りラーリヒグリーヌに向かってしまう。仕方がないので、斜面を登り、本来の道と合流する地点を探す。斜面全体が湿地でスプスプと靴がはまってしまう所ばかりである。踏み跡らしきものを見つけては、に途切れ、また歩いていると踏み跡に出会うということを繰り返しているうちに、針金でできた柵にぶつかる。川のほうは通れないので、柵を乗り越えて進む。そうしているうちに本来の道に出合ったようだ。本来の道は、川からかなり離れていたようだ。沢の分岐点まできて、正面に広い大きな尾根が見え、取りつく。

11:50ここで昼食。見わたす限り人の姿はない。天気は曇が多いが、悪くない。



マウンテンバイクを登山口に置き登り始める

昼食後、この尾根、Ston Riachを登り始める。道はすっかりとついで標高920mまでくると、草地から石だらけの斜面になる。地図ではこのあたりから道がなくなっている。尾根を越えるあたりから、風が出てくる。尾根を詰めたところに大きな岩があり、越えると言鳥が4羽いた。

13・05ケルンのところで休む。(スコットランドの地名Cairnは石の積まれたものを表すゲール語のようだ)さらに進むと、右側に崖が見える。広大な斜面を所々にある踏み跡を辿りながら登っていくと、1時間ほどで平らな山頂の一角に出る。風がさらに強くなっている。このあたりは地図には道が載っていない。左の斜面に人が見える。とにかく広い。左にゆるやかに高くなっている。途中、細い流れを通過。

13・55やっと山頂に到着。山頂には、三角点を示す標識と方向指示板(山の展望図)の2つしかない。方向指示板の中にBen Macduiと書いているだけで、何もない。そういうえば、登ってくる途中、デリーロッシの橋に道標があっただけで、ほかにはまったく見かけなかった。

人が10人ほどいる。5人パーティーはラーリッヒグリユーの谷のほうから登ってきた。地図には載っていないが、あちらに道があるようだ。(今辿ってきた南からの道も載っていないが)。強風のため、石を積み上げたシェルターのようなところで、風を避ける。気温12度、気圧867h.p。雲は高くラーリッヒグリユーの谷を隔てたブレイリーアツハ、ケールントウルなどの山頂が見える。とにかく、英国で第2の高さの山のだから見晴らしがよい。

強風の中、15分ほどの滞在の後下山。南の道は、はっきりしなかったのに比べ、ケルンが次々と積んであり、はっきりした道だ。風は相変わらず強い。左にラーリッヒグリユーが見えている。実は、違う道を辿っ



背の低い草の生えた地形



山頂の三角点

ているのだが、それに気がつくのはまだしばらくしてのことである。地図は風に吹き飛ばされそうなので、ザックにしまいこんだ。手元には、本に付いていた概念図しかない。しばらく行くと池があり、そこで右に曲がるはずだ。進んでいくと、確かに小さな池があり、そこで、道が左右に分かれている。右の道を通る。ただし池の位置は図と違っていている。さらに下ると、別な大きな湖に出た。進む方向を間違えたみたいだ。位置を確認するためにそこにいた人に、デリー谷はあれか？と聞くと、違うという。山頂から北側に延びる道を Carn Gorm の近くまで来ていたことに気がついた。時に 15 : 40、1 時間半近くも間違った方向に下りてしまった！

引き返すしか道はない。なぜこうなったかは、後述するが、とにかく戻るしかない。幸い、急な下りがなかったこと、暗くなるまでの時間が充分にあるので引き返す。16 : 12 に池、16 : 50 に頂上。

ここで東に進む道を見つけ、地図で確認し、道をたどる。17 : 37 に Loch Etchachan (湖) に着く。大きな湖だ。地図の通り、右に道を取り、ここから Glen Derry の長い下り。

18 : 05 Coire Etchachan の橋を過ぎ、19 : 35 に Derry Lodge デリーロッジに、10分で15分休んでから、マウンテンバイクに乗り出発、10分で Lin of Dee、20 : 40 プレマーのホテルに着いた。ホテルのバーでビールを飲む。つかれた、うまい。

風呂に入り、外食する気力もなく、カップラーメン + ワインでバタン。よく眠った。充実した12時間行動だった。

なぜ路を間違えたか？



山頂の石のシェルター

1. Scotlandの山には、「基本的に一切」道標がない。路の途中はもとより山頂からの下山道の道標も一切ない。
  2. 強風で、地図を出すのが大変であった。
  3. 地図には、北へ降りる道と東へ降りる道の2本しか載っていない。下山道の大まかなつかみ方は「東へ少し、その後北東へ進む」ところが、実際に歩いたのは、「北東へ少し、その後北へ進む」コンパスを出して確認しなかったことと、先行する登山者が一人、北西方向に降りていった。これを、北に下りるルートと錯覚した。
  4. 途中では「おかしい」現象はいくつもあった。「池」が小さい、進行方向の右側にある、ラーリッヒゲリユーが見える、等々にもかかわらずその時点で対応せず、1時間30分も降りてしまった。
  5. イギリスの地図OSの道(Path)の記載は、きわめて読みにくい。Ben Macdui頂上からは、緑の実線が2本北と北東に出ているがこれは道ではなく、境界線。道(PATH)は、細い鎖線で、植生の草地の記号と紛らわしい。これで惑わされてしまった。
  6. これまで道のない南側から登ってきたので、立派な道に惑わされてしまった。Ben Macduiの主要な登山道は、北側のAviemoreから登つてきたものであることを知らなかった。
- その後の対応
1. 日が長いことが有利になった。(10時ごろまで明るい！)
  2. 地形が平らなので登り下りの時間差があまりない。
  3. まだ体力に余裕があった。
  4. 天気がよく、見通しはきいた。

ロツホナガール (Loch Nagar) に登る。

2001年7月30日

長いアプローチであった。バス停から登山口まで、行きに3時間、帰りに2時間かかった。アプローチはBalmoralのバス停から、10:18バスを降り、Dee川にかかる橋を渡ると有名なBalmoral城の入口。ここを左に進み、ゴルフ場を過ぎると、ロツホナガール蒸留所の看板があるところで、右へ入る。

少し登ると、郵便局 (Post Office) がある。道は3方向に分かれているが、どれも進入禁止の道路標識があるが、左の道を進む。途中、人家の前を過ぎ、右に門柱を見て進んでいくとゲートがある。それを越えると、林の中をどんどん進む。道には馬の糞が落ちていて、ここは馬の通り道だとわかる。十字路に出会い、ここで左に曲がる。わかりにくい。しばらく行くと林は切れて、広々とした谷になり、はるかかなたにロツホナガールが見えてくる。あとは

ひたすら道について行き、2~3時間の行程で分岐につく。

ひたすら歩いているうちにロツホナガールの正面から見るようになり、すばらしく形がよいのが印象的である。ここを過ぎると、取りつき地点である。途中、鹿の群れを見たり、Eatherの薄紫の花に染められた山と谷の広々とした景色を堪能したりの長いアプローチである。実は、南側に1時間くらいの道があるのだが。

ここで、サンドイッチとジュースの昼食。そして一休み、いよいよ登りにかかる。13:05に取りついでから高度差200mの整備された道を30分ほどでコルへ。ここから湖が見えはじめえる。ロツホナガールとは、この湖の名である。湖の傍にテントが1張りある。これより150mのガラガラ岩の道をよじ登っていった。イ



Dee川にかかる橋



バルモラル城の入口



ロッホナガール頂上

ギリスの5万分の1の地図の等高線は10mおきだから、すごく急な斜面に感じるが、実はそれほどでもない。  
登り切ると、頂上の一角。カールの壁上に、半円形に頂上がありこれに沿って北上する。山頂直下まである草原には、羊が群れている。この羊は、野生なのだろうか。

途中、雷鳥を見る。また、頂上ではヒバリに似た鳥がえさをついばんでいる。

大きなケルンがあり、これを過ぎたところ、一番西にはずれたCac Carin Beagが1155mで最高点である。2:30、気温8。そこには花崗岩が積み上げられたように頂上の突起があり、そこに測量用標識(三角点標識)と方位盤が置かれている。方位盤には山の名と方向、距離がびっしり書き込まれている。昨日登ったBen Macduiの名もあった。北方の高曇りの空に下に、ケルンゴルドム山脈の山々が近く見えている。山頂には登山者が数名。

しばしの休憩の後に14:40下山開始。15:35に鞍部に着き、15:50に分岐点。

あとはひたすら歩き、2時間でバス停。なんとバスは出たばかり。1時間少し待ち、19:23にブレーマーの宿に戻る。外に食事に出るのも面倒なので、バス停近くでサンドイッチとサラタを買って、部屋で食べて、すぐ寝てしまった。

翌日は、ラーリツヒグリーヌを通してAviemoreに行こうかと考えたが、アプローチの足がなく、荷物の発送もできそうにないなど状況がよくないので、あきらめる。(ブレーマーにはタクシーはない)

ぐるっと遠回りして、バスでアバディーンに出る。途中、バスの車窓から遙かに、昨日登ったロッホナガールが見えていた。とてもいい形の山だと思つづく思った。



羊が群れている

アバディーンからは海沿いに北上、インバネスからアヴィモアAviemoreに1日ばかりで移動し、アヴィモアで1泊£18の元気な夫婦ジェニーとコリンが営むB&B、Carn Moreに入り、Carn Gorm山脈を北から見ることになった。残念にも、通過できなかったラーリッヒグリュウの谷間が大きく見えている。

ケルンゴルム (Carn Gorm) に登る。

2001年8月1日

ケルンゴルム (Carn Gorm) は、この山脈の名にもなっている山である。ゲール語で「青い山」の意味だということだ。今日では、770m地点まではバスが行く。北側斜面全体がスキー場になっている山であり、ふつうはリフトが動いている様子である。

Aviemoreの鉄道駅からバスに乗り、登山口に向かう。終点の駐車場を10…15に出発。スキー関係の工事中で、登山道がなかなか見つからない。ようやく目印の電話ボックスを見つけ、尾根についた登山道をたどる。天気は悪く、小雨がポツポツと降っている。

2人の男が先行している。平らな尾根につけられた道を進むうちに、山頂直下で、レストハウスの工事現場に着く。ここから整備された石畳の道を登ると、平らな山頂にでる。このころからガスの中に入り、強い雨と風の中を歩く。何人かの若者のパーティーとすれ違う。

頂上は平らな台地で、ケルンに導かれて頂上の大ケルンに至る。11…30ラジオ中継施設で雨宿り。2人のイギリス人がいた。挨拶をして、しばし、どこから来たとか山はどうかとかの話をする。2人はぐるりと回るらしい。来た道はつまらないので、天気によければそうするつもりだったが、この天気ではどこを歩いても同じな



頂上の大ケルン



石畳の道

ので、引き返すことにする。この山脈には、南側の Breac na Caille から入り、今日また北側から入りほぼ縦断したわけだが、その気になれば、何日でも居れそうな場所だ。ただ、麓までの足を確保する必要があるが。

11:45 出発。道沿いに下ると工専用車道に出る。そこからは、泥の工専用の自動車道を降りるつまらない道であった。1時間で登山口の駐車場。1時間ほど待った後、バスで Aviemore に戻る。

日本でもおもしろみなくなった山はたくさんあるが、このケルンゴルムも、ただ登るだけなら、登山・ハイキングの対象ではない山であった。

ラーリツヒグリュウなど面白そうな山はあるが、Aviemoreでの行動はこれで終了して、旅を続ける。翌2日、インバネスに行く。近くのフォートジョージ、コーダー城、クロードンの古戦場を回る。思いがけず、日本人の経営するB&B“あじさい”に泊まり、久しぶりに日本語をしゃべり、日本食を食べた。

翌3日、ネス湖を半分ほど船で渡る。細長い湖の両側にそびえる山々も面白そうだった。その後シティリンクのバスで、イギリスの最高峰ベンネビス(Ben Nevis)の麓の町フォートウィリアムへ向かった。

ベンネビス (Ben Nevis) に登る

2001年8月4日

Ben Nevisは英国で最も高い山(1355m)である。海拔0mの港町フォートウ



ケルンゴルム山脈の山々



イリアムの背後に聳えており、山頂まではそこから歩くことになり、けっこうな登りである。日本で言えば富士山のような存在で、登山者も多く、他の山ではないような「登山者対策」が行われていた。これは、「自己責任の国」イギリスでは、異例なことのように感じられる。

まず、フォートウイリアムのi(ツーリストインフォメーション)には、「ベンネビス登山の注意」というコーナーがあり、また、ベンネビス登山のパンフレットも販売されている(30p)。また、宿で「ベンネビスに登る」というと、装備や行程のチェックリストを渡され、記入することが求められる(これは下山確認まで保存され、もし下山しない時には警察の登山センターに届けることになっているようだ)。「これまで登った他の山々と違って、これほどまでにきめ細かにしているのは、この山での入山者の多さとこれまで起こった遭難の多さの影響のようだ。それに、のちに述べるが、この山の天候の変化の速さは、準備無き登山による遭難を引き起こしているのだらう。

#### 注意書きのパンフレット



さて、登山の方は、次のようである。8月4日(土)の朝、スコッティッシュフレックファーストの朝食をすませ、フォートウイリアムのハイストリートにあるWest End Hotelを出たのが8:25、昨日までの天候と打って変わって、晴れて気持ちのよい天気だった。登山口のAchinteeへの1時間足らずのうち雨が降り始め、Achinteeに着く頃には、ひどい雨で、雨具を出し上下を着るほどであった。登山口には3人があり、そこに車が停まっている。9:15羊用の柵を越え、歩きはじめる。放牧場の道だ。まるで10月の雨の中を歩いているようだ。

20分で、YHからの道に合流。さらに山腹を捲くように登り続ける。アルミで



牛の放牧地を通る



アルミの橋

きた橋を2つ越える。このころから雨が止み、雨具がうつとつしくなる。10:30にコルに出る。Meall an t-SuidheとベンネビスのコルでLoch Meall an t-Suidheという池もある。

天気はまた悪くなる。ベンネビスの山頂部は雲の中にある。ここから左に行き、周回コースでCarn Mor Deargを経て、ベンネビス山頂に行くことも考えたが、この天気なので止めにして、直接山頂への斜面をジグザグにつけられた石ころだらけの広い道を登る。英国の山には、導標は無いものと思っていたが、このベンネビスでは、コルの下に1個所見つけた。

これも、「国民的な山」の所因か？列をなして登山者が続いている。途中、705 m地点、1150 m地点で休憩し12:40に広い山頂の一角の三角点に着く。登山口より3時間半、フォートウィリアムを出て4時間余りであった。

山頂には、建物の跡の石組みがあり、また、他の山とおなじ三角点標識の柱があり、そして方向表示板ははがされて石組みだけになっていた。そこに多くの登山者が食事を取ったり写真を撮ったりしてにぎやかだ。天気も霧中であるが風はなく、雨具を脱ぎ、湯を沸かしてカップラーメンを作る。食事を終えた13:00ころ突然、霰が降ってくる。大急ぎで雨具を着、下山にかかる。何という天気だろう。

ジグザグの道をひたすら下り、途中のコルが14:05。ここで、周回ルートへの道を少し歩いてみる。ぬかるみの小川の悪路である。これがスコットランドの普通の道で、ベンネビスの道は、整いすぎている。再び戻って、さらに下ってゆく。天気は良くなり、初めて夏を意識する。登山口へ15:00。



珍しい道標

そこにあるINN BEN NEWSでビールを一杯飲んで、物足りないが、登頂を祝う。そこから40分、川に沿って町までの道を歩き、フォートウィリアムに戻った。

翌日は、英国で一番美しい谷といわれるグレンコー (Glencoe) で登山とも思ったが、11日は、City Linkのバスから見物し、Killinの町へと移動する。A 85添いのLix tollから、KillinへのPOST BUSは、日曜は運休だといわれ、2マイルの道をKillinまで歩く。ようやく着いて、ここで紹介されたのが、1泊26£の宿 Fair View Houseであった。

無風晴天の山ペンロワーズ (Ben Lawers) に登る。

2001年8月6日 (日)

8月6日の朝は、昨日までの天気がつそのようにすっきりと晴れた空だった。

7:30朝食を済ませ8:00に宿 Fair View Houseをマウンテンバイクで出発。キリンの町を出て、上り坂のA 83を進む。途中2個所のキャンプ場を過ぎ、なかなかピジターセンターに行く道が見つからない。舗装してないはずはないのにと思っている、ようやく左に登る道を見つける。

そこから林の中の急坂になる。途中、自転車を押しながら、放牧地に出ると、傾斜は緩やかになる。羊が草を食べている。薄紫の薊の花が咲き刺のある葉には、羊の毛が絡まっているものもある。9:15にピジターセンターにつく。

支度をして、登りはじめる。天気はあいかわらず良く、スコットランドの夏を味わう。山がよく見えている。

ナショナルトラストが管理する土地で、羊の放牧場のゲートをまたぐところには、



B & Bの庭から山を見る



羊の放牧場の柵

水を溜めてあり、靴を洗うようにと指示されている。植生を保護するためである。また、道を外れないようにとの注意書きもある。

家族のパーティーが先行している。9:50尾根道と捲道の分岐に着く。尾根道を進む。自転車をこいだせいか、疲れが溜まっていて足取りは重い。途中2回休んでベン格拉斯 (Ben Glas) の頂上 (1105m) に着く。

一部に雲はあるが、晴れて遠くまで見渡せる。向いにはこれより登る Ben Lawers が大きくそびえている。ベン格拉斯の北側は、カールの壁で、切れ落ちている。休憩の後コルまで降りるのに15分かかる。ここから急な登りの始まりであった。

ベン格拉斯から30分たって12:00にペンロワーズの頂上に着く。

360度の展望。眼下に湖Loch Tayが細長く見え、その右にはKinnの町もみえている。周りの山々もよく見えている。特に北側に続く Meall Garbh や An Stuc が見事だ。山頂には2人組が2組だけ。三角点標識と方向盤といういつもの組み合わせ。

頂上の岩でガスに火をつけ、最後のカップメンを食べ昼食。天気といい、景色といい、これまで登ってきた5つの中では群を抜いている。スコットランドの夏のさわやかな山である。

30分休んで下山。約15分でコル。きらきら輝く石が多い。コルにある小さな池も、風がないので青空と山の影が映っている。羊はこのあたりまで来ている。

下りは Meall Corranach とのコルを通る捲き道を降りる。氷河特有の、広い谷が目前にある。ベン格拉斯の北側のカールの底を横切り、Meall Corranach とのコルを越えて、南にゆっくりと下がってゆく。途中合流地点を経て、ヒジターセンターに



ペンロワーズ頂上とタイ湖

戻ったのが14:00。

ビクターセンターを見学していると、係の女性が「朝マウンテンバイクで登ってきたのか？」と話しかけられた。朝、車で追いついていったようだ。そういえばみんなここまで自動車で登ってきている。下りはあつという間。10分でA827、そこからキリンの町まで15分という時間で着いた。夏のスコットランドらしい登山に満足感を覚えた。いい登山だった。

14:40キリンに戻って、レンタルバイクを返し、町のパブで飲んだビールがうまかった。

翌日、次の目的地Ben Lomondに向かい、7:50のバスでカレンターを経てスターリングへ。途中、曇った中にベンレディを右に見て、通りすぎた。この山は、登山を見送る。スターリングのバスセンターに9:35。ここで、Balloch行きに乗り換え、Drymen(ドリメン)に向かう。Ben Lomondの登山口に最も近いのはRowardeanであるが、ここまで行くバスはない。手前でレンタサイクルのある町がDrymenなのだ。11:00過ぎにDrymenのバス停に着き、ツリーストインフォームションでB&B ELMBANKを紹介される。荷物を置いた後、明日の下見を兼ねて、バスでLomond湖畔のBalmahaに行き、Lomond湖の散策を楽しむ。小島が数多く浮かぶ、松島のような湖だ。ここは、West Highland Wayが通り、イギリスのハイカーにとって有名なところだ。

ベンローモンド(Ben Lomond)に登る。

2001年8月8日(火)

8月8日、8:40にDrymen(ドリメン)を出発。天気予報は、いつもと同じく「曇り時々晴一時雨」と言っ



コルにある小さな池

何でもありの天気である。昨日のうちに借りておいたマウンテンバイクに乗って、ローモンド湖に向かって進む。途中の道で、夜中、自動車にひかれたウサギに混じって、針ねずみの死骸があった。

1時間10分たった9:50に登山口のローモンド湖畔ロウアーテナン(Rowardennan)の駐車場に着く。例によって、登山口にも標識はなく、SCOTLAND'S 100 BEST WALKSというwell-sign postedとなっているのだが、工事現場で働いている若者に教えてもらい、ようやく登山口を見つける。

トイレの脇に道があり、なるほど、青色に塗られ、赤の印がついた棒が立っている。何も書かれてはいないが……。知る人ぞ知る登山口である。この国の登山者は、知らない山に行くとき、一体どうしているのだろうか。余計な心配までしてしまう。とにかく、登山口が見つかって林の中を歩きはじめ。National Trustが管理している土地で、水槽があり、そこで靴を洗うように指示している。Ben Lawersと同じく、植生を攪乱しないようにするためだ。(その割には、犬を連れ込むこと自由などとなっているのだが……)

30分ほどで森を突っ切ると羊の放牧地のゲートをまたぐ。すると広々とした尾根に出る。道はしっかりとっている。ただし、あの赤い色のついた青い棒の標識はなくなっている。あとは何もなし。

羊がいる広い尾根をのんびりと1時間半も進む。途中で、2人組、単独行、犬を連れ親子など数パーティを抜いたり抜かれたり、また休んで、小島が点在するローモンド湖と南側に広がるスコットランドの南部の平地を眺めたりしていた。(Ben Lomondはもっとも南に位置するモンローリストの山だ。)

そうこうしているうちに、ベンローモンドの山頂近くの急坂に着く。シグザグに登ると、反対側の崖が見



ベンローモンド山頂



ベンローモンド山頂

えている。南側から見るとゆったりした丘のように見えるこの山も、北側はカールの壁でそそり立つ崖である。急坂も20分ほどで山頂。12:35登山口より2時間半余り。例によって、三角点標識以外は何も無い、まあまあ広い山頂で、5人ほど人がいる。二人連れ、犬を連れたい父子、単独行者などが思い思いに座って何か食べたり休んだりしている。展望があり、いい気持ちだ。気温は8度C。ここで、朝買ったサンドイッチとレモネード(1・99 + 1・99 + 0・28 = 4・24 £)で昼食。突然ぱらぱらと雨が降り始める。雨具を出して出発。雲の高さは2000mくらいか。まわりは良く見えている。

下りは、別ルートをとる。SCOTLAND'S 100 BEST WALKSによれば、北のリッジを降り、西に行き、南に下る道をたどれ、となっている。登ってきた尾根の東側に平行して伸びる尾根を下るようだ。山頂から、道が見え隠れしていた。北のリッジはこれまで来たハイキングのような道とは全く違った道であった。カール壁を下る急な道で、道が真下に折り重なってみえている。道はしっかりとしているが、とんとん下る。20分ほどで鞍部に降り立つと、2000m位下っている。ここからは稜線歩き。気持ちの良い道がついている。スコットランドらしい風景の中を最初のピーク Bealach Bhrìghde は左をまき、次からは全部のピークを通って下ってゆく。

池もあり、ヒースや牧草が生えている稜線である。左に登ってきた南の尾根が大きく見え、右にローモンド湖が細長く、その向こうにはまた山々がある。登りの単調な丘歩きと違って山らしい道を歩いている。スコットランドでの山歩きも、今日で終了。最後に気持ちのよい下りでも快適だ。シダの中を分けて14:30にWest



西側登山道 ノースリッジ

Hiiland Wayと小川と橋のところまで合流した。

もちろん入り口の標識も何もない。ここが登山道の入り口だとは気がつかないだろう。道路にあらだけ標識をつける国民がなぜ自然の中で文字を拒むのだろうか？今回の6つの登山の中で難も含め、「文字」が書かれていたのは、デリーロッジの1箇所、ベンネビスのいくつかと、この山の1箇所だけであった。登山に對する考え方の相違だろうが。

それはさて置き、15分歩いて、マウンテンバイクをおいた登山口に戻り、ローモンド湖畔、West Hiiland Wayと平行する道を走り、1時間のサイクリングでDymenの町に15:55に戻った。レンタサイクルを返し、「スコットランドで最も古い」というバフ(Clachan Inn(est.1734))で1バイントのラガーでスコットランドの山の無事終了を一人祝った。

つかのまの蘇国の夏を山に知る

ヒース咲きつかの間の夏を彩りぬ

山々にヒース紫にけぶり立つ

山霧に白き羊の点々と

紫の薊に羊毛からまりて



ベンローモンドの標識



## モンブラン登頂の記 1998年8月8日(土)～9日(日)

モンブラン(Mont Blanc)はヨーロッパアルプスの中でフランスにあり、モンブラン山群といわれる山群に属している。標高は4807mでヨーロッパアルプス中最高である。

1786年8月にJ・バルマとM・バカールにより初めて登頂されて以来、約2世紀が過ぎる。その間、M・バロをはじめとして、ルートの整備、小屋の建設などがされていった。なお、初期には、ボゾン氷河が登路にとられ、氷河上のクレパスにはしごを掛けるなどしてのぼられていた。

現在のルートは、サンジェルベ(St.Gervais)発のトラムウェイでニーデゲル(Le Nid d. Aigle/鷲ノ巣)まで行き、そこからグーテ小屋(Refuge Gouter)を経て、翌日ドーム(Dome du Gouter)を通り山頂に至るコース、または、エギエトウミナイ(Aiguille du Midi)からロスミック小屋(Refuge des Cosmiques)を経て、モンブランタキエール(Mont Blanc du Tacule)・モンモナイ(Mont Maudit)の横を通り山頂に至るコース、グランミユレ小屋(Refuge les Grands Mulets)を経てドームのゴルに行き山頂に至るコースなどもあるようだ。そのうち、最も一般的なコースである、グーテ小屋に泊るコースで往復した。

シャモニーには街の南に2個所のキャンプ場がある。今回は、このうちのlie de BARRATキャンプ場をベースにした。キャンプ場は、芝のきれいな快適なところであった。トイレや炊事スペースのほか、シャワーもついであり、値段も7日泊って290フラン(日本円にして約7200円)であった。今回の山行では、



天に続くステップ



グーテ小屋に至る道

ヨーロッパに入って体調を壊し、このキャンプ場のテントの中で5日間休養をとる事になってしまった。行けるところまで行ければいいやという事で出発した。

シャモニーの教会前にあるバスターミナルを7:00のバスで出て、レスーシュ(les Houches)のロープウェイ乗り場まで約15分(料金15フラン)そこからロープウェイでベルビューまで5分(往復70フラン)かかり、乗り場から3分ほど歩くとトラムウェイの駅に着く。そこからニーデグルまでは15分ほど(往復66フラン)かかる。ニーデグルについたのは8:30頃であった。

ニーデグルは標高2386mで、ここより1431m登ったところにエギュドウグーテ(グーテ針峰)とグーテ小屋がある。ニーデグルの駅を出たところからグーテの小屋がはるか高いところに見える。

はじめは、石のころころした道を登ってゆく。約3000mのところまで氷河を横切る。ここにテートルースの小屋がある(標高3167m)。これをすぎると、クローワールを横断するが、これが上部からの落石の多いところで、落石のない時を見計らって、走り抜けなければならぬ。午後になるほど落石が多くなるようだ。それは、このクローワールの上部で氷が溶け落石が起こるからである。

これを過ぎると、エギュドウグーテから伸びる尾根を登ってゆく。かなりの傾斜があるが、岩が連続する中を道がつけられている。昨日までの体調から、「病み上り」の体にこの登りはこたえた。結局6時間近くかかって、15:00にグーテ小屋に着いた。普通なら4〜5時間の行程である。

グーテ小屋(Refuge de Aig. du Gouter)は標高3817mにあり、富士山頂よりも



ニーデグル駅

高い。気圧はすでに地上の2/3くらいであり、高度障害が出る高さである。続々と人が来て、ベッドは一人分幅が50cmくらいという、日本アルプスの混雑した時期並みである。小屋では、食事の時間を除き、眠りこけていた。食事は、スープと肉と野菜とデザートと一応コースではあった。21:00頃に日が沈むのが見えた。天気はとても良い。

翌日は、モンブラン頂上までの標高差約990mの雪上を歩くコースである。先人たちは、このコースを早立ちして、日の出前に歩く事を勧めている。ガストン・レピリアは「早立ちしすぎたのを絶対に悔いる事はない。遅立ちした事は常に後悔する。」と書いている。「モンブラン山群」山と溪谷社。

翌朝1:00に起床。2:10に小屋を出た。快晴、星が見えている。はじめに、稜線をしばらく歩き、ドームドゥグーテ(Dome du Gouter)の登りになる。十七夜くらいの月が煌煌とドームの広大な雪の斜面を照らしている。

雪の状態は良く、アイゼンがサクサクきいて気持ち良く歩ける。が、高度の影響で、体は重い。ゆっくりゆっくりと前進する。約2時間かけてドームの頂上の左を巻き緩やかに下ってドームのノル(4250m)に出る。ここから急斜面を30分登ると、バロ小屋(Refuge Bivouac Vallot 4362m)に着く。これから登るボスの山稜とモンブランが、はるかに高く見えている。ボスとは、「瘤」の意味のフランス語のようだ。

大ボス(Grande Bosses 4513m)から小ボス(Petit Bosses 4547m)までの急登を上り詰めると、両側が切れ落ちている稜線を通過する。ものすごい高度感がある。右には1000m以上、左も数百mの斜面である。すれ違う人はいないが、少し気が重くなる。が、そんなことは言っておれず、ピッケルを打ち込み、アイゼンを利かせて、ひたすら登っていく。「天へ続くステップ」と呼ばれている。



ボスの山稜と頂上が見えてくる

この頃、日が昇る。正面にあってサンガラスをかけていても眩しいくらいだ。やっと通過すると、モンブランの頂上直下に至る。右側の山々には、巨大なモンブランの影がうつっている。実に大きな影だ。ここから見ると、モンブランは平らな円いイメージはなく、三角形に切り立っている。馬の背のような形になっている。

その稜線を注意深く、薄い空気にあえぎながら登っていくと、傾斜が緩くなり、先の方に人が群がっているのが突然目に入る。ここが頂上だ。

最高地点らしきものも頂上の印もない、実にあつけないところだが、もう登りはない。標高4807m。ヨーロッパの最高地点だ。時に7:25。グーテ小屋を出て5時間15分での登頂であった。稜線を登山者が続いでくるが、モンモディ方面から来たパーティもいる。

まわりは、東にはエギュドウミディやグランジョラスの向こうに、マッターホルンやモンテローザなどのヴァリスの山々、そして、ベルナーオーバーランドの山々、さらにその向こうにもアルプスは続いている。南はイタリア側だ。西にもアルプスの山々は続き、北にはシャモニーの町の向こうに山々は続く。気温は零下6度。天気快晴。じっとしていると寒くなってくる。

写真を撮り、景色を見ていると瞬間に時間は経つ。

8:00に下山開始。35分間の滞在だった。登りの人とすれ違いながら、注意深く、アイゼンを利かして、ピッケルで確かめながら、慎重に急な道を下りる。登りよりも、なお一層、高度感がある。落ちたら終わりだ。まだ雪は固いので、アイゼンが利くが、午後になって雪が団子になると、大変なところであらう。

1時間でバロ小屋、さらに1時間でドームのコルに着く。ここまで来ると、危険な所はなくなり、精神的にはほっとする。ドームの広大な斜面を降りる。雪は少し



ピオナッセイ針峰

腐りはじめている。

そして10・45にグーテ小屋に戻りアイゼンをはずす。ここで、暖かい紅茶を飲み、小屋代の支払いを済ませる。1泊94フラン、夕食100フラン、ミネラルウォーター2本(3リットル)で62フラン。一休みして、12時に出発。

岩の尾根を下ってゆく。体調はすいぶん良くなり、昨日の登りで苦労したのがずっと昔の事のように。先に行く人が真下にみえるような急斜面である。落石に注意しながら、それなりに神経を使う道である。1・50にクーロワールを通過する。テートルス小屋のそばの氷河の縁で休憩。その後がらがらの道を歩き、ニーデグルに3・20到着。あとは、トラムウェイとロープウェイに乗るだけだ。振り返ると、グーテの小屋に、雲がかかりはじめていた。

それにしても、今回の山行は、体調は優れなかったが、天候にはめぐまれた。まさに天の恵みだ。キャンブに戻り、テントを撤収。ちょっと賢沢であるが、その夜は、420フラン払って、風呂付きのホテルに泊り、久々の風呂に入った後、ひとり祝杯をあげた。

### 追記

帰国後の8月25日、「モンブランで8人が死亡」という表題の新聞報道がなされた。それによると、標高4000m以上の場所のみぞれ交じりの雨が降り、その後、気温が急速に下がって地表が氷結するという、大荒れの天候に見舞われ、23日と24日の2日間でフランス、ドイツ、ハンガリーなどの8人が、尾根からの滑落やクレバスへの転落などで、死亡したとの事である。登頂は天候の恵みであった、という事を改めて実感した次第である。(1998・8・30記)



イタリア側からのモンブラン

## 装 備 表

服装	登攀用具	幕営/炊事用具	その他
帽子	ピッケル	テント	水筒
目出帽	アイゼン	シュラフ	風呂敷き
サングラス	ストック	マット	薬
ジャケット	ザイル	ガスコンロ(EPI)	時計
オーバースボン	ヘッドランプ・バッテリー	コッヘル	カメラ
セーター	登山靴(プラスチック)	箸	フィルム
長袖シャツ	軽登山靴	食器	眼鏡スペア
Tシャツ	靴下・スペア	コップ	手帳
下着上下	地図	アーミーナイフ	タオル
ロングスパッツ	コンパス		洗面用具
手袋・スペア	ザック大 - 60リットル		パスポート
オーバー手袋	ザック中 - 35リットル		T/C
ハンカチ			サイフ
バンダナ			現金
			クレジットカード
			本
			ペン
			カバン小

\* ガスボンベは、現地でコールマンのボンベを購入

\* 食料は、現地で調達。Chamonixには、スーパーマーケット数軒あり。

# アフリカの山旅 ケニヤ山とキリマンジャロ

ケニア山登山記 1992・8・6〜8

8月6日

ナイロビ発9:00 ケニヤ在住の弟と、A2号線を北に2時間、ナロモルに至る。ここから20km北には、赤道が通っている。ナロモル付近は、ケニア山の広大な裾野になっている。水が少ないらしく、緑が少ない、赤茶けた台地である。ナロモル(Naromoru)は、小さな町である。平屋の家が数百戸集まっただけで、広場が中心らしい。ポストオフィスはある。車で少し行くと、左にナロモルリバーロッジの標識。リバーロッジは木造の大きな食堂などの建物他、小さなロッジが数多く川に添



ケニア山

って配置されている。スタンダードのフルボード(三食付き)で2人で2150KSH(ケニアシリング≒約7000円)であった。この日は電気の故障だとかで、客室は電気がつかない。昼食はプールのそばのレストランでとる。午後はロッジを散歩したり、昼寝をしたりする。熱帯らしい花がさいている。宿泊客は、ドイツ人・イギリス人など白人ばかりである。現地のケニアの人々は、従業員である。植民地時代もこうであったのだろうか、と思わせる景色である。

ケニヤ山登山に関し、ロッジのツアーがあるが、とても値段が高い。係の男(黒人)は、ツアーでなく個別にアレンジしてやるという。ガイド・ポーターのみ頼み、



ナロモルリバーロッジ

入山費用は別に払うことになった。なお、ロツジからメツツステーションまでロツジのジープで送迎すると、一人片道2000KSH!ということだ。これはケニアではすこいお金である。我々は、乗ってきたランドクルーザーでメツツステーションまで行くことにする。

8月7日

8・30ロツジ出発。気温15、曇りところどころ晴間という天気であった。ナロモルからアプソロムというガイドが来た。ナロモルの町でポーターを拾うような話だったが、誰も乗らない。町から、ナシヨナルパークの標識に従い、車は進む。牛の放牧地の真中を太い道路が延びている。まん中が盛り上がり、でこぼこの道である。しばらく行くと左手にYH。学校の校舎みたいな建物だ。放牧地、針葉樹の林の中を通り道は延びる。9・30にナシヨナルパークゲートに着く。入り口で記帳。幅の広いノートに書く。入園料2人+ガイド分、車入園料、ドライバー、以上、レジデント料金で460KSH(外国人料金だと10倍近くである。観光立国である)

9・55にメツツステーションに着く。「Meteorological Station」(気象ステーション)の名の通り、気象観測装置がある。太陽電池で発電している。ナロモルリバーロツジの経営のメツツロツジがある。木に囲まれた、落ち着いたいいところだ。

車が何台か止まっている。登山の準備をする。アプソロムはポーターを兼ねるといって、一人で荷を担いだ。約25kgか?昨日ポーター2人とガイドを、とたのんでいたのだが、一人でや



ケニア山への道、マーモットがいる



メツツステーション

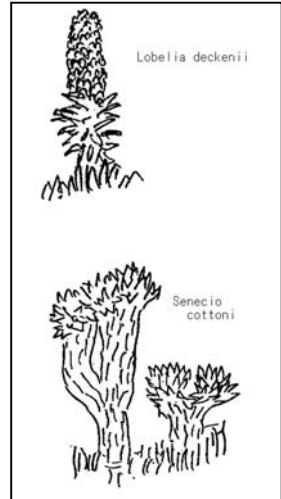


る、その代りガイド料とポーター料を欲しいという。聞けば、ガイドの仕事もあまりないそうである。

10..25 出発。樹林の中を、車が通れる道を歩いて行く。自動車道は、約30分ほどでアンテナのある「ラジオステーション」(Police Signal Station)まで続く。この後、山道になる。しばし行くと森林限界。これより、広い尾根道、ヒースとロベリア・ディケニルという奇妙な植物、そして、下は泥だらけの道になる。深いところはくるぶしまで沈む。ガスが始める。地図にはVertical Bog(垂直の沼地)と書いてあるところである。この道をさらに進むとPicknick Rocks(3750m)に着く。下は少し堅くなり歩きやすくなってくる。Picknick Rocksは岩小屋風の岩で、下を登山道が通る。ガイドは、ちょうど半分(Halfway)くらいだという。標高差では半分以上登ってきている。

さらに進むとヒースがなくなり、サボテンに似た植物セネシオ・ジョンストニー(Senecio Johnstonii)が生息した、奇妙な風景になる。足元は堅い。このころガスの中で、バラバラと降ってくる。沼地からここまで、広い尾根を歩くので、ガスに巻かれると道を失う。赤白のポールがあるにはあるが、どこでも歩けるため、恐いところだ。先月、2人が道に迷い死亡したということである。このあたりで3800m、富士山を越える標高になる。息苦しさはひどくなっていく。が、道はゆるやかになり、14..25に4000m地点を越える。

時折ガスが晴れ、テレキバレーが見えてくる。対岸を行く下の道も見える。我々は上の道(尾根道)を進んでいる。川沿いのゆるやかに上下する道を進む。歩きやすい道である。やがて、テレキバレーを流れる北ナ口モル川を渡り、16..00マツキンダース・キャンプ(4200m)に着く。ここは、ケニヤ山の初登頂者



途中で見た植物



マウンテンハイラックス

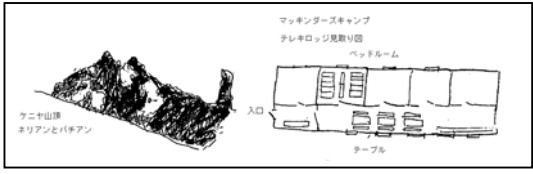
マッキンダー卿にちなんだ地名である。(初登頂は1899年)。広々とした草原に大きなねずみに似たマウンテンハイラックスがいる。人間を恐がらない。ロッジまでは、もう一山越えなくてはならず、つらい最後の山越えだ。

16..20 テレキ・ロッジ (Teleki Lodge) に着く。思ったより人が少ない。30人くらいか? 外はテントが数張り。宿泊料はレジデント250KSH ノンレジデント290KSH (または\$9.20) 小屋に荷物を入れ、ひと休みしてからあたりを散歩。このころ、ケニヤ山の最高点パチアン・ネリアンのピークまで晴れ上がり、見え始める。薄茶色の、針のように鋭く尖った岩山だ。山体に白い氷河がまぶしい。右側は、ポイント・ジョンの岩峰だ。

17..30 夕食(といつても、インスタントラーメン)を食べる。明日の予定(3..00出発)を確認し、18..20就寝。高度障害のせいであるうか、なんとなく頭が重い。アスピリン2錠飲む。何回か目を覚ましたが、うつらうつらしながらも、寝る。

8月8日

2..40 起床。ガイドのアブソロムが起こしにくる。起きて、シュラフをたたみ、荷物をまとめて、アスピリン2錠飲み、3..00 出発。気温0 真っ暗の中をランプの光で進む。快晴。満点の星。星明かりで、稜線がくっきり見える。しばし眺める。そのうち秋の星座とわかる。カシオペアのW形を認める。体調は、というと寝不足のような、ポーツとした感じ。ひどく息苦しい。ロッジを出てしばらくはゆっくりと川に沿った道を行く。高低差あまりなし。そして、細い流れを渡ると、ガラガラの登りにかかる。ザクザクの急斜面、足元は歩きやすい。が、少しでも急ぐと、すぐに息が切れる。30m位の歩幅で、頭の



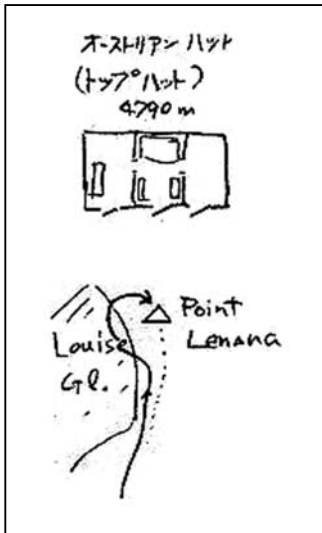
山頂とロッジのスケッチ

中で数を数えながら歩く。百になって大きく深呼吸。ストックにつかまり、肩で大きく息をする。標高4500m位の空気は薄い。ときどき座って休む。体が冷えないように2分〜5分くらい。気温は低い。手と足が冷たくなっている。空を見ると、オリオンが正面から上がっている。シリウスも見える。なんと、南の魚座のフォーマルハウトも輝いている。この星は、中学生のころから見たかった30年来の「夢の星」であった。日本からは、緯度が高すぎて見えない星である。

星明かりで、だいが登ってきたのがわかる。が、時計を見ながら、ただただ足を出すのみ、長い長い時間であった。そのうち傾斜がゆるくなる。もうすぐ、オーストリアン・ハットだ。岩がゴロゴロした道に変わる。

5・50 オーストリアン・ハット(トップ・ハット)に着く。小さな小屋である。小屋内で休む。15分。気温<sup>5</sup>、手足は冷たくなっている。ここから、ピークのレナナ・ポイントまであと高度差で100m。ガイドは45分だという。はじめてとつた長い休みで、少し回復した。

6・05 出発。夜明けが始まった。地平線に茜色の光の帯、金色に輝いてきて、銀色に、そして白くと、変わってゆく。ゆっくりと見たいが、とにかくレナナへと歩く。岩の道である。この頃、ガスが上がり始め、明るくなってきた、ライトをしまう。目の前にレナナ・ポイント、岩のかたまりのピークである。左をルイス氷河が走っている。ルートは始め尾根添いについているが、途中から左側のルイス氷河の上部を横切る。そして、頂きに至っている。岩の道を越え、氷河上部に至る。氷河の氷は固い。傾斜も相当ある。表面にやわらかい雪が乗っている。途中で、降りてきたパーティーとのすれちがいが面倒だ。氷が出ているところもある。息を切らせな



オーストリアンハットと  
レナナへの略図



レナナピーク

がら、ゆっくりゆっくりと最後の登り。

ついにピークに着く。頂上は広さ30畳ほどのゆるく傾いた斜面で、最高点には十字架と金属板がある。

7:00 レナナ・ポイントのピーク。4985m。ヨーロッパプスのモンブランより高く、ほぼ5000mである。まわりの岩は、霧氷でエビのしっぽができかけている。天気は良い。が、ガスが流れる。時折、ネリアン・パチアン（重なって見える）を隠す。反対側は、広大な大陸。はるか下に小さな山が見えるだけ。ずっと広がっている。かなり寒い。気温-7。風は少しある。手と足は、冷たくなっている。ときどき指をたたく。10分間景色を見て、写真を撮り、下山にかかる。

氷河の上部をトラバースし、岩の道になる。7:40 オーストリアン・ハット。あっけないほど簡単だ。小屋で休む。羊糞を食べる。今日初めての食べ物だ。頭は重い、息が切れる、空気が薄い、は依然として変わらないが、登りに比べて、全く楽だ。5分ほどで出発。岩の道から、ザクザクの斜面に出る。登りでは、まだ夜明け前であったが、下りでは、まわりの景色がくっきりと見える。パチアン・ネリアンのピーク、ルイス氷河、カールング池、ルイス池、など手に取るように見える。ザラザラの斜面を降りる。激しく動くとすぐ息が切れる。が、肩で息をしながら登った同じ道とは思えない。まわりの景色をゆっくり觀賞しながらの下りである。東側の斜面にも湖がある。右手（北側）は氷河のU字谷（テレキ谷）と、ティンダル氷河とダーウイン氷河が懸谷になっている。アメリカンキャンプにはテントが5つほど見えた。ザクザク斜面が終ると、小川を渡り、9:10 テレキロッジに戻る。

11:00 出発とする。疲れてはいるが、気分はよい。20分ほど横になった後、食事。といってもまたインスタントラーメン。あとで、蜂蜜をお湯に溶かして飲む。

11:00 出発。朝からすでに6時間の行動の後であるので疲労はたまっている。下りたとはいえ、まだ標高4200mだから、登り道になると、息苦しさを感じる。谷の別れ道くらいになるとガスが出てくる。昨日と同じ天候である。夜、冷えてガスが下に降り山頂部は快晴となり、下は雲海となる。下では雲の中で全く見えない。昼に熱せられるとガスが上がってゆく。麓から見ると中腹から上は雲となっている。一日中どこかに雲がかかっている。キリマンジャロと違い、ケニヤ山には、遠くから見た写真を見かけなかった。こういう天気の様子返しが、中腹に雨を降らせ、沼地が作られるものと思われる。

13:00 ころ ピクニックロックを通過。13:30 ころ沼地を通るが途中で飛行機の墜落現場へ寄ってみる。セスナのような軽飛行機が4つの部分に分かれ散乱している。最近落ちたとのことであるが、残骸が放置されたままになっている。

13:50 森林限界に来る。更に下り、14:10 ポリスシグナルステーション、ここから道は広くなり14:30 ついにメツステーションに戻る。本日の行動時間は9時間30分。

ガイドに700KSH支払う。(ガイド料だけだと3000KSHが相場の様だ)

車で山道を下り、ナシヨナルパークのゲートを通過する。樹林帯を抜け、牛の放牧地を通り、15:30 ナロモルに着く。そこでガイドを下ろし、A2号線を南に下る。ケニヤ山は、雲の中で、山麓しか見えない。

16:30 ナイロビに着く。それから飲んだケニヤ産のビールはとてもうまかった。



墜落したセスナ機



ロベリアとケニア山

## 追記

アフリカを離れたのは、これから約2週間後の8月<sup>21</sup>日であった。飛行機は、ナイロビのケニヤッタインターナショナル空港を離陸し、アフリカの赤茶けた大地が小さくなっていった。その時である。右前方に、雲から頭を出すように、ケニヤ山の頂きが見えてきた。ちょうど、西側から見える山の姿は、マッキンタースキャンプから仰ぎ見た頂上のピーク達であった。今度はそれを上るか上空から眺めることができた。最後の予期せぬみやげだった。帰国後ガイドのアブソロム氏と文通してわかったことだが、彼は教会の牧師であった。

1992年9月記す

8月12日

8・30、ナイロビ・ヒルトンホテル前から、タンザニア行きのシャトルバスが出る。これは、ナイロビの旅行会社(ササモト)が手配したものである。タンザニアのアルーシャまで行く。ナイロビ在住の弟と2人である。バスは、日本のどこかで使われていたマイクロバスで、入口に「自動扉」と書かれたままである。もっとも、読める人間はほとんど乗らないのだが。他のタンザニア行き交通機関は、長距離バス、ブジョーまたはマタツ(乗合小型バス)がある。(料金は、一人往復100KSHであった)

バスは8・40に、向いのアンバサダーホテル前で客を乗せ、ドライバーと乗客(白人7人黒人1人そして我々の)10名で出発。朝のラッシュのナイロビ市内を出て、ケニヤッタ国際空港の脇を通るモンバサ・ロードを経て、タンザニアとの国境の町マナンガへと走る。サバンナの中をまっすぐに延びる道路を100km/h以上の猛スピードで走る。ところどころ、舗装がはがれていても、ビュンビュン走る。万事「ボレボレ」(スワヒリ語でゆっくり)のこの国で、自動車だけは、恐ろしく速く走る。途中、トムソングゼルなどの姿が見えるところが、アフリカらしい。また、この道沿いはマサイの人々が住んでいる地域で赤いチェックの衣を身にまとったマサイの人々が牛や羊、ロバを追いながらサバンナの中を行く。アカシヤやバオバブの木がある。草は、乾期のせいかわ緑色をしていない。

11・05出発後2時間少して国境の町マナンガに着く。ケニヤ側で出国手続きをするが、イミグレーション付近は、マサイのみやげ物売りがバスに群がり、タンザニアシリングと両替をしないかというヤミ両替屋のチエンジマナーの兄ちゃん達がたむろしている。とにかく、何でも声をかけてくる。また、食べ物やみやげ



頂上の氷河



メルー山とマサイの人々

物売る小さな店がずらつとならんでいる。出国カードを埋め、パスポートともに見せると、顔も見ないでスタンプを押し、終わる。記載不完全なものはいろいろいわれている。また、字を書けないアフリカ人のものは、問答し書き込み、サインだけさせている。乗客が揃ったところで、バスはゲートをくぐり、タンザニア側に入る。ケニヤ側と比べて、物売りもいず、静かである。似たような国でありながら、差は激しい。こちらにも、手続きは、簡単に終わる。しゃべることは、「8 days. Sightseeing」だけである。なお、通貨申請制度は、この4月から廃止されたそうである。

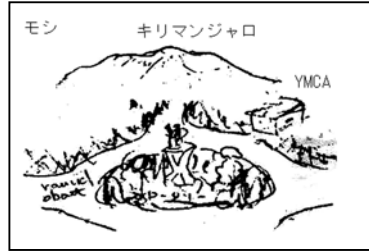
12:00 国境通過。タンザニアの道を走り始める。途中キリンが何頭か道路沿いにいて、一時停車し、写真を撮る。サバンナの中の道をどんどん進む。

12:20 メルー山とキリマンジャロが遠くに見える。キリマンジャロは頂上の雪が白くうつすらと見えている。こちらでもマサイが牛を追っている。時々道路に牛がいて、それを避けるために一時停車する以外は、びゅんびゅん走る。

13:10 マウントメルーホテルに着く。ここは、タンザニア第2の町アルーシャのはずれにある。正面にメルー山 (Mt Meru 4556m) を望む、静かな、立派なホテルである。メルー山は山頂部が大きく崩れた火山で、もし崩れてなければ、キリマンジャロより高いかもしれない位の大きな山である。ホテルで昼食を取る。この食事は、スープ、チキンと野菜で、10\$, ヒールは2\$で、日本円にすると1500円くらいだが、地元の人たちにとってはものすごく高い昼食である。鶏肉が日本に比べてもおいしい。そういえば、どこでも村には鶏が放し飼いにされている。日本人の団体が食堂に入ってくる。

14:20 旅行会社で手配された自動車(ブジョー)でモシに向かう。1時間ほどでモシに着く。YMCAの





モシのロータリー

前に来ると、登山ツアーの客引きが来て、安くツアーをアレンジするという。話を聞くとまともそうなので、事務所に行く。キリマンジャロ・トラベル・サービスという立派な名だが、事務所は普通のせまい民家で、日本の旅行会社のイメージとは程遠い。結局、ガイド、ポーター、食事、入山料、宿泊料、レスキュー費用、移動の手配など全部で一人当たり300\$で契約する。契約書も手書きであった。この他にも、小さなツアー会社がある。今日泊まるホテルを幹旋するというので行ってみたら騒がしうなのでやめて、YMCAに泊まる。YMCAは二人部屋で13\$であった。

YMCAの前は、ロータリーになっていて、真ん中にちょっとした公園のようなものがある。公園の真ん中には、銃を持った兵士の像がある。ここから、キリマンジャロは正面によく見える。

荷を置いて町に行く。両替しようとして銀行に行ったが、閉まっていた。街頭では、ヤミ両替屋が、チェンジマナーとつるさく声をかけて来る。はずれて元々、当たれば大儲け、という感じなのだろうか？ヤミ両替屋については、いい話を余り聞かない。だいたい、汗も流さず、金を取り替えるだけで大儲け、と言っている。まともな商売ではなさそうだ。銀行は閉まっているので町で一番大きいモシホテルのフロントで、両替する。はじめレートを知ると、いかめしい革ばりのノートを見せて公式レート1\$=320TSH(タンザニアシリング)という。「本当、」というので、紙に350、375と書いて、上げてくる。375で、手を打つ事にしたが、現在、1\$=400SH位が実勢のようだ。TSH KSH US\$の順で通貨が強くなっており、ドルやケニヤシリングをほしがっている。高額紙幣が500SHなので50\$も替えると、札束になってしまう。キリマンジャロがよく見えている。どっかりと、大きく、上の方は白い。文字とおり snow capped である。モシの町のどこからでも見える。

キボホテルで夕食にする。古いエレベーターで、自分で入口のフェンスを閉める方式だ。ガタンゴトンと3階まで上がると、ガランとしたところに、テーブル、椅子がおかれ、テレビが音楽番組をやっている。ミックスグリルとビールとサモサ(カレー味の揚げ餃子のようなもの)2人分で計2410TSH(約800円)。これでも地元の人には高い夕食である。日が没み、キリマンジャロが夕暮れの中に見える。YMCAに戻る。シャワーは水しか出ない。蚊がいるので、蚊取り線香をたいて寝る。南側の部屋は、道路のランドアバウトに面していて車で騒がしい。夜中に何度か目が覚めた。

8月13日

6..30起きる。気温20 朝食は7..15から始まる。薄いコーヒー、パン、卵2個分のスクランブルエッグである。荷をまとめてチェックアウトし玄関で迎えの車を待つ。約束の8..30を過ぎても来ない。20分ほど待つて、ついにキリマンジャロトラベルサービス(KTSS)の事務所に行く。抗議するとあわてて車を回し、荷物を積み込み、事務所の前に戻る。事情の説明はない。ポロポロのベンツに乗り込む。ガイドとポーター1人、客2人、ドライバーの5人で、9..20出発。ベンツとはいっても、何年前のかわからないほど程度の悪い車である。フロントガラスはひびが入り、苦しそうに走る。いつ止まってもおかしくない。「腐っても鯛、腐ってもベンツだけど、これは・・・」モシから約1時間、麓のマラングに着くころは坂は急になり、あえぎながらベンツは進んでいる。

10..25マラングゲート到着。ゲートには、職を求めるポーター達がたくさんいる。雨が降り始める。入山届を書き、パーミッション(許可書)をもらう。これに、宿泊許可など書き込まれている。

11時手続き終了。昼食を取る。この食事から、ツアーに含まれる。袋に入っている



マラングゲート

たのは、サモサ、オムレットバーガー、バナナ、オレンジである。

12:00 出発。このころ雨が上がる。木の繁るジャングルの中を道は延びている。大きな木には、宿り木のようなものが巻き付いている。はじめは、車が通れる広い道である。ゆるやかに登って行く。大きな荷はポーターに任せ、サブザック一つの、「大名登山」である。途中、猿を見る。13:45 小川を渡る橋。川沿いのルートとの合流点である。ここより、山道となる。このころガスが出て来る。

ひと登りして、14:30 に本日(の)の宿泊地マンダラハットに着く。気温 12。標高 2700 m。

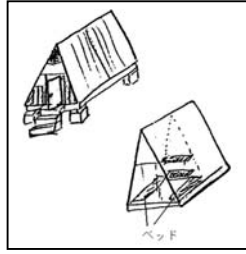
マンダラハット(Mandarahuts)は、樹林の中に、三角屋根の小さな建物(ハット) 13個と大きな三角屋根の食堂、炊事小屋、水洗トイレ、古い小屋などがある。レセプション(受付)でパーミッションを見せると、ハットが割り当てられる。我々は7号室(M7)であった。この小屋は一棟に2部屋あって、各部屋には4



マンダラハット

つのベッドがある。我々は、東京からきた夫婦(名は失念した)と同じ部屋であった。奥さんの方が上のホロンボハットで気分が悪くなり降りてきたそうである。東京のアルパインツアーサーピスという会社のキリマンジャロ登山ツアーで来たとの事であった。少しづらぶらして、近くのマウエンジクレーターまで行くことにした。15分ほど登ると、クレーターに着いた。直径100m程の、小さな火口である。ガスがかかり、遠くは見えない。ぐるりと一周して20分くらい。10分程下ると、マンダラハットに戻る。戻ると、ポーターのドナティがティーの準備ができているというので、ティーにする。紅茶に砂糖とミルクをいれ、ピスケットをつまんで飲む。それからしばらくして、18:50から夕食。食堂では、様々な言葉が飛び交っている。英語・

パーミッション



三角屋根の小屋

フランス語・ドイツ語・スペイン語・イタリア語その他。

メニユーは肉のスープ(コンソメ風、うまい)次に、焼肉・じゃがいも・キャベツにんじんを炒めたものの大皿が出る。それぞれ、取って食べる。じゃがいもが少し固い。次に、ティー。この夕食から、スイスのジュネーブからきた学生ドミニックと我々の3人パーティーであることがわかる。食事後20:00に寝る。上段のベッドに寝たので、少し短く、足が伸ばせない。

8月14日

登山第2日である。6:00ころ、まわりが騒がしくなり、6:30起床。7:00朝食。メニユーは、アボガド半個、ティー、パン、マーマレード、メイズのオートミール、焼肉・トマト・卵焼きの皿、である。とうもろこしのオートミールは、いただけない。一応コースなのだが、忘れたころ次を持って来る。ランチの袋を受け取り、荷をかたづけて、8:40出発。今日は、マンタラからホロンボまで11キロの道である。標高差1000m。

樹林の中を行く道と、クレーターの近くを通る道があり、前者は少し急だが短い。こちらの道をとる。9:10歩き始めて30分で二つの道は合流する。この辺りで樹林は終わり、草原になる。少し行くと、ひらけてきて、キボ峰とマウエンジ峰の頭が見えて来る。時々雲がかかるが、よく見える。

10:00過ぎ、少し休む。道はゆるやかに、ゆっくり登っている。そろそろ高度障害のことを考えなくてはならないので、必要以上にゆっくりと登ることを考える。汗をかかず、息が苦しくならず、疲れない、というのを絶対の原則として、ゆっくり登る。どうせ今日はホロンボハットまで行くことしかすることはない。日暮れまでに着けばいい。スワヒリ語の「ポレポレ」(ゆっくり)である。



キボ峰が見える

10:45 ポイント3182m。北岳と同じ高度である。11:30 昼食。朝もらったランチは、ピーナツバター  
のサンドイッチ、ゆで卵1個、オレンジ1個、バナナ1本である。15分で食べ終え、出発。12:55 KAMBI  
YA TAABE 3485m<sup>13</sup>。15に水場を通り、14:00 ホロンボハットに着く。靴の調子が悪く、左のかかとが  
当たっている。心配だ。

ホロンボハット(Horombo Hut)は標高3785m。富士山とほぼ同じ高さである。ケニヤ山での高所経  
験のトレーニングのせいか、意識してゆっくり行動してきたせいか、全く高度障害を感じない。ホロンボハ  
ットは、登り・下りに使う山小屋で、マンダラハットの2倍位広い。が、今日は客が多く、テントで寝る者  
も出る様子である。レセプションにパーミッションを見せ、部屋の割当を受ける。27号室(H27)である。  
この建物は、外観は同じ三角屋根だが、古い形で、1棟に中央の通路をはさんで12個のベッドがある。鍵を  
もらって荷を置く。後から、南アフリカから来た男2女1の白人3人、イタリア人らしい男4人が入る。こ  
のハットからは、キボ峰・マウエンジ峰が見え、反対側は、雲海が見える。16:20 ティー。夕暮れの景色を  
見ているうちに17:00に夕食。メニューは、野菜スープ、次に鶏肉・じゃがいも・パスタ・にんじんとキャ  
ベツの炒めものが出る。こちらにきて思うのは、鶏肉がとてもおいしいことである。デザートはオレンジ、  
最後にティーが出る。食事後、外に出る。夕暮れの雲海が美しい。日没、18:30。すぐ寝る。夜中に、空い  
ているベッドに3人来る。気分が悪くて、キボハットから降りてきたとのこと。せつかく寝入ったところを  
起こされる。その後、何度か目を覚ましながらも、眠る。明け方寒くなる。

8月15日

6:30 起きる。水道が凍結して、水が出ない。7:30 朝食。パン・チーズ・マーマレード・ピーナツバタ  
ー・ティー・オートミール・ゆで卵だが、オートミールは3人共にパス。富士山とだいたい同じ標高だが、  
気温は日向で7。ホロンボハットには、小さいねずみが住み着いており、チョコチョコ口行き交っている。

また、食べ物を狙って小さな鳥もいる。

8.. 50 出発。今日も、標高差1000m約11キロの道のりを一日かけて歩く。すでに富士山と同じ高さだから、ゆっくり、汗をかかず、息が苦しくならない早さを意識して歩く。道は、上の道と下の道に別れているが、上の道とはマウエンジの方を回ってキボハットに行く道のような。下の道を通る。

天気は快晴で、雪のキボ峰がずっと見えている。昨日の日焼けで首筋と顔がひりひりしている。この辺りは、ジャイアントヒースという草とロベリア・ディッケニという小さいシユロの様な木が茂っている。9時35分にはMAUWA RIVER（花の川）の意3940m）川には氷が張っている。10時40分ラストウォーターポイント（Last Water Point 4190m）に着く。最後の水場であるが、水はあまりきれいではない。ここは、多くの人が一服している。20分ほど休む。ガスが出始める。

11.. 25 マウエンジ・リッジ（Maunge Lidge 4210m）この先は、植物は無く、砂漠になる。砂漠と言っても、砂の砂漠ではなく、土の上の上とこぼこぼと石がごろごろしている。ミドルレッドヒルを右手に見ながら、砂漠の中を歩く。道の両側に、石を並べて何か書いている。

12.. 00 サドル（鞍部）の標識に着く。キボ峰とマウエンジ峰のまん中の地点になる。分水嶺だ。

ここで昼食。サンドイッチとゆで卵、バナナ、オレンジ。20分ほどで出発。また歩き続ける。日ざしは強く、砂漠を歩くとはこんなものかと思いつながら、ゆっくり歩く。道はゆるやかな登り。

13.. 20 JIWE LA UKOYO（4394m）に着く。ここから、急な上りになる。もうすぐキボハットだ。約4000mの上りを1時間くらいかけ、14.. 15にキボハットに着く。



雪のキボ峰

キボハットは前2つのキャンプ地と違い、建物は3棟だけである。大きな棟は、石とコンクリートで作られていて、中には5つの部屋と食堂があり、58人分の二段ベッドがおかれている。また、小さな棟は、レセプションとポーターの宿舎になっており、それに、小さい炊事小屋である。水も木もないので、炊事用の薪・水は、ポーターが全部下から担ぎ上げている。天気がよいので、岩の上で休む。

ここは標高4700mもあるが、高度順化を意識して行ってきたので頭痛、吐き気、眠気など全くない。快調である。15:00からティーになる。甘くした紅茶がおいしい。15:30から16:30まで昼寝。明日は早いので少しでも寝ておきたい。17:00から夕食。心配していたが、食欲はある。今日は、コラシ(Korasi)というちようどんじゃが風の肉とにんじんとじゃがいもの煮物でおいしく食べれる。さらに、パン、バナナ、オレンジそしてティーで終わりになる。明日の予定をガイドのエマニエルが告げる。0:30起床1:00出発。外では、中国留学中の東京の女の子が、気分が悪そうにしていた。この高度では、何か起こる方が当たり前である。

7:00に寝る。10人分ベッドがあるこの部屋に、今日は3人だけである。何度か目を覚ましたり、うとうとしたりの繰り返し。時々息苦しくなり、大きく深呼吸する。

8月16日

0:05目が覚める。うつらうつらしていると、0:30ガイドが起こしにくる。着るものを着て、準備。前回のケニヤ山の教訓から靴下を2重に、手袋を2重に着用する。ぼーっとしているうちに朝食。ティー、ビスケット、ピーナツ、オレンジを食べる。

1:10出発。快晴。月明りがあり星も見える。はじめランプをつけるが、すぐに消す。月齢18くらい明るい月で、ランプはいらない。小屋を出たところから、急な登りにかかる。他のパーティーは歩き始めている。少しペースが早いのでゆっくり歩こう何度が言っ。せひウフルまで行きたいので、ゆっくり、高度障害にかからぬように必要以上にペースを落とすが、他の2人と合わない。少し早いペースで、他のパーティーを抜い



ギルマンズポイントでガイドと

て行った。

3..55 ハンスメイヤーケープ(5151m)に到着。半分来たと言うことだ。これより、砂がザクザクの急斜面をジグザグに登って行く。月明りで、稜線の岩の形は見えるが、なかなか近づかない。気温はかなり低く、手と足が冷たい。特に、左足の中指と薬指はしびれて感覚がなくなっている。また、左手の子指の古傷が痛む。革靴を履き、オーバー手袋をつけてもこの寒さであるから、軽登山靴や綿の手袋では大変だろう。一足毎にあえぎ、ほんの少ししか進まない。が、一歩づつ進むしかない。なかなか時間が経たない。空気は薄い。かなりの傾斜の斜面である。時々「何で俺はこんなところを歩いているんだらう」などと考える。眠気も時々押し寄

せる。

それでも時は刻々と過ぎ、6時少し前、地平線が一筋の糸のように淡く紫色に色づき、次第に光は幅が広くなり、赤く、またオレンジ色に、そしてバラ色に輝く。日の出だ。明るくなる。

6..10 やつと岩石地帯に出る。もう少しだ。疲れが半分消えたような気がする。岩の上を登って行く。最後の所で、ガイドのエマニユエルは止まって待っている。

6..30 ギルマンズポイント(5685m)に着く。

キリマンジャロの火口が見え、右方には、東部の階段氷河が見える。青黒い空に、銀色の氷河がまぶしい。左方には、火口壁の向こうにピークが見えている。また、振り返ると、朝日の当たる、広々とした雲海の中にマウエンジ峰は黒く島のようにみえている。

ギルマンズポイントの標識が見える。快晴。かなり寒い。気温は零下10度。手足は特に冷たい。握手して、写真を撮る。ガイドが「キリマンジャロ、キリマンジャロ、・・・」と歌を歌っている。ノートにサインを



する。景色を眺める。などやっているうちに、ガイドにウフルまで行けるか、と聞く。ガイドは、遅いし、疲れているようだし、氷の状態も悪くなっている、というような返事であった。ウフルピークは富士山で言うところの剣ヶ峰に当たるキリマンジャロの火口の最高峰（5864m）である。ギルマンズポイントも頂上の一部ではあるが、ウフルまで行くかどうかを3人で話すこともなく、30分ほど経ち、気がつく、と、スイス人のドミニックとガイド、弟が下山を始めている。

ギルマンズポイントで休んだので、体調もよく、時間も体力もだいじょうぶだと思っただが、皆、降り始めているので、とっさに下った。ここまで来て・・・、と心の残る下山であったが、意志、装備、そして言葉と、海外登山におけるパーティーの組み方の難しさを感じた。7:00であった。

下りは早かった。あれほどあえいだ斜面も、ちょうど富士山の砂走りのようになっており、それこそ「飛ぶように」降りて行く。せっかくここまで来て、こんなに早く、もったいない、と思っただが、寒さに耐え、稜線を歩く喜び、ピークで、向こう側の新しい景色を見る喜び、座り込んで景色と対話する幸せなどと言うのは、一部の登山愛好者のものだけかもしれないと思いつつ、足を運んだ。5時間かかった上りだが、1時間少して下ってしまった。8時過ぎ、キボハットに戻った。ポーター達が紅茶を作っていて、もらって飲んだ。ボカボカと日ざしも暖かい。9:00持ってきた餅で、雑煮を作って食べた。

9:25キボハットを出発。ホロンボハットに向け、昨日登った道を下って行く。砂漠地帯の緩やかな道を下りながら、ポーターのドナティにスワヒリ語を教えてもらう。足取りは軽い。10:55にラストウオーターポイントに着く。水で、顔を洗う。日に焼けてひりひりして痛いのが気持ちがいい。さらに歩いて、12:05ホロンボハットに到着した。振り返ってみると、余りにあっけない下山であった。不完全燃焼。



マウエンジ峰と雲海

ホロンボハットでビールを飲む。1本700TSH(約230円)ガイドのエマニユエルに1本勧める。飲みながら、いろいろな話をする。回りの木や花の名前を覚えてもらう。ちなみに、黄色いASKIO、白いMASSの花。そして、松のようなLEBELLELIONの木……。

17:00夕食。メニューはソーセージとビーマンのスープ。パン。皿には鶏肉・じゃがいも・パスタ・人参・キャベツの炒めもの、そしてティーというおなじみのものであった。

夕食後、ガイドが来て、チップをなにがしか欲しいという。スイス人の学生ドミニックと相談の上3人からポーターに一人当たり15\$,ガイドには35\$渡すことにする。聞くところでは、エージェントからガイド・ポーターにはまことにわずかしきいってないらしく、このチップを相当に期待しているようだ。15\$といっても、5日間だから1日3\$(400円)という金であるが、タンザニアの人々にとっては大きなお金である。

雲海に日は沈み、外は月明り、満天の星である。こんなにも星があるのか、と思うほどすごい。そして、天の川がくつきりに見える。ちょうど天球を真二つに切るように流れている。昔の人が、これをこぼしたミルクの川と感じたのもわかる。しばし眺めていたが、寒くなったので、ベッドに戻る。19:30就寝。

8月17日

6:30雲海から太陽が登って来る。光が次第に強くなり、雲海の上を照らすと、立体感と躍動感がでてくる。雲の海にぐるりと水平線。アフリカの大地の上にかぶさっている。麓から見ると、山は雲の中、ということになる。

7:00朝食。マンゴー、パン、ティー、卵、肉、トマトと、おなじみのメニューである。

7:50ホロンボハットを出発する。出発の際に、ドナティが「ニナルディゲート」



夕食

と話しかけてくる。昨日教えてもらったスワヒリ語の続きで、Ninarudi Gate. (私はゲートへ帰る) という意味。ホロンボハットを出て、どンドン下る。

しばらく行くと、雲の中に突入。ガスの中になる。マンダラハットのすぐ上で、クレーター側を通る細い方の道をとる。あまり人が通っていないので、山道、という感じがする。この頃から雨になる。

10..10 マンダラハット着、気温7、雨具を着て歩く。雨は少しづつ降り、道はぬかっている。小川を渡り、広い道にでる。途中、4匹の猿を見る。この猿は、背中が灰色をしていて、キーツと鋭い声で鳴く。鳥の声のようだ。途中、登って来るパーティーとすれ違う。白人ばかりだが、年齢は、若い人から年輩の人まで、さまざま。時に、自分で大きな荷物を背負っている若者達に会う。自分ではもうこんな事はできないな、と思いつつも、若いうちにこの山へ来れることはうらやましい。

12..15 マラングゲートに着く。「ニナルディゲート!」。下山の書類に記入する。売店でTシャツなどを買って待つ。そのうち、ガイドのエマニエルが降りてきて、「登頂証明書」を作ってくれる。3人と、ガイドとポーター5人でビールを飲む。迎えの車が来ており、荷物を積む。プジョーのバンに座席を増やし、8人乗りになっているところに、9人乗り込み13..30 猛スピードで発進。ゲートから少し下ったマラング村で、ガイドのエマニエル他2人下車。そのまま、すごいスピードでモシに向かう。

14..20 モシのKTS (キリマンジャロツーリストサービス) の事務所の前に着く。今日は、モシに泊まる予定であったが、大きな町アリュウシャまで行くことにして、エクオトリアル・サファリ社に連絡をして、明日のモシからアリュウシャのプジョーをキャンセルし、そのままプジョーに乗って、アリュウシャに向かう。スイス人のドミニックも同行。



頭で荷を運ぶポーター

途中、レストランで昼食をとる。地元の人の行くレストランでチキンとチップス（鶏の焼いたものとポテトフライ）をとる。チキンには、フル・ハーフ・クォーター・スリークォーター（3/4）などがあるが、ハーフは本当に鶏の半匹が出る。我々は、クォーターだが、プジョーのドライバーはハーフを食べていた。クォーターとチップスで400シリング（130円）であった。肉はシャキシャキしてとてもおいしい。アリユーシヤでは、「アリユーシャツリーストイン」というホテルに泊まる。ツイン1部屋で、35\$。荷物を置いて、町に出てみる。木彫りなどは、とても安く、ナイロビの半額くらいか？ニューアリユーシヤホテルで夕食ののち、戻る。6日ぶりにぬるいが、シャワーにありつく。

8月18日

朝食の後、チェックアウト。昼まで荷を預かってもらう。町を散歩。マーケットや郵便局で木彫り・布・切手などを見て回る。

昼、マウントメルーホテルからナイロビ行きシャトルバスに乗る。バスは、国境めざしタンザニアの道を時速100キロ以上のスピードで走る。途中、マサイの放牧する牛やロバを避けるため止まったり徐行するのがユーモラスである。それ以外は、悪路でも何でもスピードを落とさない。

天気がよく、マウントメルーを回りこんだ所から、キリマンジャロの姿が見える。雪の冠を戴いて、そびえている。昔のアフリカ人は雪というものを知らず、あの山は銀でできていると考えていたという。が、あまりにも高く、取りに行けなかったという。初登頂は、1875年ドイツ人のハンス・メイヤーにより成された。それから117年が過ぎる。アウストラロピテクスの化石が発見された、人類発祥の地アフリカ。そのアフリカで太古よりその姿を人類の前にあらわしてきたキリマンジャロ。そんなことを考えているうちに、車はタンザニア・ケニアの国境マナンガに着く。

16..40 国境を越え、大都会ナイロビに戻ったのは、日も暮れた19..05であった。

## 装 備 表

服 装	登山靴(革)	2800g	靴下×2	160g
	ロングスパッツ(エントラント)	200g	サブザック20リットル	200g
	ザック60リットル	2000g	手袋(ウール)	150g
	手袋(オーロン)	100g	オーバー手袋(エントラント)	100g
	ウインドパーカ上(モンベル・スーパードリュ)	850g	ウインドパーカ下(モンベル・ドロワット)	700g
	セーター(ウール)	750g	雨衣上下(ゴアテックス)	560g
	トレーナー(コットン混紡)	400g	半袖ポロシャツ(オーロン)	170g
	長袖シャツ(ウール)	300g	ズボン(タラスブルパ綿混紡)	470g
	下着上下×3	500g	帽子(ナイロン) 50g	
	タオル・ハンカチ×2	300g		
食 糧	インスタントラーメン		切り餅	
	インスタントスープ		コンソメスープ	
	蜂蜜		羊羹	
そ の 他	ヘッドランプ(単3、4本)	230g	水筒1.3リットルアルミ	210g
	水筒1リットルポリエチレン	90g	コンパス	50g
	サングラス	150g	地図	200g
	時計×2	400g	ストック3段1本	300g
	石油ストーブ(MSRウイスパーライト)	800g	コップエル	800g
	マッチ・ライター	50g	ナイフ・箸	200g
	非常用薬品	150g	シュラフカバー(ナイロン)	540g
	シュラフ(ダクロン3シーズン)	3000g	蚊取り線香	160g
	防虫スプレー	150g	虫さされ薬	170g
	カメラ	460g	フィルム	340g
	パスポート・TC他書類	580g		

\* 頂上では気温が零下10度位であり、防寒にはこれでも不足であった。

特に、防寒帽子・手袋が必要。

\* ガスボンベ(CV250)をナイロピで入手できなかった。

キャンピングガスでもCV200はいろいろな店で売っていた。

## アフリカ雑感

この文は1992年にアフリカを訪れたときに書いた文をそのまま載せています。

相当な時間が経ちましたので、現在は事情が変わっていることも多いと思います。

今回のアフリカ滞在は、わずかな期間であり、また、訪れた国も、ケニヤ・タンザニアの2ヶ国であったのであるが、旅の途中見たこと・感じたこと・思ったこと等、思いつくままに、並べてみる。

### ナイロビまで

日本からナイロビまで、1万1千km(地球の周の4分の1強)。直通の飛行機はなく、おもな経路は次の様になっている。

\* 日本→インド(カルカッタ)→ナイロビ

\* 日本→パキスタン(カラチ)→ナイロビ

\* 日本→ヨーロッパ(ロンドン、ブリュッセル、モスクワ等)→ナイロビ

他に、いくつか乗り継いでいく方法もある。

どの便でも、東京を出た翌々日にしかナイロビに着かない。運賃は、夏のハイシーズンで安い航空券で、往復25万円位から。

私の場合は、滞在日程との関係で、モスクワ経由であった。

成田を出て、約10時間でモスクワ。乗換えの時間をへて、2回の給油のための着陸をいれて12時間でナイ



ナショナルパークの入場券

ロビに着く。

日本と時差は、5時間ある。

ケニアの入り口、ケニヤッタ国際空港は、ナイロビのはずれ、サバンナの真ん中にある。

国立博物館の入場券

気候

アフリカ、というと、「暑い」というイメージがあるが、東アフリカのケニア・

タンザニアは、夏の日本に比べて、とても過ごしやすい気候である。

ナイロビで8月の平均気温15・6、降水量26mmとなっている。一方東京では、

平均気温26・7、降水量153mmである。

ちょうど、夏の軽井沢にいたような気候である。

熱帯に位置するのに気温が低いのは、ナイロビをはじめケニアの大部分が標高1000～2000mの高原にあるからである。ナイロビは赤道から140km南に位置し、標高1660mの高原にある。

もちろん、インド洋に面した海岸地方では、熱帯の暑い気候である。海岸の町モンバサでは8月の平均気

温24・2となっている。

季節は、夏・冬はなく、太陽が赤道を照らす3～5月が大雨季、10～12月が小雨期（日本では春と秋）であり、日本で夏と冬の時期は、太陽が傾き、乾期となる。

車社会

ナイロビの町は自動車があふれている。最新式のヨーロッパや日本の車から、はるか昔のモデルの車まで、車の博物館といった感じである。



ビクトリア湖のカバ

びかびかのベンツのとなりを20年も昔のトヨタカローラが黒煙をはきながら走るといった様子である。日本では、とつくにスクラップになっているような車も、現役である。そのせいか、道路わきには、よく故障車が止まっている。

突然、車社会になってしまった様なのだが、歩行者にとっては、命懸けである。

旧イギリス植民地なので、車は左側通行なのだが、道路の交差は、ランドアバウトと呼ばれる、ロータリー式であり、ナイロビ市内でも、信号は数ヶ所しかない。また、ゼブラと呼ばれる横断歩道もほとんどない。この国では、自動車優先になっているので、事故が起こっても歩行者が悪い、とされるようだ。

歩行者が道路を横切るためには、車の流れの間を縫って、走るようにして渡る。信号もないのだから、車がいっ止まるか全く予想がつかないわけで、慣れない旅行者などは、道路を渡るだけでくたびれてしまう。おまけに、整備不良というか、車の寿命というか、排気ガスをまき散らして走っているの、大気汚染が激しい。

これを見てみると、車というのはけっこう走るんだなあ……と、日本の道路の様子を思い浮べてみた。日本では、古い車が走っているのをほとんど見ない。ほとんどが、10年以内の車である。古い車はどうしたのだろう、スクラップにしまった？しかし考えてみると、走れなくなったからという理由ではなく、古くなったからというだけで、スクラップにしている。何か、無駄なことをしているのではないだろうか？そんなことも考えさせられた。

また、日本では、一応、人命優先、という建て前になっている。が、実態はどうか？

横断歩道で子供が待っている、止まる車を見ることはほとんどないし、人や自転車を止まらせても、先に車を通る、ということとは、ざらである。「そこどけそこどけ車が通る」。子供に「横断歩道は車がこないか確かめてから渡るうね」等と教えなければならぬ、建て前の人間優先なら、いっそ、日本も車優先にした



方がすすきりする？

### 鉄道

ケニヤには、植民地時代の19世紀から今世紀にかけて、鉄道が建設されてきて、現在、幹線は海岸のモンバサからナイロビを通り、ビクトリア湖のほとりのキスムまで横切り、ウガンダへ至る。

また、何本か支線もある。

ケニヤの鉄道建設の歴史は、ナイロビにある鉄道博物館に詳しい資料が展示されている。この資料によると、この鉄道は5回名を変えている。名前はこの地域の歴史を物語っている。

i、U・R・R (UGANDA RAILWAY) 1896年

海岸のモンバサからウガンダまでの鉄道建設に着手

ii、K・U・R・R (KENYA UGANDA RAILWAY) 1926年

ウガンダのトロピまで延びる

iii、K・U・R・R & H (KENYA UGANDA RAILWAYS AND HARBOURS) 1927年

ビクトリア湖の汽船も運行

iv、E・A・R・R & H (EAST AFRICAN RAILWAYS AND HAREOURS) 1948年

ドイツ植民地であったタンザニア鉄道を併合

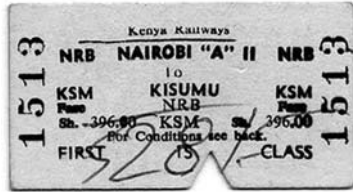
v、K・R・R (KENYA RAILWAYS) 1977年

ケニヤ・ウガンダ・タンザニアが独立し、鉄道も分離

ケニヤにおける鉄道建設は、大変な工事であったようだ。それは、海岸のモンバサからナイロビまで、標



ケニア鉄道の車体のマーク



硬券の切符

高差が1600mある。(ちなみに、日本の一番標高の高い駅、小海線の野辺山で約1300m)さらに、西にはリフトバレー(大地溝帯)と呼ぶ標高差500mの急な地形がある。こういつところには、機械化されてない今世紀はじめに鉄道を敷設したのである。いま、ナイロビ〜モンバサは1日夜行2便、ナイロビ〜キスムは1日1便の運行であり、1等から3等の車両で編成されている。1等は、1部屋2ベッドの寝台車、2等は1部屋4人の寝台車で、3等は普通車。食堂車を連結している。食堂車では、デイナーの時間になると、予約をとりに来る。値段は安いが、スープ・魚・肉・デザート・コーヒーと、昔ながらのヨーロッパのデイナーの様式を守っている。

ちなみに、料金はナイロビ〜キスムで1等502KSH(1800円)2等で302KSH(1000円)デイナー140KSH(500円)等である。

ナイロビの鉄道博物館には、当時使われたSLが4台ほど展示されている。

#### 賃金

日本のお金を持って行くと、なにか別世界に行ったような気になる。突然、「大金持ち」になってしまうのである。レートは1円≒3〜4KSH(ケニヤシリング)だから一万円が3000シリング位になる。

ナイロビで、人々はどれくらい給料をもらっているかというところ、「専門職」であるドライバーで3000KSH。これが、平均より少し高い人の給料だそうだ。これで、家族が1ヵ月生活をする。1日平均100KSH(300円!)。これで、食べ物を買うくらいのものである。

夜行列車に乗ったとき、現地の人に日本の様子をきかれた。その話の中で、「毎



キスム駅

月家賃に1000ドル(13万円)払っている。」といったらびっくりしていたが、3000KSH=80\$だから、彼らの年収がだいたい1000\$になるから、驚くのは当然かも知れない。

かくして、旅行しているときは、大金持ちになってしまっただが、帰ると、はたして日本人は、本当に豊かなのか?と考えてしまう。

#### 人類のふるさと

アフリカは、人類発祥の地と言われている。

人類の始まりの化石が、タンザニアやケニアの各地で発掘されており、ナイロビの国立博物館にもキスムの博物館にも展示されている。タンザニアのオルドバイ溪谷で400万年前のアウストラロピテクス・アフリカヌスの化石が発見されたのをはじめ、ケニアのツルカナ湖のほとりでも、化石が発見された。アウストラロピテクスの化石博物館には、発掘当時の資料が数多くある。

また、ナイロビの南、オロゲサイリ(Ologesalie)には、多くの石器と集落の跡が遺跡として保存されている。現在は、乾燥して、サバンナになっているが、かつては、木が茂り、動物が多く生息していたのだろう。

#### 言葉

列車に乗って、ケニアの人と話したときに、「日本では何語を話すのか」と聞かれたので、日本語だという、「日本語だけか?」と聞かれ、そうだというと、感心したような顔をしていた。

当り前のような問答だが、ケニアの人にとっては、一つの言葉だけで用が足りる(一つの言葉しかない)ということとはすごいことだそう。



ナイロビ国立博物館

ケニヤの言葉の事情は、次の様になっている。

まず、部族語と言われる、小さな部族の言葉が、50もあるそうだ。キクユ語だとかマサイ語だとかルオー語だとか、大きな部族から小さな部族まで、それぞれの言葉を持っている。そして、東アフリカの共通語であるスワヒリ語。これは、ケニヤ・タンザニア・ソマリア・ウガンダなどの国で使われる。さらに、英語。植民地時代からの言葉である。こつこつと重のことばの使われ方になっている。

ケニヤの公用語はスワヒリ語と英語である。ケニヤで話されている言葉は、時と場合と相手によって、英語であったり、スワヒリ語であったり、部族の言葉であったりする。

部族のことばは、私には、全くわからないが、一番親しい人と話すときに使われるらしい。

スワヒリ語は、東アフリカの共通語で、言語としての歴史が浅い言葉である。(12世紀ごろ体系化されたというから800年くらいしか歴史がない)日本語ともヨーロッパ語とも全く違った体系の言語で、面食らう。が、列車で会った、文化人類学を研究しているというアメリカ人によると、例外や特殊な言い回しが少ない「グラマティックな言語」だから難しくない言葉であるらしい。少し現地の人に教えてもらった。

そして、相手によっては英語を話す。英語は学校で教えられているということだ。

我々日本人から見ると、「すごい」ことだが、相手を見ると自然と言葉がでるらしい。

教育 子供 学校

教育制度は、小学校(義務教育)の後、ハイスクール、大学(ユニバーシティとカレッジ)というようになっている、アフリカの中では義務教育の実施状態は良いらしい。

生徒達は、ユニフォーム(同じ色のセーター)を着ているので、学校は、それとなくわかる。もっとも、9月から新しい学年なので、訪れた8月は、学年末の休みの様であったが、ハイスクールへの進学率は、かなり低いようである。

そして、卒業時にはKCSE(Kenya Certificate of Secondary Education)という試験があり、これによって大  
学進学が決定される、それが社会での地位に直結するそうなので、かなりの受験戦争らしい。

本屋

ナイロビをはじめ、少し大きな町には、本屋がたくさんある。が、売っているのは、半分くらいが学校の  
教科書だ。

ちよつど、新学年が始まる直前であるせいから、小学校からハイスクールまでの教科書をそろえている。日  
本の高校に当たる学校の、数学のテキストを買ったが、1冊150KSH。これは、この国の所得に比べか  
なり高価である。

また、一般の本も、英語のものがほとんどで、スワヒリ語の本は少ない。本を読むという層は、英語を使  
うのか、とも感じた次第である。

博物館・電気水道・失業・交通機関・ビクトリア湖・タンザニア・動物・切手・郵便・ビール・食べ物・  
リフトバレー等にも触れたいが略す。

## 第二章 鉄道で大陸を横断する



オーストラリア横断鉄道 インディアンパシフィック号

## オーストラリア横断鉄道の旅

2007年春、大忙しのスケジュールで、オーストラリアの大陸横断鉄道に乗り、太平洋からインド洋までの鉄道旅行をした。その名も、インディアンパーシフィック鉄道である。

3月の末、夜8時過ぎに成田空港を出たカンタス航空機は、シドニーめざし、一路南へ。

### シドニー

翌朝、シドニーへ。空から見るシドニーは海と陸が複雑に組み合わさった、美しい街である。7..20シド

#### ニー空港着

機外に出て空港ビルにはいると大きな免税店。そこを通り抜けて、イミグレへ。ここで行列をして、やっと順番が来た、ところがここでトラブル。女性の入国審査官。すんなりいくと思ったら、ETAS「入国許可登録」の「生年月日が違う」と。見ると、1935年生まれ!!旅行会社のミスだが、受け取るときに確認しなかった。当方も悪いか?男性の職員に示され、「ここで待たされる。2分」といいながら、パスポートとETASを持って事務所に消えていく。マズイ、ビザの取り直し?!最悪の場合でも、この程度だろう。しばらく待つと、職員が戻ってきて「OK」ほっと一息。ただ、入国カードも返された。次に手荷物検査に行列。X線検査の後、入国



空から見るシドニー



シドニー港



オペラハウス

カード回収。ようやく外に出る。ここまで1時間。

出てまずする事は通貨の入手。ATMマシンが見あたらぬ。ここで尋ねると教えてくれたのがCitibankのマシン。ALL CARDと書いてはいるものの、おなじみのVISAマークはない。行列の後カードを入れるが反応がない。抜いてみると、番号を入れる指示、選択肢は2つ、更に次に3つ、そして・・・この国のシステムは、カードを入れる。抜く。ピンコード。メニュー。選択SAVING。金額、でようやく200A\$を入手。手順は国によって違うなあ、と実感。時差ボケはないが、夜行でぼんやりしている頭には、ちよつとしたショック。

シドニー中央駅まで電車で行くことにする。12・60\$。2階建て電車に乗り4つ目の中央駅へ10数分立って行く。中央駅でインデアンパシフィック鉄道の出札窓口へ。日本では、2等寝台（レッドカンガルークラス）上段しかとれなかつたので、ここで切符を変更する。すんなりと1等寝台（ゴールデンカンガルークラス）がとれた。ちよつと贅沢だが、ゴールドは個室寝台、食事込み3泊4日8食付きの値段が\$1720だがYH会員割引で\$1636。ただしこれはインターネットで買った値段で1\$=90円で14万円強になる。日本の旅行会社の手配では19万2千円にもなってしまう。差額の380\$をカードで支払い、切符を手に入れる。ほつと一息。

大きな荷物をホーム脇の預かり所で\$4・40で預けてから、シドニーの市内見物。時間が3時間余しかないの、歩いていけるところまで行ってみる。駅から北西方向に歩くと、市役所などの古い建物と新しい建物が混在している。ダーリングハーバーに出る。よく整備された波止場である。そこから北へ向かい、ロックスの観光



シドニー市役所





ブローケンヒル駅

地を歩く。波止場の向こうに印象的なオペラハウスの建物がある。太平洋の港町だ。ここから南ヘシテイの中心を抜けていく。途中、アーケード街を通りピザを食べ、サンダルを買う。今回の旅の必需品である。絵はがきを購入し、郵便局で切手を買う。一枚1・25\$ハイドパークに入りオーストラリア国立博物館に入館。10\$。一部の展示室が閉鎖されており残念。自然（動植物、地質）と先住民のコレクションがある。子供の団体が館員に引率され回っている。駅まで戻り、カフェでホットドッグとジュースで昼食。11:30にホームへ。パシフィックインディアン号が入線している。銀色の車体を13両ずらりと並べ、先頭には自動車運搬車両が付いている。荷物を受け取り、客室に向かう。一等の所は、青い旗と赤いマットが敷いてあり、アテナダントが立っている。チケットを見せると回収された。車両番号Eの11号車。一人用車両は、廊下が波打った様に曲がっている。客室にはいると理由がわかった。台形の様な形をうまく利用し窓が大きくとれる様にレイアウトされている。室内にはガイドブック、予定表、洗面道具一式、アイマスク、バスタオル、フエースタオルが置かれており、小さいながらもロッカーもある。荷物を片づけるうちに発車時刻になり、ホームを後にする。

### 鉄道

14..55、しばらくして、車内探検に出かける。Barがオープンしたとのことで、ラウンジカーに行ってみると客で一杯。ビールを買って客室に持ち帰り、飲む。ようやくたどり着いた、と一安心。いよいよ3泊4日の大陸横断の旅の始まり。食事は2回に分かれ、前がいいか後ろがいいか聞かれ、前をと答える。食事時間になったので、食堂車に行ってみると係の女性が座る席を指示している。メニューを見ると、前菜、メイン、デザートを選ぶようになっている。スープと鮭とチーズを頼む。給仕の女性が、日本語のメニューも



アデレードのツアーバス

あると言っているので、次から持ってきてもらうことにした。料理の名前はなかなか覚えられない。前の席には親子連れ、隣には年配の男性が座り、おしゃべりが始まる。早くとも聞き取れない。客の大半は年配のリタイアしたであろう人たち、そうか、1等車は高くて、若者は乗れないのだ。時間がない若者は飛行機で、金のない若者は2等車かバスで移動する。1等車は、金も時間もある人間の乗り物なのだ。昨夜は飛行機の中だったので眠かったが、延々2時間に渡った食事が8時に終わると食堂車は第2回の準備にかかった。

夕食を終え戻るとベッドが作られていた。シャワーを浴び、寝る。くたびれていたので、9時には寝てしまった。

## 2日目

朝は6時にアナウンスがありコーヒータム。ラウンジカーにコーヒーがある。7時にブローケンヒルに到着。朝のいなか街は静かで人通りもない。散歩しているうちに、おみやげ屋が開店しているのを見つけ、絵はがきを購入。ここは、銀鉱山として栄えた街らしい。そうでなければ、ポツンと街が出来るころではない。バスのツアーも出発したようだが、乗らなかつた。8:20出発。

9:00から朝食。朝食は2つから選択。コンチネンタルを選ぶとクロワッサン、チョコレートパン、菓子パン、フルーツが出てきた。もう一つの方は、スクランブルエッグ、ベーコン、焼きトマトなどとパンだった。こちらの方がよかつた。1時間半で終了。朝食が終わったと思ったら、11:30に昼食。ターキーとアボガドのサンドイッチ。イチゴケーキ。見ていると、とにかくみんなよく食べる。



平原を走る



クック駅

食後、アデレードのツアーに申し込む。

15・10、アデレード着、駅は、2つ郊外の駅で、アデレード駅には車両が長すぎ入れないらしい。そういえば、終点パースでも同じ事情のようだ。シドニーだけ、中央駅に乗り入れができるとか、鉄道開発の歴史を感じる。町の中心から2km離れたケプウェク駅に着く。周りは何もないところ。バスツアーが出発。バスで1時間少しのドライブ。1箇所（展望台）で下車以外は、バスの中からの見物ガイドブックの地図がないと、どこをどう回ったのかわからないところであった。駅に戻ってから2時間もあった。停車時間は3時間40分もあったので、歩いて町に行くこともできたし、タクシーを使えばより時間があり、もったいなかった。

18・40、出発。クルーが全部入れ替わっている。19・00夕食。ドイツ人の若い女性と同席。前のニューヨークの女性2人組との「通訳」をしてくれる。東京に行ったことがあるという話だ。メニューは、スープ、牛フィレ肉（大きい）、タルト。そしてグラスワイン6\$を注文。食後、シャワーを浴び、寝る。こういう日課で1日のうち、食事に5時間（1・5+1・5+2）位をかけた生活をしている。

### 3日目

朝、目を覚ます。列車はナラボー平原に入っている。直線の線路が400km以上も続く大平原。木もなくなり、小さな丈の草があるだけの台地。左右には地平線が広がる。あなたに数本の木が見えるが、あとはただただ大草原の景色が何時間も変わらない。動物の姿は、一度鳥（ダチョウウカ？）の姿を見ただけで、まったくいない。地面はすっかり乾燥している。初めてここを通った人は水を持ち、食料を持って、



一点透視図法



カンガルーのステーキ

馬で、いつ終わるともわからない、見渡す限り続く平原を進んでいたのだろう。時々、線路の両側にアンテナのようなものや、太陽熱発電パネルのついた小さな小屋を見る以外は、人工的なものはない。7:00に朝食。話し好きな陽気なニュージールランドの2人組とドイツ女性のテーブル。今日は、スクランブルエッグ、ベーコン、ベークドトマト、マッシュルームの朝食。

食後しばらくして、クック駅に着く。この駅はナラポー平原の真ん中にあり、補給のための駅。廃墟のような町だが週に四便が停車する。お土産屋があり、絵葉書を買う。線路に立つと、まさに一点透視図法。次の町まで荒地が広がる。何もない。

看板に次のように書いてある。“NO FOOD OR FUEL FOR NEXT 862km KALGOORLIE”！なんと次の町まで800km以上あるのだ！

14:00から昼食。カンガルーのソーセージが出る。カンガルー肉は、初めてとチャレンジだ。前に座ったのは品のよいオーストラリア夫婦。列車は平原の中の変わらぬ景色の中を進んでいる。夕食は18:00。カンガルーのステーキが出る。朝のニュージールランドの2人組、ドイツ女性と同席。どちらもキャンソンのデジカメを持っている。

食後、カルガリーに到着。夜になっている。ドイツ女性はここで下車。夜のツアーのバスに乗り込む。小さな町をドライブ。あつという間に町を抜け、金鉱山の採掘所を見下ろす展望台に。とにかく山を削って金を掘っている。空にはオリオン座、シリウスを始め星が見えている。南にあり日本から見えないカノーパス、そして南十字星、アルファケンタウリが見える！そういえば、町を昼間歩いていても、太陽は、北にある！ここは南半球なのだ、と改めて認識。田舎町で街の灯がないので、こんなに星が見えるのだ。バスは駅に戻る時間になり、明かりの消えた街中を



バスに到着

通り、駅に向かう。運転手が、説明しているが、ゆっくり話しているのでオーストラリアの英語がよくわかる。アイティーアイトと、エイがアイなのだ。何も無い駅前で1時間ほどすこす。その間に、ミニ3脚を使って、南十字星を写す。30秒の露出で何とか写った。22:00に列車は出発。シャワーを浴びて寝る。いよいよ明日朝には終点バスに着く。

#### 4日目

朝食が少し早くなって6:45。オーストラリアのフルブレックファーストとは、卵（スクランブルエッグか目玉焼き）＋ベーコンかソーセージ＋焼トマト＋焼マッシュルームらしい。食後、片付けと荷造り。3日間過ごした狭いコンパートメントともお別れ。9:00東バス駅到着。大陸横断鉄道インデアンパシフィック号の4300kmの旅の終点である。東バス駅は、これまた何もない小さな駅で、ここから列車やバスでバスに向かう。本当はここでまって、ゆっくりしたいところだが、航空券が今日の夜中発になっている。列車でバス駅に出て、コインロッカーを探し荷物を預ける。インド洋の港町フリーマントルに行く。

フリーマントルは、こじんまりとした港町である。植民地時代の雰囲気が残った建物が多く見られる。港の旧要塞から見る海の青さは、圧巻である。はるばるインド洋まできたのだ、と実感できるひと時。

午後にはバスに戻り、市内見物。バスは、人口150万人の大都会である。駅を降りるとにぎやかな商店街。さらに進むと、広大な公園と水辺（スワン川）にでる。日が暮れるころ、空港へ向かう。



終点東バス駅



フリーマントルの旧要塞

シドニーに戻る

シドニーへの直通便ではなく、プリズペーン乗り換え。実にあわただしいが、しかたがない。夜行便でぐっすり寝ているうちにプリズペーン着。シドニー行きに乗り換えて、1.5時間、シドニー空港に着く。明日またここから帰国に便に乗るのだが、市内に宿を取っているの、列車で向かう。ようやくホテルを探し当て、チエックイン。あてがわれた部屋は「広大」といってもいいような部屋。風呂に入り、リフレッシュ。しばし休養の後、バスで市街地に向かう。ブルーマウンテンへ行きかけたのだが、時間的に半端で断念。この前来ていたので、町の様子はわかってい。中華料理屋で、麺を食べる。しばらくぶりの味がする。歩いて町を抜け、港まで行く。有名なオペラハウスがある。ここには実にたくさんの観光客が来ており、日本からの修学旅行生と思いき女子生徒の一団もいる。夕方、ホテルに戻り、休養。今回の旅は、車中泊ばかりで、ホテル泊はこの1泊のみ。広すぎる部屋で、ゆっくり寝る。

翌朝、朝食を取り、チエックアウト。朝食込みのはずが、代金を請求されており、交渉して直してもらった。ホテルを巡回する空港行きのバスに乗り、楽々と空港へ。搭乗手続きも終わり、機中へ。後は、数時間の旅だ。ビデオオンデマンドのシステムが途中で動かなくなり、サーバーをリセットするというトラブルもあったが、日本で上映前の映画を見たりしているうちに、成田空港へ。あわただしかったオーストラリア大陸横断鉄道の旅は終わった。オーストラリアには、大陸縦断鉄道もあり、機会があればそれも楽しそつである。



パース市内

## カナダ横断鉄道の旅

2002年年末から2003年年始に、カナダを訪れた。

北の大国という印象があるカナダであるが、地球の大きさを体で実感するために鉄道で太平洋から大西洋まで大陸を横断しながらの冬のカナダの旅であった。

主な旅行の行程は次のとおり。

成田空港…(エアカナダ)…バンクーバー(2泊)…VIA鉄道(3泊)…トロント(2泊)…VIA鉄道…モントリオール(2泊)…VIA鉄道オーシャン号(1泊)…ハリファックス(2泊)…エアカナダ・トロント経由で成田空港

日本からバンクーバーまで

12月20日(金)

成田空港を夕方17:00出発。機内ではすぐ夕食、映画を見て少しうとうとしたらもう朝食。飛行時間8時間で2回食事をするとこうなる。バンクーバー着は時刻の「その日の」10:25。7時間を遊んだ事になり、奇妙な感じだ。イミグレを通り入国手続きを終え、両替をした。明日から土日になり列車に3日間乗るので10万円を替えてしまおう。1\$=82円で1200\$ほど手に入れる。初めて使う外国のお金は、慣れるまで落ち着かない。

予約していたB&Bに電話をしてピックアップに来てもらう。大急ぎでピックアップポイントまで移動。



VIA鉄道



バンクーバー市街

B & B 青垣の足立さんと会い、車で家に移動。右側通行の景色を見ている間に到着。広々とした住宅街の一軒である。大きな家で、2階の広々とした一室に通された。シャワーを浴びて一休みして街へ行く。5分ほど歩くと「スカイトレイン」という鉄道の駅に出る。ここはメトロタウンという最近できた一大商業センターなのだ。そのメトロタウン駅には券売機はあるが改札もない。驚いたことに、無人運転の2両編成の電車が来る。それに乗って15分ほどでバンクーバーの中心、ダウンタウンに行くことができる。終点ウオーターフロントは文字通り海のそばの駅である。ツーリストインフォメーションを探して、地図をもらい、ミュージカルの切符を買う。今日夜8時からの「屋根の上のバイオリン弾き」\$54、と明日2時の「ウエストサイドストーリー」\$44・75の2枚。昼食をとり街をぶらつく。中央郵便局で絵葉書を買い、劇場を確かめ、国鉄(VIA)の駅でハリファックスまでの切符を引き換える。混んでいると乗れないから、大事をとって日本で旅行業者を通じて寝台券を購入していたが、窓口で引き換えなければならぬ。あつけないほど簡単に終わってしまった。これなら、インターネットで予約しクレジットカードで決済してもなんら問題はなかった。これから何度も驚くことになるのだが、インターネットとクレジットカードは、

この国では「普通の道具」なのである。夕方4時になると薄暗くなり、夜8時まで時間があるので、いったん宿に帰り休むことにする。帰りに酒を買おうと、メトロタウンの広い広い商店街を探し回るが、どこにも売ってない。他の物は大概売っていいそうなおびただしい数の店があるのに、ワインを売っている店はない。大きなスーパーで聞くと「何とか通りのリカーショップにある」というのだが、まったく土地勘のない悲しき、あきらめて宿に戻り2時間ほど休む。18:30に宿を出て、スカイトレインでスタジアム駅に行き、20:00からPlay Houseで「屋根の上のバイオリン弾き」を見る。1階最後列の通路の隣の席であったが、ホールは狭く、臨場感が





バンクーバー港

ある。物悲しい結末だった。22..40に終了し真っ暗で寒い中、スカイトレインで帰る。この時間になると店は閉まっており、片づけをやっていているスターバックスコピーの店でサンドイッチと変なコーラ飲料を買って、宿に戻る。住宅のクリスマス飾りがとても美しい。風呂に入った後、サンドイッチの夕食をとってから寝る。

翌日は、時差ほけもあり、朝ゆっくり寝て9..00に朝食。11..00に宿を出て、ダウンタウンに出る。バンクーバー美術館でTom Tomsonの風景画の特別展、エミリーカーの不思議な絵を見る。それからバスで南グランビルに行き、昼食に中華料理屋で「雪菜肉系系麵」を食べる。中華料理屋は至る所にある。リカーショップを見つければ、カナダのワインとウイスキーを買う。それからウエストサイドストーリーを見る。Action1の最後のシーンがなかなかよい。16..30に終わる。明日もミュージカルを見ることにして、サウンドオブミュージックのチケットを買う。これはハーフプライスとかで、なんと\$20。帰りに登山用具店に寄り、山シャツを買う。

宿でカナダ産のワインをあけるが、安い割には美味であった。

12月22日(日)

22日は二度寝して朝ぐっすり寝ているのをノックの音で起こされ、朝食。この家の高校生の子供と一緒に食べながら、当地の高校教育の実情を聞く。コンピュータ利用では先進的な学校らしい。なかなかカナダの状況は興味深い。たとえば、看護婦を養成しても給料がよりよいアメリカに働きに行ってしまうこと、学校の教員も人材難のようだ。コンピュータができるなら、何も学校の教員などやってないらしい。また、相当台数あるコンピュータのメンテナンスは、教員がやっていられず、生徒がしているという。学校を見に行くかと誘われたが、残念なことにクリスマス休暇が始まって、閉まっていた。こうした話を聞きながら、外見

は日本の高校生とまったく変わらない2人が英語でしゃべっているという「不思議な」光景に驚きもした。支払いをして、荷物を持って宿を出る。はじめVIA鉄道の駅に行き荷物預かりで大きな荷物を預けて、身軽になりミュージカルホールに向かう。

今日のホールは、バンクーバーの郊外のリッチモンドという町にある。そこまで30数キロの距離で、直通のバスがどうなっているかわからないので、昨日行った南グランビルまで行ってバスを乗り継ぐことにする。リッチモンドの病院の隣にあるからそこを目印に探せと昨日教えられていた。ホール探しに手間取って、20分遅れで入場。サウンドオブミュージックもなかなか面白かったが15・30に終わって急いで駅に戻らなければならぬ。列車の発車時刻が17・40だから、タクシーでないと難しい。劇場の前だからタクシーぐらいあるだろうと思っていたら全くない。この国は、自分の車がないと移動できないらしい。探し回っているうち、通りがかった人にあのホテルで呼んでもらえ、といわれて、この国ではタクシーはそうやって乗るのかと納得。ホテルで呼んでもらい、40分ほどで35km離れたバンクーバー駅に着いた。駅は、1日1便のトロント行きに乗る乗客でこった返していた。

寝台車専用のラウンジがあり、ここで時間を過ごした後、カナディアン号の乗車が始まった。222号車の03Uという座席。222号車を見つけると、車掌が入って左と教えてくれる。むかいあった座席を見つけて荷物を置く。ひげ面の大男が向かいの席で、ハローと言って握手する。両親が近くの個室寝台にいて一緒に旅行だという。荷物は座席の下に入れられると教えてくれる。列車の編成を見てこようと、ホームに出る。銀色の車体が延々と連結されており、先頭は2両のジーゼル機関車がつながっている。向かいにロッキーマウンテニア号の青い車両が止まっている。そのうち、発車5分くらい前になった。列車に戻ろうとすると、ドアがどこも



車内にある列車の編成表



出発のバンクーバー駅

閉まっている。あせった。ホームにいる無線機を持った駅員に話し、連絡を取ってもらおう。後でわかることだが、この国の列車は、誰がどこで乗るかを完全に把握していて、その車両の車掌が、客が乗車し終わると、ドアを閉めてしまい「セキユリテイ」を保持しているようだ。

とにかく一汗かいて、乗車。向かい席の大男の母親に、最後の客になりましたね、といわれてしまった。

17…40音もなく列車は動き出した。これから3泊4日4000km余の旅が始まる。動き出してから、客室係が「夕食の予約をしたか」というので食堂車に行く、「9時に来い」。昼を食べていないので長かった。その間にシャワーを浴びてさっぱりする。お湯がドンドン出る。快適だ。結局、夕食は10時スタート。近くの2段寝台の2人とアメリカから来た白人青年の4人でテーブルにつく。さすがにすっかりとしたディナーでしいたげと鶏肉のスープ、パン、テンドーロインステーキとたっぷりの野菜、コーヒー、ケーキ(甘くて大きい)というちゃんとしたコース料理だ。食事が10回分乗車料金に含まれている。日本のレストランで食べると、いくらかかることやら。が、とにかく遅い。1時間あまりで最後のデザートまで行き、23…00過ぎに終わった。座席に戻るとベッドがセツトされていた。2階に登り、ワインを少し飲んで寝た。

12月23日(月)

目を覚ますと7…30、二段ベッドから出てみると外は雪景色。シャワーを浴びてさっぱりする。朝食に行くといっぱいで、2両前の車両に行け、というので行ってみると、コーチ用の食堂。名前を聞かれたので答える。コーヒーがあるので飲んでいたら、しばらくたって名前を呼ばれた。食堂車に連れて行かれた。そうか、満員なので、待合室に使っていたのだ。若い夫婦連れと同席。「カナダ式オムレット」というのを頼んだら、



ラウンジカー

すごいボリューム。卵3個分にチーズ、トマト、ハムなどが入っている。カナダ人というのは、朝からこんなものを食べるのかと、感心。途中、列車が止まる。放送している中に「レイルブローケン」という言葉が聞き取れる。車掌に聞くとその通りで1時間かかって出発。

車窓には、左右に山が見えている。ちょうど日が当たって氷河で削られた急斜面の山が青空の下にくっきりと見えている。Mtロブソンと思われる山が左に見えてきた。後で確かめると、そうであった。この山は、カナダで一番高い(3954m)美しい山である。右側には湖が見えている。

峠を越え、ジャスパーに11:20着。一時間半遅れて着くのかと思ったが20分遅れ。

太平洋ゾーンからマウンテンゾーンに入って1時間時差があったからだ。昨夜、女性が急病で救急車に運ばれたときの30分、線路故障で1時間の遅れを取り返したことになる。ジャスパーで約1時間停車。降りてみるとひどく寒い。天気もよく風もないが凍りつくような空気だ。たくさんのお客様が降りていく。ここは、冬のリゾート地で、クリスマス休みを過ごすのだろう。絵葉書を買う。町に出ると2階建ての家の小さな町並み。歯磨きと電池を買おうとドラッグストアを探したが見つからなかった。おみやげ屋ばかり並んでいる。

ジャスパーを出ると、昼食。メニューはスープ、バイソンのハンバーガー、シーザーサラダ、コーヒー、デザートだが、皿いっぱい料理だ。こんなに食べていると大変なことになるとデザートはパス。2時半に食事終わる。昨夜に懲りて、夕食はファーストコールにしてみらったので17:30だ。展望車で景色を見ながら午後を過ごす。山岳地帯から平原地帯へと地形は変わってくる。とにかく平らな地形で湖



カナダ最高峰 Mt ロブソン

が見えたりもする。15…30に日が沈みかけている。快晴の空は、夕焼けで少しピンク色に染まっている。日が沈み暗くなると、エドモントンの町に着く。しかし、ちょうど夕食のコールで降りれず、昼食からも時間がたつてない。しくじった。絵葉書を投函してもらおう。夕食のテーブルは老夫婦が向かいに。プリティッシュココロニアに住んでいるフランス語を話す夫婦である。もちろん英語も話す。どこに行くか、とか、何が好きかとか、いろいろ話しかけてくる。昔、50kmのクロススカントリースキーコースを走ったが今はもうだめだ、とか、モントリオールに住んでいたとか話していた。夕食のメニューは鱈のチャウダー、チキンシュニッツェルとポテト、コーヒール、デザートはチョココレートケーキそしてグラスワイン(\$4・5)である。

18…30に夕食が終わる。  
ラウンジカーでビール\$4・5。飲み物、スナック、果物などは無料である。ジャスパーで相当降りて、車両も4両切り離れたということだ。レストランもすいている。20…40ベッドメイキング。もう一度シャワーを浴び21…00過ぎに寝る。

12月24日(火)

早く寝たせいか、夜中の2…00ころ目が覚め本を読んで時間を過ごしました眠ってしまった。次に起きると8…00。何もしないのに何だか疲れが残っている。朝食に行く。今日はガラアキ。「エッグスベネディクト」という今日のスペシャル料理を食べる。小判型のパンケーキの上にハムと温泉卵が乗ったものが2つついている。結構おいしい。コーヒールを飲んだ後、展望車へ。ガラアキ。先頭の席でしばし風景を楽しむ。地吹雪のような状態。正面左より日が昇ってくる。東に向かつて進んでいるというのを実感する。地形は相変わらず平らな雪の大地。小さな林、時々人家、左側に電線という、昨日から変わらない風景が続いている。



ジャスパー駅



ラウンジカー

食堂車のマネージャーが来て、昼食の時間を変えろという。ウイニベグ着が昼食と重なるからだ。デジカメの電池がアウト！電気かみそりとライトの電池でとりあえず使える。買わなくては。

12・30 ウイニベグに到着。電池と切手を買おうと列車から降りた。駅舎はとても立派だが、にぎわっている様子がない。案内所を見つけて「電池を買いたい」というと、外に出て道路を渡り「カナダペートル」に行けといっている。なんだろうと思いつつ、大通りを渡りガソリンスタンドに行くと、そこにコンビニ店のようなものがあった。電池を買った。結構高かった。単3を4本で\$8。切手は売ってないという。駅に戻り絵葉書を買っていたので買った。切手はないという。そうこうし

ているうちに時間になり列車に戻った。13・20 出発。クルーが全員交代してしまっていた。すぐに昼食。大分乗客が少なくなっていて、食堂車もゆったりしている。サーモンの燻製をパンに載せたものとサラダ、デザートとケーキを食べた。マーマレードの味でやたらと大きなケーキだった。相席者は、女性2名と若い男、周りの樹木が変わってきたので、「あの木を何と言うのか」と聞いてみると、spruceとbirch（発音はパーク）だと教えてくれた。白樺とトウヒである。

午後は展望車で雪景色を見ながら読書。「ゲーム脳の恐怖」という脳科学医者の書いたもの。ゲームが問題があるのでは、とは前から漠然と思っていたが、脳科学の事実を見せられて愕然とした。今の日本では大変なことが進行しているな、と思った。15・30ころには薄暗くなり16・30には日が沈んでしまった。景色のほうは一方向に変わらない。ということとは、ものすごく広い平原を走っているということだ。



ウイニベグ駅



停車した一時、外を歩く

19:00に夕食。フリティシユコロソピア州から来たという老夫婦の前の席。話しているうちにハリファックスまで行くというと、もう一人ハリファックスに行く日本人がいるのを知っているか、と聞かれた。展望車にそれらしき人がいたが、日本人、韓国人、中国人いずれともわからず声をかけないでいた。お互い日本語をまったく話さないの、こういうことも起こる。その人とは食事の後話をするのだが、JRに勤めるM氏であった。何日かぶりで話す日本語。食事は、子牛肉のチョップとポテト、コーヒーそしてチョコレートケーキ(甘く大きい)\$4・5のワインだった。クリスマススイブラしく、クイズをやっていた。日本でいうなぞなぞのようなものだが、さすがにさっぱりわからない。ちょうどこの途中にSioux Lookoutに停車する。外にいけず、残念であった。

20:30に食事を終え、席に戻ったら、もうベッドメイクがしてあった。シベリア鉄道とは違って、毎日片付け、新しいシートに取り替える。

クリスマススイブもこうして暮れた。1日に4時間以上も食事の時間に使うというこれまでにない(そして今後もない?)生活をしている。

12月25日(水)

目が覚めると、東部標準時ゾーンに入っている。また時計を1時間進める。この何日か、1日が23時間という生活を送っている。生活が単調なので、1時間くらい少なくてもどうということはない。反対側に向かって旅行すると、1日が25時間になってしまう。同じ速度の列車で同じ距離を走っているのに、・・・などと考えると、なんだか変な感じである。時差のない国で生まれ生活しているので、なか



食堂車でティー



Capreolで停車

かなじめない。

早く寝たので、夜中に目が覚めて、読書をしているうちにまたうとうととしていたので起きたら7:30であった。周りはまだ薄暗くボーっとしているので、シャワーを浴びてすっきりして、朝食に出かけた。食堂車には人があまりいない。食事中にようやく日が昇って明るくなってきた。天気は晴れ、雪が30cmくらい積もっている。M氏と同じテーブルになった。スクランブルエッグとコーンビーフとジャガイモ、フルーツヨーグルトがおいしかった。食後、ラウンジカーでパソコンに充電しながらデジカメの画像を読み出した。これができる、デジカメで写真を枚数を気にせずに取りれる。スマートメディアの1枚が不調なので、取りたい。外は相変わらず

雪景色だが、光が当たるとダイヤモンドダストがきらきら輝いて美しい。カメラでは取れないな、とは思ったが、何枚かシャッターを押した。そうこうしている内に11:40にCapreolで1時間の停車。切手を買いに町に出たが、小さな町は静まり返っている。誰かが、「ゴーストタウンみたい」といっていたがそのとおり。今日はクリスマススの休日で、この小さな町(村?)には、店が開くどころか、人の姿さえ見えず、列車の乗客が歩き回っているだけだ。カナダの鉄道は、こんな田舎町にも1時間も止まるのか、と複雑な思い。タンクローリー車が機関車に横付けして燃料を補給していた。機関車もどかいが、タンクローリー車もかなり大きい。このスケールの大きさがアメリカ大陸なんだ、と思った。かなり寒く、特にすることもないが、外を歩いているほうがいいので列車の周りを歩き回る。機関車2両、貨車1両の後にコーチ(座席車)が展望車を入れて5両それぞれ食堂車、寝台車3両、ラウンジカーの編成である。途中でずいぶん短くなって



展望車





トロント着

いる。1時に発車、すぐ昼食。乗客は30人くらいしいかないのではないかと。メニューはパスタ、シーザーサラダ、コーヒー、そしてアイスクリーム。このアイスクリームは、コクがあつておいしい。

午後は読書。日が暮れかかり夕焼けが見える。展望車に行く。雲があるので、西が夕焼けになつていいる。雪景色の中の夕焼け。日本ではあまりない組み合わせ。太陽の高度が低く、角度が小さいので日の出も日の入りも、ゆっくりだ。列車の進行につれて地平線に出でたり入ったりを繰り返しながら延々と1時間くらいかけて暗くなる。17:30からカナディアン号での「最後の晚餐」となる。夕食は、鶏肉のカツレット、ポテトサラダ、チーズと果物そしてグラスワイン。この3日間、よくぞ食べた。コーチの人たちは料金を払って食べるので値段がついていた。夕食が\$20、\$25だから、1日3食では\$50になるのだろうか。これが3日+夕食分が運賃に入っているのだから、200ドル近くが食費だと思うと、寝台は安い。(もっとも一人で旅行するならこんなにリッチな食事はしないが)それにしても、これまででない、そしてこれからもありそうもない、「充実した」食生活の3日間だった。

食事が終わると、荷造り。これもあつという間に片付けてトロント着を待つ。トロントには何と30分も早く、7:30に到着した。トロントのユニオンステーションも巨大な建物である。ただ、人影は多くはない。むしろ、さびしいくらいだ。クリスマス夜の夜なのに(だから?)がらんとしている。駅前に何台か待っているタクシーをつかまえ、宿の住所を示し出発。街も車の通りが少なくなるまで深夜のようだ。

駅前からタクシーで\$15払い、インターネットで予約しておいたB&Bペンション



B&B 白樺の朝食

ン白樺に着いた。建物の前に大きな白樺の木が植えられている。少し待ってから部屋に案内された。大きな部屋である。4日ぶりの「動かない」ベッドで一夜を過ごした。

12月26日（木）

今日はトロント滞在の日。ナイアガラの滝を見に出かける。

朝起きて朝食をすませ、5分ほど歩いて地下鉄の駅に向かう。そこから都心部まではほんの10分くらい。鉄道で行くことにしたので、カナダバスを見せて往復の座席をもらう。この国の鉄道は、「完全予約制」ともいうべきやり方で、バスを持っていても、座席を予約していないと乗れないようだ。日本ともヨーロッパとも違う。アムトラックのニューヨーク行きの列車に乗る。カナダ側の国境の駅がナイアガラフォールズである。約2時間の乗車。オンタリオ湖の周りを走る。五大湖は子どもどころから知っていたが、列車で走ってその広さを実感する。途中の駅で乗降客は結構多い。さすが大都市の近郊である。ナイアガラフォールズ駅につき、滝までの交通機関を探すが、観光シーズンでないせいかわからない。そんなに離れていないので、街を見物がてら歩いて行くことにする。日本の別荘地のような雰囲気のある住宅地を30分も歩くと、滝が見え始める。アメリカ滝の奥にカナダ滝、どちらも巨大な滝だ。深く挟まれた川に落ち込んでいる。渾水期だから水量は少ないそうであるがそれでもスケールは大きい。滝見物を終えて駅に戻る。列車は1日2便しかなく、時間がもつたないのでバスでトロントに戻ることにする。日が暮れるころトロントに戻り、AGO（アートギャラリー・オブ・オンタリオ）の開館時間に間に合う。「コーガンからマチスへ」という特別展。ヘンリームーアの彫刻も多数あるが、なにぶん時間がないので駆け足で回る。その後、チャイナタウンに向かう。トロントのチャイナタウンは、とにかく広く活気がある。まるで香港かどこかにいるようだ。北京



ナイアガラの滝

ダックならぬ、鴨のローストとワントンの夕食で15ドルという安さ。それから地下鉄駅まで歩き、Davisvilleにある宿、ペンション白樺に戻る。

12月27日(金)

モントリオールに向かう。8:30にトロントユニオン駅。モントリオール行きは9:00発は売り切れていた。トロントの滞在が短いのが残念なくらいだが、9:30発のモントリオール行きに乗り込む。モントリオールまでの539kmを約4時間で走る。この路線は、「コリドー」という、カナダ国鉄の幹線部分である。列車の本数も多い。この区間は2等車であったが、シートはゆったりしている。トロントでは半分も乗ってなかったのだが、次々と客が増えてゆき、モントリオールに着く頃にはいっぱいになった。「立席」を作らないための客の数の管理の仕方である。座席は指定席ではないので、総人数分しか切符を売らないのだろう。だから、必ず席はあるはずだ。日本でなら、「必ず座りたければ指定席をとれ、そうでなければ立つことも覚悟せよ」となっていてこれが当たり前だと思っていたけれどそんなことはない売り方もあるのだ。列車はトロントの町並みを後にして、平原の中を進む。雪をうつつすらとかぶっているのだが、同じ平原でも、森林が多く、湖もたくさんあったトロント以西に比べ耕地、牧場になっている土地が多いようにみえる。途中20分程度の遅れを出しながらも次々と駅に止まり客を乗せてゆく。空いていた席は次々に埋まってゆく。途中、トロント駅で買ったサンドイッチの昼食をすます。30分遅れで川にかかる鉄橋を渡ると、高層ビルが見え始めカナダ第2の都市モントリオールの駅に近づく。駅近くでは地下に潜ってしまう。モントリオールセントラル駅は、完全な地下駅である。ホームが何本も地下に並んでいる。上にあがるとビルの中の「広場」の空間で、これが駅である。これまでのような独立した駅舎もなく、ビルの一角が駅、という感じの造りである。これまで、ウィニペグ、エドモントン、トロントとこの国の鉄道の



モントリオール駅

駅があまり街の中心にはないのが今日の状況であるが、これらの巨大な駅舎もそのうちモントリオールのような形になるのかもしれない。地下鉄のボナベンチャ駅まで歩き、地下鉄で10分余りでシエルブロック駅に着き、5分ほど歩くとフオンテー又公園で、そこにインターネットで予約していた宿「B & B on the Park」がある。荷物を置いて一休みしてから、街に出る。この街はフランス語で表記され、まるでパリの街を歩いているような感じだ。ただ、モントリオールの方が街がゆったり作られてはいるが。雪が積もり寒い。中心街に行き、明日のバレ「くるみ割り人形」の手ケットを買う。40ドルだから、日本で買うのに比べ雲泥の差。クリスマスの美しい飾りが町中のいたるところにあり、フランス語でかかれた町並みは、トロントとは違った「空気」を感じる。これがケベックというものだろうか。中心街のイタリアンレストランでパスの夕食をとり、宿へ戻る。

12月28日(土)

今日はモントリオール滞在。B & Bでの朝食は焼き立てのパンケーキだった。カナダの名物メープルシロップをつけて食べる。朝食を作っているのは、パートタイムで働いているマギーさんとかいう人で、宿のオーナーのニコルは電話で話したが姿を見せない。なんでも、翌日は日曜日で、客は一人しかいない、朝子どもを学校に連れて行かなければならないから早く来て朝食の支度をしておくから食べてくれ、というようなことをいわれた。宿代も清算した。やはりこの時期は、観光客などいないのかと、妙に納得。

この日は、モントリオールのミュージアムバスというのを買って、博物館巡り。20ドルで2日間モントリオールの美術館や博物館に全部入れるというのだから、すごく安い切符だ。中心街にあるマッドコード博物館では開拓時代の歴史の展示、モントリオール美術館ではフランス革命期のリシュリユーの特別展をみた。美



バイオスフィア

術館の食堂で昼食、ラムシャンクが25ドルでおいしかった。そうこうしているうちに、バレエを見る時間になってしまったのでプラデザールの劇場に向かう。入口がわからず少しうろちしたが、滑り込みセーフ。バレエは幻想的な舞台で楽しかった。終わってから現代美術館へ。ここでは、表現の大胆さに驚いた。その後、チャイナタウンに行き、エビ麵の夕食。それから歩いて宿に帰った。

12月29日(日)

昨日、朝食は自分で、といわれていたが、他に客が入ったらしい。違う女の人が朝食の支度をして、6人ほどの客が朝食を摂った。パンと卵とベーコン、克蘭ベリージュースがおいしかった。日本のみかんのよいうな果物があり、名前を聞くと「チャイニーズマンダリン」とのこと。-20度の真冬のカナダでも、野菜や果物が豊富にある。これがロシアとの違いだ。9:30チェックアウト。宿代のレセプトをもらう。帰国後、税金還付に必要。地下鉄に乗ろうと駅に行くが、駅員がいない。日曜の朝のためだろうか。VIAのセントラル駅に行く。荷物を預けようと歩いていると、声をかけられた。バンクーバーからカナディアン号に乗っていた老夫婦だった。最初気づかなかったが少し話をして、あーあの二人か、とわかった。息子はその場にはいなかった。彼らはこれからケベックシティーへ行くそうだ。3日もいると覚えてしまうものだ。案内係りから時刻表では19:00にモントリオールを出るThe Ocean(オーシャン号)はクリスマス特別ダイヤで切符には19:45発となっていると説明された。荷物を預けると、荷物係のお姉さんから19:00までに引き取るよといわれた。それまでの10時間が今日の観光の時間。地下鉄の1日券を買って、今日は、まずサンテレーヌ島に渡り、スチュアート砦博物館、バイオスフィアと回り、その後モントリオールの港の方にある、旧市街に行く。モントリオールの街が作られたのは、まずセントローレンス川の港から始まり、次第に奥の現在の市街へ広がっていったようだ。その旧市街の石畳の町並みに行く。シャトーラムゼー博物館、ボンスクールマーケット、奇抜な展示の考古学歴史博物館、ノートルダム聖堂を見ているうちに夕方になり、中華街でパ



ノートルダム聖堂

イキング料理の夕食をとり、セントラル駅に向かう。19時5分前に荷物預かりに着くと、荷物係のお姉さんが心配そうな顔で待っていた。19:00から乗車開始。寝台券を持っているから、駅のラウンジを使えるのだがそんな暇はなく列車に乗り込んだ。各車両の入口で車掌が名簿と乗客のチェックをしている。発券の仕方といい、乗車の仕方といいおそろしく手間のかかる方法だ。が、これこそが究極のサービスなのかもしれない。アップパーバス024の2Uに行く。まもなく発車。音もなく動き始める。

カナダの列車はスリーパー・エコノミー含めて車掌が完全に乗客を把握できるシステムになっているから完全予約制だ。途中駅で停車する場合も車掌が乗客を把握して担当する客が外に出ないと、さっさと乗降口を閉じてしまふ。セキュリティを確保する目的のようだ。だから、車掌に声をかけずに別の車両から降りたり、乗ったりすると、面倒なことになる。

さて、今回の下の段のベッドを使うのは、おそろしく体格のいい若い女性であった。隣は、子供を2人連れた家族。バンクーバーからの列車は、「大旅行」という感じのいでたちと荷物が多かったが、こちらは、普通の列車での移動、という感じで、荷物も小さかったり、紙袋だったりである。車掌がきて、ベッドを作るからパークカーへ行ってくれといわれたので、最後尾のパークカーへ移動する。ビールを飲んでいるとビデオを上映し始めた。30分ほど立って戻ると、まだベッドが完成していない。またパークカーに戻って外の様子（といっても真つ暗だが）などを見ている。また30分ほど後に戻ると、ベッドができていたの上段の寝台に上る。車掌が「エブリシングOK?」と聞くのでシャワーを使いたいというと、バスタオル他のセットを渡してくれた。熱いシャワーを浴びて寝台にもぐりこみ、本を読み、ワインを飲んで11時半に寝た。



TRURO駅

12月30日(月)

朝6:00に目が覚めた。ポーっとしてるので、シャワーを浴びて気分がよくなる。8:00までベッドにいて朝食に行く。車掌に聞くと「パークカーにあるものは無料、食堂車は有料」ということだった。パークカーに行ってみるとコーヒー・紅茶等の飲み物とパン、ゼリー、果物などが置いてある。コーヒーとパンを食べる。やたらと甘い、ポリウムのあるパンだ。ここでタイムゾーンが変わっているのに気がつく。東部ゾーンを出て大西洋ゾーンに入っていた。また1時間進める。ケベック州とニューブランウィック州の間で1時間時差がある。

バンクーバーから数えてみると、太平洋ゾーン、山岳ゾーン、中部ゾーン、東部ゾーン、大西洋ゾーンと5つ目で5時間の時差があるのがこの国なのだ。1日の約4分の1の時間差ということは、地球の標準時をもち、5時間半の時差があるのがこの国なのだ。4分の1にまたがって広がっているということになる。

朝食の後、展望車で風景を見る。雪の中を列車は進む。平らな地形だが、牧草地や人家がとびとびに見える。左側はセントローレンス川(か湾)。

11:00にモンクトン、ここで絵はがきを投函する。この駅から「赤毛のアン」の舞台、プリンスエドワード島へ連絡するバスが出ている。一度行ってみたいところだ。12:30に食堂車で昼食。メニューには、8ドルから12ドルくらいでいろいろなものがある。「モントリオール風スモークミート」というのを頼む。鱈のチャウダー、ライ麦パンに挟まれた燻製肉とピクルス、パスタ、酢漬けのキャベツがついてあまりしつこくない。これが、バーガーならすごいポリウムがあるところだ。



ついにハリファックスへ



レッドロブスターを食べる

食事のあと、展望車へ。駅に止まるたびに降りていき、多分スリーパークラス全部で客が30人くらいしかいないのではないか。それなのに5両で運転（エゴノミーをいれると10両編成くらい）している。14:00を過ぎると陽は傾き始め弱々しい光となる。

14:50にTRUROに着く。乗っていた上下寝台には6人いたが、一人また一人と降り、ついに一人になってしまった。終点ハリファックスはいかにもはずれだな・・・という感じを感じた。15:45に海を見る。流氷か？「16:30に着くだろう」という車掌の話より少し早く16:25に終点の駅ハリファックスに着いた。ここでは宿は予約していないので、ツーリストインフォメーションで探してもらおうつもりでいる。駅に着き、車掌に写真を撮ってもらい、「バンクーパーから列車で来た。列車の旅はとてもよかった。」といううれしそうな顔をしていた。モントリオールからハリファックスまで1346km、バンクーパーからだと、

4466+539+1436=6441kmの旅になる。

感動もつかの間、宿探しだ。ヨーロッパなら駅にツーリストインフォメーションがあるところだが、こちらの駅にはそんなものはない。町の中に2箇所あるようなので、荷物を持って歩いて行ってみると、海辺にあるほうの事務所には、月曜日は休み、他16:30までとなっており用があるなら町中のもうひとつに行け。という張り紙がしてある。坂を3ブロック上り、町の中心部の事務所に行くと、営業時間が終わってしまった。こんなことなら駅で電話をかけて探すのだったと思ったが、仕方がない。夕間は深くなりかけて風は冷たい。電話するのも手が凍えてしまう。いいや直接行こうと、1件のホテルに行ってみたが、値段が高すぎるので2軒め。



ハリファックス駅





シタデルの入口

ここで折りあいがつく。今日は\$79、明日の大晦日は\$149と1日で倍になるが、正月料金？みたいなものだから仕方なろうと、巨大なホテル・デルタハリファックスの客になった。これまで、B & Bばかりに泊まってきたので、一度くらいはこういう宿もいいだろう。

カードキーをもらって部屋に行く。荷物を置いて、やれやれ、ハリファックスに着いたぞ・・・と安心。すこし休んだあと、町の「探検」に出かける。駅からホテルまででハリファックスの中心街を横断したことになるくらい小さな町であるが、海岸線から高台にかけて町並みが作られ、多数の海から登る坂道、海岸通り、それと平行に走る数本の長い通りというのがこの町の基本的なつくりである。人口11万余の都市のコンパクトにまとまった中心街。

海岸に出て、「これが大西洋か・・・」と少し感慨にふけたあと、夕食は、海辺の町らしく、すこし豪勢にレッドロブスターを食べることにした。評判がいらいらしい海鮮レストランに行き、1ポンドのレッドロブスターとビールを頼んだ。この旅行中で一番リッチな食事であった。とはいえ、全部で\$40(3200円)だからたいしたことはない。満足して、ホテルに戻り、のびのびと大きな風呂に入り巨大なベッドでゆっくり寝た。

12月31日(火)

この日は、ルーネンバーグに行ってみたかったが、ツアーは無いようなのでハリファックスの市内見物。

朝、ホテルのビジネスルームでパソコンを使ってWebを開いてメールのチェック。コンピュータといえば、各部屋に、インターネット接続用のコネクタが配置さ



要塞シタデル



ダウハルジー大学

れている。モデムを通じて接続するので、モデムケーブルさえあれば自分のパソコンを接続できたのだが、残念ながら持ってこなかった。日本ではモデムケーブルを使うことなどなくなっているが、アメリカ大陸ではモデムは普通の接続手段なのだということを知った。電気は110Vとはいえ、まったく同じコンセントであるので日本で使っていたままつかえる。ヨーロッパは国毎にまちまちで、とてもパソコンを持っていくようななど思わないのだが、北米はちがう。日本のパソコンはそのまま使えるようになってきているのか、といい勉強になった。

さて、ハリファックスの町だが、大西洋に面した歴史ある港町、ということ、港町で育った私にとっては親しみの多い町であった。朝から夜まで一日中歩き回った。午前中、アンが学んだというダウハルジー大学を見物し、その足で高台にある要塞シタテルに回り、それから市街地にある美術館や博物館などを見て回った。海のそばのマリタイムミュージアムに着くころには16・30になっており、大急ぎで見たが、あのタイタニック号の遭難とハリファックスが関係しているとは思ってもよらなかった。考えてみると、北大西洋航路はこの港町のすぐ近くであり、当たり前なのだが、なかなか人間の頭というのはそうはいかない。しかし、改めて、「こんなに遠いところまで来たのだ」と感慨深いものがあった。

この日は大晦日で、普段なら少し遅くまで開いているだろうが、店は18・00には全く閉まって旅行者にはつらい日だった。大晦日に夜中まで仕事をする習慣はさすがにないと思えて、町は静まり返っていた。



ハリファックス港

ホテルに戻り、風呂に入って、かたづけ。いよいよ明日の朝、帰国だ。明朝7..  
35の空港行きバスに乗り、ハリファックス空港からトロントへ、そして東京へと飛ぶ。長かった旅行の荷物を片付け、寝る。廊下で若者たちが騒いでいる。町には明かりがともし、大晦日の夜は更けてゆく。

2003年1月1日(水)

いよいよ、カナダを去るはずだった日、朝、目を覚まし支度をする。空港行きのリムジンバスに乗る。外は相当寒そうだ。町中が凍っているように見える。行き交う車も人もなくあつという間に空港に着く。空港は、早いせいか、がらんとしていゝる。荷物を預け、飛行機に乗り込む。いよいよ、カナダの大地ともお別れだ。ところが、なかなか離陸しない。30分以上遅れて動き出す。トロントでの乗換時間が少ないので、気が気ではない。それでもようやく飛び立って、海が見え、ハリファックスの町が見える。白い陸地の上を飛び続ける。鉄道で何時間もかけて移動してきた大地が、あつという間に過ぎ去っていく。

途中、時計を見ると、遅れたままになっている。乗務員に航空券を見せて、大丈夫か?と尋ねると、前の方に歩いてなにやら話している。トロント近くになって、早く降りられるように、一番窓側の席から乗務員席に移してくれた。乗換について、説明してくれているのだが、「トゥネ」という言葉が何度も出てくる。ようやく、トロント空港では工事中で、トンネルをくぐっていくコースを行けと言っているのだと合点する。着陸。15分しかない。この前に最前列に連れて行ってくればよかったのだが、移動途中、乗客が立ち上がり通路をふさがれてしまった。ここで時間を取られ、空港の中を大急ぎで移動するが、国際線に乗るので、荷物チェックなどに引っかけかり、搭乗ゲートについたときには、すでに飛行機は動いてしまっていた。連絡して待ってくれているのかと思っただがそうではない。乗るはずだった飛行機は滑走路へと向かっている。係



空から見たハリファックス



トランジットホテル

れる旨話す。

1月2日(木)

朝食の後、少し早めにチェックアウト。空港で時間をつぶすことにする。おまけの一日は、よい休養にはなったが、何とも気の抜けた幕切れであった。空港でぶらぶらした後、ようやく搭乗開始。搭乗前にアナウンスされて呼ばれたので行ってみると、席を変えろという。乗り込んでみると、ファーストクラス。空での時間を、すごく贅沢に過ごした。ただ、こういう席に一度でも乗ってしまうと、これからエコノミーに乗れなくなるのでは・・・という心配をしながらであったが、日本までの旅を終え、成田に降り立った。日本は正月だった。

員に航空券を見せると、飛行機は行った後だという。しばし呆然としていたら、担当する女性が、明日のチケットの予約・荷物の回収などをやってくれ、今日はホテルを用意するから明日の便に乗ってくれと言う。こういうことは初めてで、どう対応していいかわからずにいたが、日本人の係員を呼んでくれて説明してくれた。

予定外でのトロントのもう一泊であった。トランジットホテルに移動。結構高そうなホテル。しかし、周りに何も無い。とくに1月1日だから何もやってない。トロントまで出るにも交通機関はない。タクシーを使うくらいだが、予定してないことなので準備ができていない。食事のパウチャーをくれて、明日の9:00に空港へ行くまで、ホテルで過ごす。日本に電話して(テレホンカードもくれた)1日遅

# ロシア旅行記

真冬のシベリアからモスクワ・ペテルブルグへの旅

1997年2月26日～3月6日

これは、真冬のロシアをイルクーツクからモスクワ、そしてサントペテルブルグまで1997年2月に、一人で旅行したときの記録です。

第1日(2月26日(水))

上越 新潟

(イルクーツク)

上越発(高田駅前バス停11…30新潟行バス¥1800)高速バスで新潟に向かう。新潟駅前13…30着、アエロフロントの新潟支店でリコンファームをしようとする、不可であった。ただし、帰りの便が1時間遅くなっていることを知らされる。「代理店から聞いてないのか」といわれる。一体どうなってるんだ、この先どうなるのだろう。

駅前から、バス14…30発。新潟空港14…55。新しいが何にもない空港。こんなことなら、新潟の町でいろいろしておくのだった。時間つぶし。15…40出国手続き、あつというまに終わる。地方の空港はいい。機体はツポレフ154。4…15搭乗ロシア人20人くらい、日本人12人で席はすかずか。16…45動きはじめて16…50離陸、すぐに赤ワインとオレンジジュースのサービス。17…50日没前の夕焼け(赤オレンジ色の美しさ)



シベリア鉄道の機関車



上空からシベリアを見る

それから、夕食（ステーキ、パスタ、ポテト、にんじん、サラダ、パン、デザート）18:00 陸地に至る。雪をかぶった大地が見える。20:00 お菓子とコーヒー、21:00 飲み物がでる。21:15 下降開始。21:40 着陸  
〔現地時間20:40に調整〕

21:00 機外へ出る。ロシアの大地に足を下ろす。寒い、暗い。3分歩いて空港建物へ、バスポートコントロールでは、2列に並びゆっくり、ガラスの向こうに女性係官が無言でチェックをする。イミグレーションも無言で通過した。ところがそれから問題だ。荷物が出てこない、飛行機はすぐそこにあるのに……。荷物を待っているのは、ロシア人が10数名と日本人が10名くらい。所在なげに、話をしたり、ぶらぶらしたりして時間を過ごす。（これがロシアだ、始まったばかりだ）と言い聞かせる。

22:25 荷物出る、そのまま税関へ、申請書を上げしげと見て、OK、拍子抜けがする。一言も口をきかないままの入国審査であった。時に22:35。しかし、予定より、大幅に遅れている。到着予定は20:00。ホテルに行くトランスファーはどうなっているだろうか、不安がよぎる。時刻は遅い。交通機関は、なくなっている時間だ。空港の建物の出口から出ると、暗い中に向こうに建物が見えるので、歩いていった。ところが、途中で、こちらが出口だと、小さな木戸のようなところから外に出されてしまった。「国際空港」のイメージとは似ても似つかない「出口」だ。

その木戸を一步出るや、凍てついた暗い中に、街燈が光り、30人ほどの男と女が立っている。出るやいなや、何人かが近寄ってきて、タクシーと声をかけている。ロシア人との、初めての対応だ。インツーリストのトランスファーが来ているはずなので、「  
?（インツーリスト）」と聞いているうちに、誰かが向こ

うのマイクロバスをさしている。確か、その時、「アフトバス?」と聞き返すと  
うだという。バスに近寄り、中にいる3人の男の一人に「  
?」と

聞くとそうだという。ほっとする。「イズイポーニ？」と聞かれ、そうだと答える。初めて通じたロシア語だ。あわてて、インツーリストの看板をもって一人が出口の方に急いでいった。

バスに乗り込んで、ようやくあたりを観察する余裕が出てきた。このバスは迎えに来たのだが、あまりに遅いので、バスの中で待っていたようだ。そのうち、日本人ばかりが連れられてくる。同じ飛行機の4人組と2人組、3人組だ。ようやく、乗り込み、バスは出発する。窓から見えるのは、凍てついた町の両側にあるあるものは新しくあるものは古いアパート。書いてあるロシア文字のいくつかが読める。少し安心する。

15分ほど後に、大きな建物の前につく。インツーリストホテルだ。入口は、暗い。とても営業しているホテルの入口とは思えない。

バスを降り、入口に向かうと、ドアのところに小さな子どもがいる。唾然としてみると、ドアを動かし、手を差し出す。何がなんだか分からずに、ドアの中に入ってから、そうだ、あの子は、物乞いをしていたのか、とはっとする。しかし、小学校に行くかいかない小さな子が、シベリアの極寒の夜の12時近くに一人で物乞いとは、……と一瞬呆然とした。シベリアの「小さなドアマン」だ。

チエックインのお手続きも、女性が一人でカウンターであれこれやっている。途中でロシア人が割り込んで、長々と話しはじめたりして、一向に進まない。時間は、23:30をまわっている。

ようやく、部屋が割り当てられて、エレベーターで昇る。カードだけしかもらっていない。鍵はどうなるのか心配だったが、行けというので、4階に行った。すると、エレベーターを降りたところに、事務所のような机があり一人の女性がいる。これが、ロシア流のデジェルナーヤだ。この人が、このフロアを取り仕切っている。カードを見せると、鍵をくれた。それで、部屋に行き、ようやく一息つく。0時をまわっていた。

窓の外には、川が見える。窓は広く木を使った、悪くない内装だ。デジェルナーヤのところにいき、ビールと絵葉書を買う。ビール3・4\$ポストカード10枚3\$。両替をしてないから、ドルしか持っていない。



イルクーツクの町

おつりをループルでくれた。高いのだから、よく分らない。おつりは、初めて手にするループルだ。とにかく、シャワーを浴びて、ビールをあけて、シベリアの記念すべき第1夜に乾杯。1時過ぎに寝る。

第2日(2月27日(木))

(イルクーツク)

6..00起きる。ノート書き、はがき書きetc。7..00暗い。月が出ている。朝食に行く。2階食堂。パイクング形式。日本人の4人組に、バイカル湖へのツアーがあるという話を聞く。

9..00に郵便局  
が開くらしいので行くが、9..00になっても閉まっている。白人の女性が待っていたが、開かないのにあきれた様子でいなくなる。(同感)少し遅れて、開いた。日本まで絵葉書6枚15000ループル。絵葉書10枚8000ループル。ロシアそろばんを見つけ、これはロシア語でなんというのか?と聞き、これに書いてくれと手帳を出す。  
というのだそつだ。

の地図を売店で買う。これは1\$。その後、両替をする。10ドルが56600ループルに。  
1\$=5500P(P..ループル・ロシア語のエル)と聞いていたから、また相場が変わっているようだ。

アエロフロートの事務所を見つけ、帰りの便のリコンファームをする。ところが、何か言っている。しばらくああたこうだといった結果、ペテルブルクから

(モスクワ)までは国内線だからリコンファームできないといっているようだ。それは、承知していたので、  
から成田の分だけだといいい、ようやく終

わる。この時、帰りの便の時間が変わっていることが告げられる。新潟で知っていたからすぐ分かったが、もしそうでないと、また何を言ってるのだろうかと、なつたところだ。何かから何までこの調子で、時間がかかる。



インツォリストのカウンターでバイカル湖ツアーに申したいというと、いいという。11:00に來いとのこと。

その後、部屋に戻り支度をする。鍵を返す。そして、1階でバスポートとピザとパウチャーを返してもらう。この時、鉄道の切符をくれというが、18:00まで待てという。これが、後で起こるとんでもないトラブルの始まりだったのだが、そんなものかとその時は思ってしまった。荷物を預ける。この荷物を預かって下さい。とロシア語で予習して言う。手数料1\$。時に10:10。

その後、町を散歩。地図を片手にホテルのまわりを歩き回る。のどかな田舎の町だ。トローリバスやら、ボンネットバスが走っていて、車はたいがい古く、20年

以上も逆戻りしたような感じだ。建物は、古いものと新しいものが交じり合っている。20分行って、戻り。岸に近いところは凍結して、ロシア人たちは、その氷の上を歩いている。白樺並木の、夏なら気持ちのよさそうな道だ。

11:00にバイカル湖行のツアーのバスが出る。25\$。他に乘っているのは、日本人ばかり。4人組。2人組。それと二人旅の学生ばかりだ。それに運転手のロシア人の総勢9人。

バスはイルクーツクの町を抜けて郊外に進む。南へ走っているはずだ。しばらく行くと、タイガの森の中を走るようになる。梅のような針葉樹と白樺の混じった林が延々と続く。凍結した道路は、アップダウンし林の中を進む。車は80km以上のすごいスピードを出している。運転手は、英語を話せない。聞くところでは、英語ガイド付きのはずなのに、学生ばかりで、甘く見られたか？

12:20に車が停まる。アンガラ川のほとりだが、運転手が、何か言っている。訳が分からないが、いろいろ聞いているうちにオセーロ(湖)と言っている。そこは、ちょうどバイカル湖とアンガラ川の境で、氷結



アンガラ川

しているのはバイカル湖、青い水面が見えるのがアングラ川だということだ。そして、向かいに、シャーマンズストーンという大きな岩山をさしていた。凍り付いた川辺で写真を撮って、凍えるような10分を過ごす。気温-15度。

バスで、片言のロシア語で運転手と話すと、いろいろ教えてくれるが、思うようにはわからない。やっと、運転手のかぶっている毛皮の帽子がシャウプカということ、50万pくらいだということ。イルクーツクで買えること、等を聞いた。バスは少し走り、湖岸の漁船の集まっているところで止る。見ると、氷結した湖面に氷の山が見える。中心から凍結してゆき、湖岸までくると、体積が膨張して、氷が上に突き出してくる。青く透明な氷であった。そこに、映画を撮っている3人組がいたが、そのうち、機材を運びに車氷の上を走ってきたのには驚いた。

沖の方は、「氷の水平線」である。はるか向こうまで、まっ平らな氷の原っぱ。これが、世界最大の淡水湖バイカル湖だ。漁船も氷づけになっている。

そこから、5分ほどで、湖岸の小さな集落の教会につく。そこで、見てこいといっているようなので、行ってみたが、教会に入るところは見つからず、土産屋があるだけのようなのだ。

その後、5分ほど走って13…20にバイカルホテル

につく。運転手は、「ランチ」というと、中に入ってしまった。ここは、高級な避暑地らしく、入口にドイツのコール首相が来たときの写真を貼っていたが、今は、がらんとしている。

広いレストランにいくと、客は1組あるだけで、8人も真ん中のテーブルに案内された。メニューが来たが、ロシア語のものしかないという。英語が話せるもの



氷結したバイカル湖

を呼べといつてもいないという。同席の日本人学生たちは、誰もロシア語がわからないというので、仕方なく、メニューの解読を始めるが、なかなか進まない。そのうち、メードがやってきて、少し英語が分かるというので、メニューを訳せという、それはできないという。結局、学生たちに、同じ物にしてもよいかと聞き、いくら払えるかという、一人5ドルだという。メードに、一人5ドル払うから何が食えるか聞くと、だめだという。そうして、7ドル払えばビーフストロガノフができるということ聞き出し、それを8人分頼むまで1時間近くがかかってしまった。

まったく、とんでもない。添乗員みたいなことをやらされたが、ロシア語がまったくわからないという学生たちをほつたらかすわけにもいかず、わからないロシア語での問答は、疲れた。それから頼んだ料理が出てくるまでにまた1時間近くかかり、3時前になっていた。空腹のせいもあり、料理はうまかった。

支払いの時に、ドルはだめでルーブルだけだということで、ルーブルを集めるのに苦労した。4人だけがコーラを飲んでいたのでめんどくさい計算の結果、ひとり40000p払った。とんでもない時間潰しだ。結局<sup>15</sup>…10出発、帰りに、イルクーツク空港に行くロシア人2人を便乗させ、空港まわりでホテルに戻ったのが16…30であった。

それから、Kマルクス通りに買い物に行こうとホテルを出て、中心街に近づいてから両替をしないのに気づき、通りの銀行に入った。両替の列には、前に2、3人並んでいた。すぐ終わると思いきや、前のロシア人がパスポートを出しながら窓口で、延々と話している。ようやく終わって次の番になると、またもや延々と。こうしているうちに、銀行の中で行列しているのに、やみドル屋らしき男が交換しようとして声をかけてくる。ようやく終わると、時計は17…00になった。すると、客はいるのに窓口をふさいで、売上金の計算をしているではないか！5時だから終わりというわけだ。

あまりのことに、呆れ果ててしまった。とんでもない20分間だ。腹を立てて銀行を出て、デパートに向か

うと、道の両側の露店は店じまいをしている。デパートに着くと、ここも5時までであった。

18:00にホテルに戻って列車の切符をもらわなければならないと、歩いて戻った。

ホテルに戻り、50\$を両替。それから切符を受け取りに行くと、20:00まで待てという。ロビーのソファには、切符を受け取るはずの日本人2人が増えていて、何か話をしていった。

そこで19:00まで待つと、なんと、列車の切符がないという!!白人の女性がインツールの職員に抗議していた。しばらくは事態がどうなっているかわからないでいたが、いろいろな話を総合してみると、今日モスクワへ行くのは、白人女性1人と日本人11人だが、モスクワのインツールのリストからは2名分しか送金されてなく、切符は日本人の単独旅行者2人に渡され、あとの分の切符は買えないという。何でも、イルクーツクのインツールのリストは、送金された金でイルクーツク駅に行きシベリア鉄道の切符を買って客に渡すシステムになっているのだという。その金が送金されていないのだからどうしようもない。というのが彼らの言い分であった。日本の旅行代理店のイメージでインツールのリストを考えていたが、どうもそうではないようだ。

大体、パウチャーという制度自体が、通信網の発達を前提としない制度である。旅行社自身に旅行の情報を持たせて処理するシステムであり、同時に、予定されたところ以外へは行かせないシステムでもある。このインターネットの時代に旧き時代の制度のなごりがこれである。ともあれ、こちらとしては、モスクワと連絡を取って、切符をよこせというしかなかった。どうも、インツールのリストで切符を担当していた女性が勤務時間の終わりなので18:00過ぎに帰ってしまったことが問題を複雑にしたようだ。その女性担当者に連絡を取れといっても、それはできないの一点張り。結局責任の所在がはっきりしない。同じインツールのリストでもホテルとサービスは、まったく別組織のようで、誰に話をしていいのかわからない。

とにかく、つかみ所がないのだ。そのうち、インツールのサービスの担当者の名がセルゲイ氏だと分かり、少しはつきりしてきた。その外に、英語を話す切符を駅に買いに行くのが仕事のジーンズをはいた男

がいる。彼らの上司が帰った女性担当者のようであるが、残ったメンバーの中では、この2人を相手にするしかない。

そうこうしているうちに、20:00を過ぎた。モスクワとは連絡が取れず、切符が買えない。一人215ドル出せば、切符を買えるという。次のモスクワ行きは明後日までないという。日本人の学生たちは、そんなに余裕があるわけではないが都合できそうだという。スコットランド人女性は、現金は50ドルしかない、カードは使えないのかというと、だめだとの返事。

その間に切符を受け取ったのは2人であるが、うち一人は、残りの9人と同じ旅行会社の手配であることが明らかになる。他は、別の会社の手配であった。なぜ2人だけ切符があるのか、と不思議だったが、これで謎が解けた。そのことを含め、学生の中心になっていたS君に話し対策を考えた。切符をもらっていたK君にそのことを話し、切符は彼女のものである可能性が強いことを話した。また、時間が迫っていたため、どうしてもだめな場合の措置を話し合った。そして、2日も遅らせることはできないので、金を用意すること、不使用証明を書かせること、パウチャーの原本を返させることを行い、切符を買うことにした。そして、K君からスコットランド人女性<sup>三</sup>に理由を話し切符を渡すと、彼女は、とても喜んでくれた。

まともに夕食もとれそうもないのでS君N君K君と4人でカフェでとりあえず何か食べておこうということになった。オープンサンドのようなものとチャイをとった。他の学生のグループにも話して話がまとまり、それぞれから215ドルづつ集め、バスで駅まで行き、切符を買わせた。「ディスカウント」とかで7ドル戻ってきた!。0時過ぎていた。

やっと切符が手に入り、ほっとした。列車は1時過ぎなので、ホテルに戻り時間を過ごすことになった。S君と2階のバーで生ビールを飲んだ。2杯で50000P。ほっとしたビールだった。一体、この数時間は何だったんだろうと話し合った。S君は京大の地震学のマスターを修了するところだとのこと。

1 時近くになりホテルを出た。その際、2 人組の一人がビザを紛失したとの話がされた。ビザ！が見つからず、マイクロバスでイルクーツク駅まで行き、ロシア号に乗り込んだ。与えられたコンパートメントは、S 君 N 君と三の 4 人であった。ようやく、ロシア号の発車だ。25:05 イルクーツク発。

車掌がシートを持ってきた。25000P。高いらしい。ウラジオストクからは15000Pだったとか、ロシア人と値段が違うとか話していた。ベッドは下の段、明かりが点灯しない。車掌に言ったが、見に来てザフトラ（明日）といい何もしないで帰っていった。みんなで持ってきたワインを少しずつ飲んで、2:00 ようやく寝る。長い一日だった。

第3日（2月28日（金））

（イルクーツク）

（モスクワ）車中

5:20 ころ目が覚める。駅に停まっている。

（ジマ）だ。夜は明けている。またうとうとしてい

るうちに、朝になり、起きた。S 君にこの列車の編成などを聞く。朝食はカップラーメン。サモワールではいつも熱い湯が使える。

（ニジュネディンスク）に9:35だ。15分

停車。

駅には、ホームがないので、列車のステップを降りる。列車のデッキから降りると、いろいろなもの売りにおばさんたちが来ている。自家製の食べ物も多い。この地方では、現金収入を得る数少ない方法なのだろう。これなら特に食料を持っていかなくても、旅を続けることができる。駅の売店（キオスク）もある。話すロシア語は、早口でほとんど聞き取れないが、物を売っている調子分かる。たとえば、ピーロシキ、ピロシキ“といった具合。外は、零下15度の世界だが、意外に寒くない。



水を補給する



スコットランド人 Jill

車掌は、オーバーを来て、デッキの下に立っている。給水用のパイプを持った人、ハンマーで車体をたたき氷を落としながら車体を検査する人など、忙しく動きまわっている。時間が少なくなると車掌が戻るように指示。そして発車する。発車のベルなどは聞こえない。

コンパートメントに戻り、車掌に灯りを直すように交渉するために、ロシア語の予習。「私の部屋の灯りが壊れている。昨日、あなたは『明日』といった。これを、ロシア語にするのに、一苦労。しかし、時間はいくらでもある。ようやく、それらしいものを作り、」

変なロシア語！(車掌室に行き、話すと、分かってくれた。そうか、灯り=ランプで壊れている=働かない(ニエラポータエット=not work)なのか!と変に納得してしまった。車掌は若い男に変わっていたが、すぐに来てくれて、電球を取り替えてくれた。

列車の中では、時間はゆったりと流れていく。外は、タイガの梅のような針葉樹と白樺の林。そして、雪の原がずーっと続いている。人の姿どころか、人家すらほとんど見えない。これがシベリアだ、と変に感動する。

同じコンパートメントにいるスコットランド人と話して、彼女の名はJill PRICE、スコットランド人で獣医。大学を出て世界旅行中。イギリス ニューヨーク タヒチ ニュージールランドで5ヶ月働き オーストラリア タイ ビルマ インドネシア 北京とまわって、鉄道でイルクーツクに来たこと、モスクワを経て9ヶ月ぶりにスコットランドに帰ること、4月からグラスゴー大学で勤めること、薬理学を専攻していること、母親は学校の先生で、dyslexia(失読症)の子どもを教えていること等を聞いた。弟が獣医でオックスフォードにいたこと、自分も教師で、イギリスのIT教育に関心があることを話すと、家に来いという。

同室の4人でいろいろと話した。また、イルクーツクの後始末のことも、自然と、この部屋が中心になり

話した。名簿を作り、その後の対策を相談し、モスクワについたら連名で手紙を送ること、東京にいる人間で、旅行会社に行くこと等を決めた。こうしているうちに、列車は12:30にタイシャットに停まり、14:42にイランスカヤに降り、18:46に大きな駅のクラスノヤルスクに停まった。その度に、列車から降り、ホームを歩き、買い物をした。お金の感覚がまだ分からず、問答も訳が分からないまま、買ったものは、ジャガイモの入っているピロシキ、水餃子みたいなペリメニ、アイスクリーム等である。ペリメニは、お金を多く渡すぎたらしく(1000P渡したつもりで5000か10000渡したようだ、あとで考えると。)山ほどくれた。S君も挽肉のハンバーグのようなものを山ほどもらい、みんなでせっせと食べた。そうこうしているうちに、また夜が来た。

時差の関係で、一日が25時間の生活がモスクワまで続く。途中で1時間遅らせるのは、とても奇妙な感じである。ゆっくり、しかし、しっかり一日が終わり夜になり、寝る時間が来る。コンパートメントの中を心に、せいぜい一日数百歩、千歩しか歩かない、奇妙な生活の始まりである。酒を入手し損ねていたら、三が荷物の中からスコッチでなくバーボンを1本だして、それをみんなでこちそうになる。かくして、2月28日は終わる。

第4日(3月1日(土))

車中

6:00ころ目を覚ます。列車は薄暗い中を進んでいる。窓から外が見える。ボーッと眺めながら、この数日のシベリアの景色を思い出す。闇の中で作った何句かを、

車窓には 白樺(ペリヨースカ)林が 流れゆき  
バイカルの 水平線の 凍りつき



シベリアに 窓の灯りの あたたかさ

40度の 寒暖分かつ 二重窓

シベリアの 貨車は重たき 木を運び

白き野の 樹氷に赤く 朝日さし

薄明に 人の歩けり 白き駅

8:00、日の出。ノボシビルスクに着く。下りて、買い物。ピロシキを買う。3000Pだが、細かいのが2700しかなく、まけてもらう。ピロシキはあたたかく、中に、ソーセージとジャガイモが入っていて、とてもおいしい。

列車は、大きな川を渡る。レナ川だ。昔から、地図の上では知っていた、シベリアのレナ川。それを今渡っている。列車は、シベリアの中を走っている。しかし、このころから、平原に入り始めている。列車の線路の両側には、白樺の防雪林が作られている。S君が、列車の速度を測ろうと、線路に設置しているキロポストを使って測る。1kmを40秒で走った。すると、時速90kmになる。

三三といろいろと話をする。彼女がイギリスを出てからここに至るまでの9ヶ月の旅行の話。スコットランドの家の話や母親の話。彼女の仕事の話。彼女に、ハウチヤーを見せてくれと頼んだ。なぜかと聞くので、日本帰ってから旅行会社と交渉をするためだといった。ニュージールランドのSUN TRAVELとかいう会社が発行したものだ、我々の一枚の書類のものと違って、クーポン券の形式になっている。N君の日本の別の会社のものもクーポンになっており、こういう形式でもロシアは旅行



食堂車でランチ

できるようになっているのだろう。信頼性の問題はあるが、西側と同じ形式になりつつあるのかも知れない。三はとても勤勉な生活をしている。日課のように、母親への誕生日プレゼントだという刺繍をゆれる車内で熱心にし、ホーキングの「時間の始まり」という、ペーパーバックの本を読み、自分で集めた詩集のノートを読み、毎日、日記をつけ、聖書を読んでから寝る、という生活をひたすら続けている。なかなか意志の強い女性だ。さまざまな国のスタンブが押されている彼女のパスポートをS君が見せてもらって時に、年齢がS君と同じ24歳だとわかり、みなで驚いてしまった。もっと上だと想像していたのだ。それくらい落着きのある女性だった。

昼に食堂車へ行き食事を取る。客は一人もいず、入ると、ボーイが席を決め、とてもあいさうよく何事か話している。英語は通じない。メニューも出さず、どうも決まったものしかできないみたいだ。最初に、インスタントコーヒーと赤い飲み物の缶詰を持ってきてどちらか選べという。そのあと、スープとパンを持ってきた。これは何かと聞き、ノートに書いてもらった。これが、ソリヤンカという野菜のスープだった。続いて、皿に牛肉の焼いたもの、ジャガイモ、大きな赤ピーマンをのせて持ってきた。そして、最後にコーヒー。これで、60000Pであった。この国の物価では、とても高価な食事だ。そのうちに、バラビンスクに着く。ロシアの白ワインを20000Pで買った。酒には、1本づつ納税らしきシールが貼っている。

途中で、車掌の

(ウラジミール) がインスタ

ントコーヒーを欲しいといってきたので、ピンとあげた。すると、チョコレートくれた。ウラジミールは、英語が話せる。次の停車駅、オムスクでも買物に出た。大体、停車すると、運動も兼ねて、下車して歩き回る。数少ない(唯一)運動の機会だ。キオスクでビールを買う。4000P。この売店の値札が汽車の



オムスク駅の売店の値札

絵がかかれて面白いので、売り子に値札をくれと交渉するが、埒が明かない。(当たり前か) Sくんといっしょに、車掌のウラジミールに頼んで交渉してもらうと、3枚くれた。S君と、三と3人で分けた。いいお土産だ。

次のナジバーエフスカヤでは、肉入りのピロシキを買う。これはおいしかった。何というのか聞くと、プリータと教えてくれた。1000Pであった。S君が、パツソルという、ひまわりの種を煎ったものを買って来た。売っているのは見かけたが、何なのかわからなかったが、食べ物だった。こちそうになった。また、アイスクリームもこちそうになった。この寒いのにロシア人はアイスクリームを実によく食べる。マロージュナヤ、マロージュナヤと言いながら売っている。合間に「複雑系とは何か」を読んできました。そうこうしているうちに夜になり、買っておいたワインをみんなで飲んで、寝た。

第5日(3月2日(日))

車中

今日で鉄道の旅は3日目になる。今日は、アジアからヨーロッパへ入る日だ。モスクワから1777kmにヨーロッパとアジアの境の標識のオベリスクがあるという。通過は、早朝で、まだ夜が明けてないのだが、みんなで見ることにする。4・12スベルドロフスクに30分停車。大きな駅だ。そこがアジア最後の駅である。発車後、今か今かと列車の南側を見ている。ついに5:29、暗い中に、一瞬、白い塔が過ぎ去った。思ったより小さい。いよいよヨーロッパだ。その後、また寝る。



車掌のウラジミールと

8…30起床。ペルミに着く。大きな町だ。ここで、カプスタという、野菜入りのピロシキを買う。2個で3000P。とてもおいしい。チャイを車掌から1000Pで買う。ジャムが入っていて、おいしい。車窓は、白樺と雪景色になっていて、人家がないところでは妙高あたりの景色と似ている。そして、なんとなく春めいている。次の停車駅パレジノは、ナポレオンの敗北したところではないかと思う。いよいよ歴史の地名が出てくる。ここで、コケモモのリキュールを15000Pで買う。アルコール度20%と書いている。

また、次のキーロフでは、赤ワインを25000Pで買う。明日は、いよいよモスクワだ。ついに残り1000kmを切った。イルクーツクから6000km以上の道のりだ。日が暮れて、ワインを飲んでみると、4人組がロシア人の学校の先生に話しかけられたというので、行ってみる。キーロフの中学校の先生で、コーリヤ(ニコライ)という名だそう。ドイツ語を話せるそうだが、とっさのこと、あまり出てこない。それでも、少し話をした。あすは、早起きをするので、早めに寝る。

第6日(3月3日)(月)

(モスクワ)

3…30起床窓から景色を見る。

雪原の 夜汽車の窓に 灯が二つ

起きて、洗顔、荷物整理など。モスクワが近づく。あと30分だ。外は、広々とした農地と集落。そして、大きな都会に入る。

6…35モスクワ・ヤロスラブリ駅到着!まだ薄暗い中で、ホームに降り立つ。あまり寒くない。ここは、プラットホームが作られている。正面の駅舎に、赤い

のイルミネーション。写真を撮っている

うちに、三がいなくなる。駅舎に移動。ひどくこみこみした中を人が行き交っている。ここから、N君は今夜の夜行でフィンランドへ、S君は都心のインツェリストホテルへ、そして、残りのK君と4人組はいっし

よにイズマイロポホテルへ、あとの2人組は、ピザの再発行手続きに日本領事館へと別れる。地下鉄に乗るのために階段を下り、コムソモリスカヤ駅に行く。入口で、ジェットンを買う。1個1500P。おもちゃのようなプラスチックのコインだ。自動改札機に投入し、バーを押して構内に入る。

朝早いせいか、まだ混んでいない。ロシア文字を読みながらクールスカヤへのホームへ移動する。英語の表示はない。エスカレーターはとも長く、そしてとても速い。そして、ゴーツとすごい音を立てて走っている。右に立ち左側を空けると、ここを走るように下っていく人もいる。階段の一番下には、監視人のボックスがあり、女の人がいる。恐ろしいくらいのスピードだ。ホームは広く、壁は美術館のようだ。地下鉄の車両はあまり新しくはない。

一駅めが乗換駅のクールスカヤ。乗り換えもロシア文字の表示を読みながら移動する。

通路も装飾され、東京やパリ、ロンドンいずれの地下鉄よりもスケールの大きな地下空間である。核戦争時の地下シェルターという話も聞いたことがある。

乗り換えて4つめがイズマイロポバルク。この駅の構内も、彫刻がある立派な空間だ。外に出る階段を上っていく。均一料金なので出口はフリーだ。

外に出ると、そこは公園の一部であり、高い建物が見える。道路を渡り、そちらに向かって歩いていくと、客引きの男が来て、しきりに何か話しかける。45\$としきりに言っている。イズマイロポホテルはどこかというところ、来いといって歩き出す。あとから思うに、予約無しで客と間違われたようだ。予約済みだと言っやればよかった。

日本で、旅行会社にデルタというところに行けといわれていたので、そちらに向かう。20階以上の高い建



イズマイロポホテル 宿泊カード

物にそれぞれアルファ、ベガ、ガンマ、デルタという名がついている。男は、ガンマの方に行き、こちらに  
来いとしきりに言っている。わかりにくい入口から入りインツリーリストのオフィスを見つけ、チェックイン。  
7・50ころになっている。

K君とあとで会うことにして、割り当てられた1616号室に行き、3日ぶりの風呂に入る。荷物を広げ、  
着替えをして、9・00少し前におりてぶらぶらして、それから両替をして、K君と会い朝食。お菓子のよう  
なパイとチャイを食べた。26000P。

行動開始。日本の旅行会社あてに書いた手紙を発送しに中央郵便局へむかう。外に出ると、雨。3月とは  
いえ、冬のモスクワで雨とは！。

地下鉄駅でジェットンを買ってクールスカヤで降り、中央郵便局を探す。どうも、反対側に出てしまったよう  
で、雨の中を歩いてもさっぱりわからない。結局戻り、メトロを乗り継いでチーストブルドイに行き、そこ  
で人に聞いてようやく中央郵便局に着く。

ロシアの中央郵便局だから、さぞや大きな建物だろうと思いきや、そうでもない、ありきたりのビルだっ  
た。日本へはがきを16枚送る。1枚2500P、封書は1通3500P。ここでK君と別れる。

ここから、クレムリンめざして、歩く。メトロのルビャンカ駅から赤の広場へ。この前見た、あの聖ワシ  
リー寺院とクレムリンの建物が見えてくる。雨のせいかな、赤の広場は人が少ない。 ( Gum・デパー

ト) に行き、散歩。西ヨーロッパの、特にフランスの高級品を売る店が目につく。そのあと、裏のアレキサ  
ンドロフス小公園に行き、トロツカヤ塔のところから、クレムリンの入場券を買う。ルーブルが足らず、ド  
ルでは払えない。仕方なく、クレムリンのみの券を10000Pで買う。中で、一つ博物館に入る。学割で  
15000P。ロシア語どころか英語すらかかれてない学生証を見せて、学割にもらった。中には、古  
い装飾品の数々。また外に出て歩く。雨の中のクレムリン見物であった。(当時、大学院に内地留学していた)

クレムリンを出て、ルーブルに両替をしようと銀行に行くがパスポートの提示を求められる。パスポートは、ホテルでチェックインのときに保管されてしまい、ホテルカードを見せるがだめ。結局、インツォリストホテルまで歩き、両替することになった。レートはよくない。ここで、一休み。チャイ100000Pで高い。

それから、ボリシヨイ劇場の前に出る。何人かのダフ屋がうろろろしている。それらしく近づくと、声をかけてくる。聞いてみると、20ドルで席があるという。7ドルもある。20ドルのはいい席だということで、買うことにした。2000円、日本では、夢のような値段だ。探せばもっと安いところもあるかもしれないが、時間の方がもつたない。話がまとまり、取り引きをしようとすると、突然、いや30ドルだ、という。とんでもない、じゃあおしまいだといって、後ろを向くと、20でいいという。万事がこの調子なのかもしれない。

そのあと、向かいのカルマルクス像のそばに行く。台座に、ロシア語で万国の労働者団結せよ、と書いている。

それからクズネツキー通りに行き、本屋を探す。見つけて、手帳に書いてもらっていた、高校の数学の教科書を欲しいというと、一角に連れて行かれた。そこには、教科書がまとめておかれていた。アルゲブラとゲオメトリーやで何種類がある。何学年向きかという表示がしてあり、中をばらばら見て、2冊選んだ。内容は、日本の高校生と同じくらいである。後で教科書を見ていて気がついたのだが、何と、記号などはキリル文字でなく、A B C . . . とラテン文字のアルファベットが使われている。

お金の支払い方は、まず、カッサというところで、値段分のお金を払い、レシートを受け取り、本売現場に行き、レシートを見せ本を受け取る。その時レシートは、一部を破き印をつける。という、かつて、チェコで見た東欧のやり方である。客が金を払わないのに物を持っている時間を作らせない、という意図がある



ボリシヨイ劇場チケット

のだろうか。とにかく、無事懸案であったロシアの高校数学教科書を手に入れる、ということは実現したのである。値段は、2冊で33000ルーブル、700円ほどになる。

後は、そのあたりをぶらぶら歩き、地図屋でモスクワの市街図(2000P)を買った。ロシアそろばんは、買えなかった。

そこから、明日の夜通るであろうコースの下見を兼ねて、ポリシヨイ劇場前からコムソモリスカヤ駅を経て、クルースカヤで乗り換えイズマイロボスキーパルクに戻る。

4・30に駅に着く。外へ出ると、にぎやかに露店が出ていて、食べ物や着るものなどを売っている。値段は安く、これがロシアの庶民の暮らしなのだと納得する。ホテルに戻ると、パウチャーを返してもらい、明日の切符を受け取る。イルクーツクでのトラブルがあっただけに、切符をもらうという当たり前のことにも安心する。両替の後、ビールを買う。11%のロシアビールが1000Pであった。部屋に戻り風呂につかって、一休みする。外に出ると緊張の連続なので、心地よい。

しばらく休んだ後、駅前の売店でビールを買う。ドイツ製とオランダ製で6000Pと6500P。それにミネラルウォーターが4000Pであった。その後、K君と2階のレストランで夕食にしようと出向くが、何とメニューもなく、できるものは一つのみ、前菜、肉・米・豆の盛られた皿、チャイ。これで2人分で7000Pという高さであった。

その日は、早朝モスクワに着き、悪天候の中をモスクワの街を歩きまわり、くたびれてしまった。眠る前のビールの心地よさ。

第7日(3月4日(火))

(モスクワ)

(サンクトペテルブルグ)

起床後、今日の予定を確認。今日は、チェックアウト後レニングラード駅に行き、荷物を預けた後に昨日



いけなかったところをまわる。夜、ポリシヨイ劇場でオペラを見て、サンクトペルブルグ行き夜行列車に乗る、という行程だ。

8・30に朝食。こちらは昨夜の夕食よりずつとまともだ。チェックアウト後、コムソモリスカヤ駅に行く。

レニングレード駅で、荷物預かりを探す。駅の表示がロシア語なので、探すのに苦労する。初めに見つけたところは、夜まで預からないらしい。駅の地下に荷物預かりを見つめる。ところが、窓口がたくさんあり、おまけにどこも同じ時間を表示している。そんなはずはないと思うが、どの窓口かわからない。仕方ないので、手帳に12・00、23・00と書いて、一つの窓口に持っていくと、ようやくここではなくあっちへ行けといわれた。13番の窓口がそうらしい。13番でよく見ると、小さな紙切れに24・00と書いてある。まったく不親切なところだ。といっても、これがロシアだと思うと、こんなものかとも思う。預かり料5100Pを払い、ほっとする。

それから、コムソモリスカヤ駅へ行き、ホームで地下鉄を待つ。電車が入線し乗車した瞬間だった。4、5人の女たちが何かわめきながら群がって来た。そして、取り囲んでポケットや上着を探っている。昼、地下鉄の車内である。群がる女たちをふりはらっていると、発車時間になったのか、ホームに逃げていった。4、5人の女たちで、ある者は子どもを背負っている。貴重品は内ポケットにあり、バッグも肩から掛け蓋もすっかりしていたので、何も被害はなかったが、あまりのことに、驚いてしまった。他の乗客たちは、見ているだけである。単独の外国人旅行者が安心して歩けない街なのだ、ここは、と改めて治安の悪さを実感した。女たちは貧しい様子で、生活のため物盗りをせざるをえない状況におかれており、かの社会主義国が、こんなありさまになってしまったのかということをもって感じた。



コムソモリスカヤ駅



プーシキン美術館

それから、都心に出て、プーシキン美術館に向かった。プーシキン美術館は堂々とした建物である。入口へいくと、クロークでコートと荷物を預けるよう言われた。そして、入場料10000Pを払い、見学をする。

中の収蔵物は、すごい一言だ。古代からの彫刻の数々、そして、中世ヨーロッパの絵画の数々、近世ヨーロッパの絵画特に印象派の作品が無造作に壁にかけている。モネのルーアンカテドラルが2枚、セザンヌのサンピクトワール、その外、ルノワールもマネもほとんど壁にかけている。印象派の部屋で、たまたま三に会った。広いモスクワの中でこんなところで会うとは、と、再開を喜び合った。ルノワールの少女の絵が好きだということだ。今夜、ポリシヨイ劇場に行くとの事であった。

しばらく見て歩いた後、ティールームでお茶のみ、ミュージアムショップで本と絵葉書を買った。

ここでは、特別展として、シュリーマンの発掘したトロイの発掘品の展示会をやっていた。こちらは、入場料15000Pであったが、滅多にない機会なので、見た。さすがに鉄や銀はさびていたが、黄金はキラキラと光り輝いていた。首飾りなどを見たとき、数年前に、韓国の慶州の国立博物館見た発掘品と似ているような気がした。昔の人は、黄金のこの輝きに魅せられたのだろうか。

外に出て、ポリシヨイ劇場に向かっていく。途中、バーで夕食。レバーとジャガイモ、肉の煮凝り、肉入りパン、チャイで24000Pであった。

14:00にポリシヨイ劇場へ着く。入口も威厳のある建物で、中に入ると、ホールと桟敷席というオペラ劇場の造りであった。内部を散歩する。そしてシナリオを15000P、オペラグラス5000P、ジュース5100Pで求める。席は、ボックスの2列目であった。あまりいい席ではないが、仕方ない。ポリシヨイ劇場に入る

だけでもすごい事なのだから。出し物はモーツァルトのフィガロの結婚であった。

22…30に途中であるが、退出し、レニングレード駅に向かう。荷物を受け取り、列車の入線まで待つ。少し早く来すぎたが、事情が分らないところで、乗り損ねる事はできないので仕方がない。しばらく待って、入線。23…30乗車。サンクトペテルブルグ行き「赤い矢」号である。シベリア鉄道のロシア号に比べてとても新しく設備もいい。同室はロシア人3人。23…55発車した。しばらくモスクワの夜景が続くが、ロシア人たちはざつさと寝る支度をして寝てしまった。この列車は、ミネラルウォーターやらコップやら弁当やらついている。しばらくするうちに、眠ってしまった。

第8日(3月5日(水))

(サンクトペテルブルグ)

7…15起床、「赤い矢」号はサービスがよい。朝食・チャイ、ミネラルウォーターがついている。朝食のパックの中身は次のようなものである。パン2個・お菓子・インスタントコーヒー・紅茶・砂糖2個・ミルク・チーズ・デザートヨーグルト・おしほり・ナイフ・フォーク、紙ナプキン。これらがプラスチックの容器の中に入っている。また、鉄道のマークの入ったコップは壺型をしたもので、振動によってこぼれにくくなっている。また、コンパートメントに内側から鍵をかけられるようなプラスチックの留め金がある。きつと、盗難が発生しているのだろう。コンパートメントは新しい。これで、モスクワ「サンクトペテルブルグ」間で233500Pだから、高くない。(ロシアの普通の人にとっては、そうではないだろうが)

8…30サンクトペテルブルグのモスクワ駅に着く。活気のある駅だ。最近、この駅で旅行者が盗難にあっているという情報があるので、下りるときに少し緊張する。何事もなく過ぎ、地下鉄の駅に向かう。このジェトンは金属製で、モスクワのものがプラスチックのおもちゃみたいだったのに比べて重みがある。値段は同じ1500Pであった。

駅を出る方向を間違えて、予定と違うリゴスキープロスペクト駅に行ってしまった事に気がついたが、そのまま、モスクワホテルのあるアレキサンドラネフスカバ駅に行く。ペテルブルグの地下鉄は、乗換駅の名が同じところと違うところがあり、慣れるまでややこしい。

駅を出ると、目の前にガステイニツエマスクバ(モスクワホテル)があった。このフロントでチェックインの手続きをする。このホテルは、これまでのロシア式の各階の管理人のおばさん(デジタルナーヤ)が鍵を管理する方式でなく、フロントで、電子ロックのカード鍵をくれる。7076号室を割り当てられる。7階にいくとデジタルナーヤはやはりいた。部屋に入り、荷を解き、一息いれ、風呂に入ろうとすると、褐色のぬるい水しか出ない。クレームをつけると、「セントラルヒーティングだからあと少し待て」という。仕方なくぬるい水のシャワーで済ませた。

11:00ホテルを出発。ネフスキー大通りを経てエルミタージュへ向かう。地下鉄に乗り、2つめのガステイニドゥポールを下りる。外に出ると、方向感覚がまったくなくなっていて、しかたなしに、少し歩く。右に、公園が見え奥に劇場が見える。ここで、警官にエルミタージュはどこかと聞いた。地図を見せるといっているので地図を見せると、今の位置と方向を教えてくれた。いるところはアレキサンドリア広場で奥にはアレキサンドリア劇場が、そして隣にはサルトイコフ・シェードリン公共図書館がある。広場には大きな記念碑(エカテリーナ 世)がある。

ネフスキー大通りを進んでいく。ここはこの町で一番にぎやかな通りだとかで、両側にはいろいろな建物がある。更に進むと、モイカ川を渡りつきあたる。右手を見れば、あのエルミタージュが見える。宮殿広場は半円形の凱旋門に囲まれ、中央



**Hotel Mosква**  
Sankt Petersburg  
Alexandr. Nevsky square, 2  
Telephone: (812) 2742115  
Telefax: (812) 2742130

← **Карточка гостя / Roomcard**

Producer of electronic Hotel key systems & cards, Messerschmitt Germany  
90491 Nuernberg, Erlangenstrasse 10      Telefon: +49 911 91 999-0  
Telefax: +49 911 91 999-22  
Messerschmitt Systeme, Германия      Telefon: +49 911 91 999-0  
90491 Nuernberg, Erlangenstrasse 10      Telefax: +49 911 91 999-22  
Электронные ключи и сервис для отелей и гостиниц

ホテルモスクワのカードキー



エルミタージュ美術館

にアレキサンドルの円柱が立っている。高さは50m弱だとか。凱旋門の上には馬車に乗った勝利の女神の像が乗っている。ベルリンのブランデンブルグ門みたいだ。広場の向こうには、薄い緑の壁と白い柱のエルミタージュ。

とうとうここまでやって来た！入口を探しながら川の方に回る。緑と白の建物が美しく、道路を隔てたネヴァ川は凍っている。少し歩くと、入口らしいところは着く。入口に、  
(エルミタージュ)とかがれている。

12時少し過ぎになっていた。入って地下のクロークで荷物とコートを預け、受付で入場料60000Pと撮影料20000P支払う。まず、昼食。カフェに行くと、なんとハンバーガー屋の店であった。食べおわり、いよいよ館内を歩きはじめる。はじめに館内見取り図を1500Pで買う。はじめに15 18世紀の中世ヨーロッパ美術。建物のインテリアの素晴らしさと絵の多さに圧倒される。ベルサイユ宮殿の中と甲乙つけがたい。数多い絵の中にはレオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロやエルグレコ、ゴヤ、ヴァン・ダイク、レンブラント、ルーベンス等数限りなくある。

ひたすら歩き回り、それぞれが雰囲気異なる華麗な装飾の部屋と廊下を通り過ぎる。無造作に絵がかけられている。3時ころ、疲れてカフェで一休み。

その後古代ギリシャ彫刻を急ぎ足で通過し、19世紀からのヨーロッパ美術の3階フロアに行く。これまでに、中世の絵画をいやになるほど見ていたゆえに、印象派を中心とする新しい美術がとても新鮮にみえる。中世の絵画をこれだけの量見る事はなかったので、頭では知っていたが、なぜ印象派が生まれたのか、が実感される。印象派は枚数としてはあまり多くないが、誰の絵でもある。それも、一つの部屋に、無造作に掛けられている。これが日本なら、このうち数枚持って来ただけで、大騒ぎになるところだ。モネ・マネ・セ

ザンヌ・コッホ・ルノアールからマチス・ピカソに至る20世紀初頭のものまでが並べられている。

これらの絵を堪能した後、ロシア美術セクションに行き、インテリア工芸品のすこさに驚く。ロシアのツァーリは金持ちだ！途方もない金持ちだ！と感じさせられる。まだ全体の5分の3ほどしか回っていないのだが、時計は17:00を回ってしまった。

18:00閉館との事なので、入口の方へ移動すると、ミュージアムショップでは、片づけが始まっていた。5時半ころ、ようやくと、本120000Pと、地図30000Pを買った。ルーブルが足らずドルでの買い物だった。絵葉書は買いそびれてしまった。18:00は、係りの館員が帰る時間なのだ！こういうところにもロシアらしさが見える。18:00少し前に、美術館を出る。ほぼ6時間歩きっぱなしであった。それでも、見残しが5分の2近くあった。この広さは、美術館として、想像を絶するものである。

程よい疲れと軽い興奮を感じながら、ネフスキー通りを歩いて戻る。3つの運河を渡り、人の行き交う繁華街を通り、途中、店でチヨコレートを買ひ、左右の建物を見ながら、ホテルまで歩く。ホテルは、ネフスキー大通りの最後にある。この通りを端から端まで歩くことになる。途中、革命広場を過ぎ、モスクワ駅を通り約一時間でモスクワホテルに着く。19:00であった。

風呂に入り、20:00ころレストランに行く。ここは、これまでで一番まともであった。スープ・きのこの壺焼き・ステーキを食べ、ワインを頼む。フランスのテーブルワインが1本30\$であった。食事は48\$、この旅行で一番豪華な食事であった。特にきのこの壺焼きが良かった。ワインを半分部屋に持って帰り、飲みながら、一日を振り返る。朝、夜行列車で着いてから、長い一日だった。疲れた！。21:30寝る。

第9日(3月6日(木))

成田

いよいよ今日は、帰国する日だ。朝起きて、片づけをしながら残金を計算する。50\$と59\$そして791

00P。日本円にして1万数千円。ロシアでは、ずいぶんな金である。朝食は、ジュースとジャムがうまかった。キャベツの煮た物は味がしない。お菓子はたくさんある。正体不明のものもある。旅行が始まって、生野菜をほとんど食べていない。しかし、真冬のロシアでは、これが当たり前だろう。そうしてみると、日本というのは、一体どうなっているのだろう。真冬でも、生野菜がいくらでもある。多くは、ハウスで石油によって育てられたものだと思うが、何と贅沢な社会だろう。

部屋に帰って、一休みし、郵便を出しにロビーに行くと三に出会った。モスクワに続く奇遇だ。モスクワから夜行で来たという。昨日来たのと同じ列車のようだ。ペテルブルグの事を話す。プーシキン美術館で買った絵葉書のうちに、ルノアールの描いた少女があったが、これが気に入っているというので、三にプレゼント。そこで別れる。郵便を出す。2500Pを5枚と3500Pを1枚、切手を買う。6階に戻り部屋から荷物を出して、チェックアウトしようとしたら、フロアのデジェルナーヤが、「スピョーティは買えたか？」と聞いてくれた。きのう、「どこで

(ロシアそろばん)を買い取るか？」と聞くと、デパートに行けと教えてくれたおばさんである。昨日は、買えなかった、今日買いたい物に行きたいというと、地図の上で、デパートのお土産売り場に行けと教えてくれた。とても親切なおばさんだ。お土産に持って来た電卓をあげると、とても喜んでくれた。

フロントに行きチェックアウトの手続きをした。カードキーをお土産にくれというと、くれた。地下で、荷物を預かってもらって、ロビーに出ると、また三とあった。エルミターージュに行くところだということで、途中まで一緒に行こうという事になった。朝食がまだということで、ホテル前の売店に行くが、適当なものは売っていなかった。美術館の中にハンパーカーショップがあると教えて、そこに行くという事になり、地下鉄に乗った。ホームを間違えて引き返し、乗り込み、ガスチーヌイ・ドヴォールで下り、ネフスキー大



デジェルナーヤ

通りに出た。そこで、エルミタージユの方向を教え、別れる事になった。別れるときに、ヨーロッパ流に抱きしめられたのには驚いた。

ガスチーヌイ・ドヴォールは、2階建ての建物で、外壁は工事中だったが、中は店がたくさん集まったデパートである。かなり広い。周囲は1kmの回廊があるという。店に入るとどこが何売り場かさっぱりわからない。英語はほとんど通じない。ホテルで書いてもらった「土産物屋」という文字を見せながら、あっちとかこつちとか聞きまわって、ようやく土産物屋が数軒集まっている一角に出た。そこで、人形やらスプーンやら細々したお土産を買う。スピョーティはないかと聞くと、ここにはない、あっちへ行けという。うるうるした結果わかったのだが、文房具屋へ行けと聞いていたのだ。文房具屋に行つて聞いてみると、ここにもない。残念だが、万事休す。歩き回つてみると物不足どころか、いろいろな物が売られている。ただ、普通の人にとっては、ここで売られている物は高いのだろう。

デパートを出てホテルに戻る。時間が少しあるのでアレキサンドル・ネフスキー寺院に行つてみる。教会の建物は、所々が傷んでいる。右手の墓地は、有名な人の墓があるそうだがそこまで見る暇がない。

ホテルに戻り荷物を受け取り、12・25ホテルを出る。メトロを乗り継いで、空港へのバスが出るマスコフスカヤ駅で降りる。地上にあがり、バスを探す。39番というバスが来たので、「ブルコウオ?」（空港のある土地の名）」と聞くと、そうだとのこと。バスに乗り込む。13・00。乗ってみて、お金の払い方がわからない。バスはワンマンカーで車掌は乗っていない。乗ってから、お金を手に持ち、前に座っている上品な夫人に「?」と聞くと、分かってくれたのが1000P札を取り、まわりの人に「タロン」はないかと聞いてくれた。あるビジネスマン風の男が持っていて、1枚きつて渡した。それを、窓のところにあるパンチで穴をあけ、渡してくれた。そして、立っていると、席に座れと指し示す。途中、その夫人は下りていったが、下り際に挨拶した「ダスヴィダーニャ」というロシア語がとても美しく感じた。しばらく行くと郊外の風景



になって来たところで、3人の男が乗り込んで来た。車掌の検札らしい。少してつぶりした年配の車掌が来たので、切符を見せると、荷物を指差し何か言っている。どうも、荷物運賃を払えといっているようだ。先にロシア人に切符を買ってもらったときにはそんなことはなかったから、「外国人向け」の扱いかもしれない。ここまで来て、空港も近いし面倒は避けたかったから、ポケットからルーブルを出すと、2万P抜き取って前方に行き、タロンを1枚持って来て、渡された。ロシア人なら多分何もないのだろうなと思いつつ、この国の現状を垣間見る思いだった。

バスは13・30ブルコヴオ第一空港に着いた。ここは国内線の空港である。バスを降り空港の建物の入口から中に入ると、薄暗い、汚い待合室であった。フライトの案内板を見ると、モスクワ行きがない。そこで、モスクワ行きはどこかと聞くと、別な入口を示された。そちらは、さすがにこの国第2の都市の空港らしいところであった。時間は、たつぶりあった。早く来すぎた感じだが、この国では、何が起こるかわからないから、仕方がない。昼食を食べようとしたが、ルーブルが足りない。さっきのバスの荷物代の2万Pあれば問題なかったのだが、両替を探すと、ちょうど昼休みで開いていない。結局、空腹のまま、ルーブルがないために待ち時間をつぶすことになった。なかなか融通がきかない国だ。

しばらくして、搭乗が始まった。日本人は、たった一人だけだ。座席の割り当てなどはない。適当に座って待っていると、14・55離陸時間になった。飛行機は雲海上に出た。いよいよロシア旅行の最後の場面にさしかかっている。あとは、シエレメチエヴォからへのトランスファアだけだ。たった1時間のフライトだが、ビールが出て、ケーキが出て、チャイが出てと忙しい。手紙と葉書をかいた。忘れずに出さねば。トランスファアはどうなっているだろう。そうこうしていると、モスクワが見えて来て、15・55着陸。シエレメチエヴォだ。16・10空港ビルに入り出口へ向かう。インツォーリストは目の前だ。荷物もすぐに出て来て、インツォーリストのおじさんのところで、名前を確認する。空港の出口には、タクシーもあるし、バスも運行

されている。日本にいるときは、事情がまったく分からず、安全策を、という事でトランスファーをつけたが、何のことはない。高いトランスファー（7000円）も出す必要はないのであった。

インツェリストの車は若い兄ちゃんが運転するBMWであった。ロシアにもこんな車が走っている。あまり良いといえない道路を20分くらいであっけなくシエレメチエヴォに着いた。日本への便は1時間遅れの20・20になっていた。

空港ビルで、あの立命の4人組の若者たちにあった。お土産やを覗いていくつか買い込む（10\$）。搭乗手続きを始める。やっと荷物から解放され、空港内の免税店を覗いてまわる。実に5年ぶりのところだ。5年前より空港全体がきれいになっているようにも感じた。スミルノフ2本と本を買ひ、ドイツビールを飲みに行く。レーベンプロイで白ビール・バイツェンビール等で14・5\$。長いロシアの国内旅行を振り返りつつ、やっとその旅行の終わりのときを迎え、ビールがやたらとうまかった。

20・00搭乗開始。乗ってみて驚いた。突然の日本語フツシュ、それも圧倒的多数が若者なのである。この便は、パリ始発のモスクワ經由東京行き。それで、日本の若者の卒業旅行貸し切り状態なのである。エアバスはかつてのアエロフロートのイリュージンに比べ明るく広い。機内サービスも、これがアエロフロートかと思うくらいである。食事・飲み物・音楽・睡眠・・・と10・30のフライトで成田だ。

第10日（3月7日（金））

成田

窓からの景色は雪をいだいたシベリアの山岳地帯を過ぎ、日本海が見えた。飛行機ではあつという間だが、あの冬の白い大地を列車で東へ4日間も移動したのかと思うと、不思議な気がした。

成田に着くと、そこはもう春であった。残金\$61、列車代金\$206と生活費に\$383費やした10日間の旅であった。



第三章  
日本の山あれこれ



秋の白馬大雪渓を登る

## 梅海新道を歩く 白馬岳から日本海へ

2009年秋の「シルバーウィーク」に梅海新道を歩いた。

猿倉から白馬大雪渓を登り、白馬岳、三國境から朝日岳そして梅海新道を経て日本海親不知までの約40km、登り標高累計4000m、下り標高累計5700m。3泊4日予備日1日の単独テント泊山行である。

### 第1日

長野新幹線始発で行く予定だったが、直前にムーンライト信州の切符がとれ、夜行での出発になった。幸い、キャンセル席だったよつで、ボックスを一人で占領し、終着駅白馬までウトウトしながら、朝を迎えた。

バスに乗って猿倉へ。給水、朝食を済ませ出発。さすがに5日分の食料、炊事用具、幕営用具、水、アイゼンまで持つと、25kg位はあるだろうか、ザックがずしりと重い。白馬尻から大雪渓の登り。9月になると雪渓はやせ、登山道を歩くところが減っている。雪渓は急な部分が残り、アイゼンをつけて登高。この道はこんなに苦しかっただろうか、と何度も問い返しながらも、葱平（ねぶかつぴら）へ。小雪渓は土の道を歩き、村営小屋へ。

12…40、ずいぶんつらい登りであった。テントを張り、一休みの昼寝。

夕食の後、日没前に小ピークに登ると、剣岳・立山が雲の中にあり、槍穂高の連峰まで、北アルプスの全部の山が現れている。行動時間6時間。



猿倉山荘



大雪渓を登る



清水岳

## 第2日

第2日目は4:00起床。食事の後テントを撤収し白馬岳山頂へ。快晴だが風が強く滞在時間は10分弱。

北上し三国境、雪倉岳を経て朝日岳へ。小屋のテント場についたのは、12:30。一番乗りで、テントを張った。行動時間7時間。

## 第3日

第3日は、5時に朝日小屋を出て、朝日岳山頂からいよいよ梅海新道に入る。蓮華温泉への分岐を過ぎると、人は少なくなる。

長梅山照葉ノ池、アヤマ平、黒岩平と湿原を経て、黒岩山、サワガニ山、犬ヶ岳と稜線を進み、12:00に梅海山荘。

進むか、止まるか迷った後、黄連の水場近くに幕営地があるとのこと。そこまでさらに2時間進んで、小さな広場に幕営。行動時間9時間。

## 第4日

第4日は黄連の水場を5時に出て、一気に海まで歩く日だ。

菊石山、下駒岳を経て白鳥山(1286m)。この白鳥小屋は立派な小屋だが、昨夜はずいぶん多くの人が泊まったようだ。ここには「海まで4時間」の道標がある。標高差1200mの下り。

しばらく稜線を行くと、急な金時坂を経て、坂田峠。ここは林道の舗装道路が通っている。

さらに登ったり下ったりを繰り返しながら、高度を落としてゆく。尻高山、二本



白馬岳

松峠、入道山を越えて、ついに、国道6号線。

梅海新道入口のゲートに11…00到着。親不知観光ホテルの脇の道を海まで降りる。10分で日本海！海に手を入れて塩水に触れる。行動時間6時間。

この日は、シルバーク最後の夜とて、観光ホテルはもとより、親不知の民宿はどこも満員。結局、青海の宿で一晩明かし、翌日午前の列車で家に戻った。

久しぶりの単独テント山行で、山中での支出は4日間でビール2本1400円と幕営料2泊で1000円の計2400円。混雑知らずのテント泊。

しかしながら、白馬の登りではずっしりと重い荷物にあえいで登った。山の神様が、「そろそろこんな山行は卒業したら…」と語っているのかもしれない。

コース…白馬く猿倉⇨村営小屋泊⇨白馬岳⇨三国境⇨雪倉岳⇨朝日岳泊⇨梅海山荘⇨黄連の水場泊⇨白馬山⇨親不知



梅海新道登山口



ようやく日本海へ



照葉池

## 34年ぶりの屋久島

便利になったとはいえ、やはり遠い。鹿児島島の南70kmの海上にある「洋上アルプス」の島、屋久島への再訪がかなったのは、2006年11月の初めであった。前に訪れたのは、1972年8月。34年ぶりの屋久島である。「世界遺産」になり、一躍有名になってしまったが、洋上アルプスはどうなってしまっただろうか。

東京からの飛行機は鹿児島空港へ30分遅れて到着、鹿児島市街から夜行のフェリーが出る谷山港へのバスに接続できなくなってしまった。しかたなく、鹿児島行きでなく谷山行きのバスに乗り、谷山からフェリー乗り場までタクシーを使う。18..00発のフェリーの乗船手続きをした後、食料の買い出しに5分ほど歩いた国道沿いのコンビニに行く。このフェリーには、カッブラーメンの自動販売機しかないとか。18..00に乗船。結構広い船室に、登山のグループ、観光客らしいグループ、仕事のグループと陣取る。四国から来た夫婦と隣の場所になり、話をする。荷物の積み込みが遅れ18..40分出港。しかし、どうせ種子島で停泊して時間を過ごすのだから多少の遅れは関係ない。20..00を過ぎるととうとうと眠ってしまった。しばらくして目を覚ますと、種子島の西之表港に着岸していた。ここで4時間くらい停泊する。真夜中なので、なにもないと思っていたら、深夜営業のスーパーやコンビニがあるという。種子島は初めてなので、15分くらいいるところにあるスーパーまで出かける。煌々と明かりがついており、客はバラバラ。酒と食料を買い入れ船に戻り、また寝る。

翌朝6..30に屋久島に接近。山が高くそびえており、宮之浦港が見える。7..15着岸。荷物を持って船を下りる。まず、ガスを入手しなければ、と屋久島観光センターの店に行く。四国の夫婦も同一行動。彼らは



宮之浦岳頂上





亜熱帯の森

8:00にレンタカーを借りて、淀川登山口に行くという。途中のヤクスギランドまで便乗させてもらえることになった。感謝！おかげで予定より1時間早く安房歩道の登山口ヤクスギランドに着いた。

ここでしたくを整え、ヤクスギランドのゲートで300円支払う。石塚小屋まで6時間と言われる。石塚小屋は水がないと聞いていたので、今夜の分まで水を持つと、3日分の食料、テント等で25kgのザックが肩に食い込む。あとで、水は途中で渡渉する場所があるのだから持つ必要がないことに気づく。ヤクスギランドから花之江河への分岐点を過ぎ、緩やかに登る道を進む。道は常緑樹の森の中を通り、ところどころが不明瞭になっている。ピンクのテープが点々と道を示しているが、これがないと、迷ってしまうだろう。現に何回か間違ってしまった。中間地点ぐらいで荒川の支流を渡渉するところになるのだが、なかなか着かない。3時間弱でようやく大和杉。3時間半で渡渉地点。ここで昼食と大休憩、水の補給。一枚岩を河が削った気持ちのよいところだが、増水すると危険なところでもある。そこから、また登り。展望がきかない道を黙々と歩く。6時間経ってから、ようやく尾根の道になり、木々の間から、宮之浦岳に続く主稜線が見えてくる。16:15突然、プロックづくりの小屋の前に出る。この間、7時間。誰にも会わない山道であった。石塚小屋は、中は2段になっており、20人収容という。この日は、3人パーティーと単独2名の5人で広々と場所を使う。夕食のしたくをし、日暮れとともに就寝。疲れた一日だった。

翌日は、5:15起床。食事を済ませ、6:30に明るくなってから石塚小屋を出る。10分弱のところの水場。こんなことなら、下から重い水を持ってこなくてもよかつ



主稜線が見えてくる



主稜線を進む

た。7・20に花之江河。湿原が広がり、昔の記憶通りの場所だ。ここは、晴れているより霧の中の方が味わいがある。ここで、淀河小屋からの道と合流。登山者が続々と来る。聞くと、昨夜は満員だったとのこと。メインルートとちよつとはずれた小屋のこの違い。ここから道はとたんによくなり、木道が多くなる。標識も過剰なくらい付けられており、大勢の登山者と抜きつ抜かれつの上り下りとなる。黒味岳は、前回行ったのでパス。後から思えば、この日は時間が余っていたので行った方がよかった。投石平（筑紫平）は花崗岩の大岩があり広々とした気持ちのよいところ。ここで休憩。歩き始めて少し行くと、岩屋がある。稜線で逃げ場がないときにはありがたそうな場所だ。ここに泊まるツアーもあるらしい。投石岳をすぎ、安房岳、翁岳を過ぎ、水場に至る。ジワツとしみ出しているような水場だが、稜線にあるのがありがたい。ここを過ぎると、急坂を栗生岳を越えていよいよ宮之浦岳頂上。34年前と同じ、晴天だ。宮之浦岳山頂は、人であふれていた。3つの大きなグループ。いくつかの小さなグループ。中に「日本百名山完登」の看板を持った人を中心に写真撮影している、ツアーの団体もいた。山頂からは、永田岳をはじめとする屋久島の山々。さらに太平洋・東シナ海。その向こうには島影も見える。薩摩・大隅半島はかすんで見えなかった。20分ほどたち、喧噪の山頂を後にする。

永田岳への分岐である焼野三叉路まで急な下りを15分。ここに荷物を置き、空身で永田岳へと向かう。25kg近いずっしりとした荷物から解放されると、体が宙に浮きそうだ。一旦、水のあるコルまで降りて、永田岳の急な登り。焼野の分岐を出て45分で永田岳山頂の大岩に着く。ここからは、宮之浦岳やそれに連なる山々、そし



永田岳頂上



縄文杉

この界限の情報を仕入れる。そうこうしているうち、今夜はがら空き、と思ってい  
たら、次々と団体が到着。小屋はどんどん混んでくる。そこで、テントを出して外  
のデッキに張り、小屋を脱出。一夜を過ごす。やはりここはメインルートなのだ。  
翌日は、のんびり7:00に小屋を出て、高塚小屋を経て、縄文杉に至る。34年前  
は、高塚小屋から宮之浦に向けて降りてしまったのでここは初めてだ。その宮之浦  
歩道も今は廃道になっているらしい。縄文杉に着いて驚いた。杉の木の立派さは当  
然としても、それを見るデッキの立派さにもだ。広いデッキが縄文杉と向かい合っ  
て設置されている。4人しか人がいないのでよけい広く感じるのだが、ここに、  
「食事は取るな」とか、「一方通行」とか書いてある。縄文杉は、デッキから20mほ

て、反対側には、西側の切り立った山々と永田集落、そして東シナ海が間近に見え  
る。宮之浦岳と違ってこの山頂は至って静かである。他には3人組がいただけ。こ  
れを見ても、百名山ブームとは何かがわかるような気がする。ちなみに、宮之浦岳  
は、淀川登山口から10時間かけて日帰りする山になっているらしい。

永田岳山頂でゆっくりと景色と昼食を楽しんだ後、下山開始。焼野三叉路まで40  
分。ここで荷物を担ぎ、下り始める。このころからガスがかかりはじめる。稜線を、  
第2、第1展望台を経て、14・25に新高塚小屋に着く。大きな小屋はがら空き、こ  
こに泊まることにする。荷物を置いて小屋の周りを歩くと、何頭かの屋久鹿がうる  
うるしている。かわいそうに、登山者に餌付けされてしまい、餌をねだっているの  
だ。ここはメインルートの小屋なので、こんなことになってしまっている。水は、少し先の沢からホースで  
引いているので、そこそこに出る。鹿児島市と北海道から来た単独の登山者と話をする。鹿児島の人から、



新高塚小屋の屋久鹿

どのところに、偉容を見せている。なんだか、動物園でなにか巨大な動物を見ているような気がする。しかし、これが必要な措置であることは、下山を開始し、すれ違う登山者を見てよくわかった。とにかく、すごい数のハイカーだ。巨大なウィルソン株の周りには数十人が休んでおり、その下にも続々と案内人に連れられたグループが続いている。「上り優先」などといっては進むこともできないくらいだ。夫婦杉、大王杉を通過し、ようやくトロッコ軌道に出る。昔歩いた記憶のある道だ。1時間ほど歩いて楠川別れ。ここから登り返して、白谷雲水峽への道。1時間で辻峠。ここで勧められていた、太鼓岩へ行ってみる。15分も歩くと岩に着く。登ると、絶景である。宮之浦岳を初めとする峰々が谷の向こうに聳えている。そこから、川が流れ、海に向かっていく。深い林。霞み始めているが、堪能した。

そこからは、白谷雲水峽。「ものけ姫」の舞台のイメージになったという林である。杉に苔が幻想的な景色を作り出している。ここばかりは、晴れより霧雨の日の方が価値がある。20分下ると白谷山荘。当初はここに泊まり、翌日海岸の楠川まで歩こうかと思っていたのだが、ここは、バス停のある「公園」の一角であった。予定を変更し、3日ぶりの風呂とビールを求め、バスの客となる。宮之浦の集落でバスを降り、民宿に一泊。登山行動は完了した。雨が多いことで有名なこの島で、前日も今回も晴れに恵まれた。感謝！

振り返って地図を見ると、34年前に歩いた海からの道は、今や林道が伸びバスが通って、登山口が山の中にある。しかし、メインルート以外は人影もまばら、メインルートは、道は木道と化し、ツアーの行列が続々という状態である。かつて歩いた道の大半は廃道となっている。これが、この三分の一世紀を経た時間の流れかと、感じるものが多かった。

翌日は、軽自動車を借りて、島を一週した。永田集落付近の、ウミガメが上陸す



トロッコ軌道

るといふ、永田いなか浜のすばらしい砂浜、西部林道で道の真ん中で戯れ、車をよけようともしない屋久島ザルの群れ、流れ落ちる大川滝、そびえ立つモツチヨム岳等が印象的であつた。もう1泊し、翌朝、鹿児島まで高速船で戻つた。海は波が高く、場合によっては引き返すという条件での出港だつた。波は大きくうねり、船も大きく揺れた。種子島を経て、黒潮を乗り切り、開闢岳の姿が見えたとき、内海に入り波も収まつてきた。昔の船乗りたちも、聳える開闢岳を見たとき、「助かつた」と安堵したのであろう。

2006・11・27

# 白神岳に登る

2000・10・31(11・3)

世界遺産に指定されて以来、白神山地は一躍有名になった。それ以来、登山者の立ち入りを禁止するとか、林道工事がどうなるとかで、世間から注目を浴びている。一方、山地とはいえ、登山に関する情報はあまり伝わってこない。この数年気になっていた白神山地であるが、この秋、意を決して出かけてきた。

白神山地の登山事情 白神山地の登山事情について、数冊の書籍を読むことにより調べた。それによると、「登山道」のついでに山はいくつかであり、他の山

は、踏跡程度の山、全く道がなくて沢を詰め藪をこぐか残雪期に頂上を踏むかという山である。標高は、

最高でも向白神岳の1200m強であり、高くはない。が、緯度が高いこと、アプローチが整備されていないことなどで、登山は大変だ。世界遺産に伴い、白神山地には、コア地域(核心部)とバッファ地域(緩衝部)が設定され、現在、立ち入り禁止の設定などで揺れている。

登山案内板  
そうした事情を踏まえ、今回は、11月で季節が晩秋であること、単独行であることなどを考慮し、陸奥黒崎より白神岳へ登り、避難小屋に泊まり、そこから大峰岳縦走路を取り、十二湖へ出ることにした。このコースは、「道は整備され」、避難小屋があり、核心部への展望があり、さらに標高もこの山域の中では高い。



白神避難小屋

## 白神岳登山の記録

期間は、2000年10月31日(火)～11月3日(金)である。概要は次の通りである。

- ・ 10月31日(火) 夕方大宮を出、秋田まで。泊
- ・ 11月1日(水) 秋田から奥羽本線、五能線を経て陸奥黒崎より白神岳へ。山頂避難小屋泊
- ・ 11月2日(木) 白神岳より、大峰岳、崩山をへて十二湖へ。五能線沿線で泊
- ・ 11月3日(祝) 秋田を経て大宮へ。

10月31日(火) 16:36大宮発こまちで秋田へ。秋田22:04。駅前の秋田ビューホテル泊。能代までの夜行バスは、五能線に接続していないので、こういうことになった。

陸奥黒崎から白神岳へ

11月1日(水) 宿を出て、駅前のコンビニで食料を調達し、秋田6:33発の奥羽本線下り普通列車に乗車。

次第に通学列車の様相を呈してくる。東能代で乗り換え。能代駅までは6両編成で、さながら高校生専用列車。数校の生徒が乗っている。

それを過ぎると、2両になり、がらがらで五能線を走る。左には海、右には紅葉の山とすばらしい景色。

登山口の陸奥黒崎へ9:11着。下車客1名のみ。陸奥黒崎駅を出て、いったん海側に行き、左折し鉄道、国道を越えると登山道の標識あり。

少し歩くと、白神山荘の建物が左側に見える。



登山口附近の白神山荘

さらに進むと、「日野林道入口」の標識。

舗装道路を進むと、駅より約1時間で駐車場(広い、トイレが設置されている)に着く。

そこから500mで登山口。登山口は広場になっていて登山届を記入するようになっていて。熊に注意の看板あり。ここで休憩。

10:00出発する。ついに雨がぱらぱら落ちてくる。標識に沿って、紅葉のブナの林に入る。黒崎から白神岳への登山道は白神山地の中では珍しく信仰登山の道であったようだ。道ははっきりしている。標識もある。40分で二股分岐。沢沿いの道は「整備中」とのことで「マテ山経由の道を通るよう」表示がある。沢をいくつか横切りながら斜面を登って行く。途中、登山道のすぐ傍で「バサバサ」という音と共に、大きな鳥が飛び立つ音に驚かされる。雉だろうか。40分ほどで「最後の水場」の表示。ここで今日明日の水2リットル余を汲んでさらに斜面を登る。

急登を上りつめると、支尾根に出て、煙(マテ)山分岐。ここまで登山口から2時間。左に行けば煙山だが、省略。尾根の緩やかな道を進んで行く。ときどき下るゆっくりの道である。紅葉のブナ林の中を進む。

ブナからタケカンバに変る頃、道は急になり、木が低くなり笹の中の道になると、稜線は近い。展望が開けるところに出るがいくの天気である。途中10人くらいパーティーとすれ違う。日帰りのグループのようだ。この日は登っている人はいないだろうと思っていたので驚く。

前日に降ったらしい雪がところどころ残っている。急登が終わると、稜線に出て、大峰岳分岐に13:35。ここから平らになり、水がたまって歩きにくい道を15分ほどで、ガスの中に小屋が見える。



白神岳山頂



小さな社を過ぎ、立派なトイレの小屋の向こうに、とんがり屋根の避難小屋がこぢんまりと建っている。

誰もいない。荷物を置いて空身で頂上へ。依然として視界20mくらい。2〜3分でガスの中の白神岳の山頂に着く。頂上は三角点がある広場になっている。視界悪し。10分ほど滞在して小屋に戻る。なお、頂上から50m降りると水場があると書かれていた。

避難小屋は、小さな建物だが、中は3層に別れていて、収容人数は見かけより多い。よく工夫された建物だ。

3階に登り、荷物を広げシュラフに入り休憩。地元の人達のものであるうシュラフやマットが置いてある。窓から外を見ていたら、突然、向こうに山並みが見えてくる。白山山地最高峰の向白神岳とそれにつながる山々である。

写真を撮ったり眺めたりしているとまた、ガスの中に入る。今日はこの小屋で一人かと思っていたら、15:00過ぎに若い2人パーティーが到着。十二湖から登ってきたとのこと。彼らは一階に陣取る。日没が16:30くらいなので、16:00には夕食のしたくをし、さっと食べ、17:30にはシュラフにもぐり込む。この日の夕食は、バックの赤飯とバックのおでんと味噌汁。ワイン付。昨日もあまり寝ていないので、日が落ちる頃寝てしまう。途中風の音で何度か目を覚ましたが、静まり返った小屋の中で翌朝5:00の起床まで、くしぶりによく寝た。

#### 十二湖へ下る

11月2日5:00に起床。朝食の準備。湯を沸かしてカレーとご飯を温め食べる。天候は、依然として小雨。風はない。荷物を片付け、パッキング。

6:15に小屋を出る。視界は少し広がっている。



崩山から海を見る

6・30に大峰岳分岐。ここから十二湖へという標識に従い、縦走路を進む。道は笹が出ていて、部分的には「踏み跡」のような状態である。ピークの上り下りを繰り返して、10個目のピークが大峰岳。濡れた路の登降を繰り返す。途中、風が出て雲が晴れ、白神岳山頂の昨日泊まった小屋や、谷を隔てて向白神岳とそれに続く稜線が見渡せるが、すぐに雲に隠れる。

また、時々、海岸線と紅葉の山々が姿を見せる。晴れていれば素晴らしい展望の稜線だ。山の頂きから海が見える景色は、なかなか感動的である。特に、昨日、海岸線から歩き始めたことを考えると、はるばる来たな、という印象が深い。

約2時間後の10・25に大峰岳。展望のない、何ということもない頂きである。

そこからさらにピークを5つ越えると崩山に至る。途中、ガスが一時晴れ、紅葉と海岸線が見える。天候は小雨であるが少し回復しているようだ。途中、登山道の右側で、がさこそと音がする。こんなところで熊にあつたら大変と、急いで通り過ぎる。

1時間後の9・30に崩山到着。

ここから斜面を下って行く。

さらに1時間後の10・45に大崩に至る。

ここからは、展望も良く紅葉した十二湖の景色が美しい。大崩は、左側が大きく崩壊している。そこよりブナ林の中をひたすら十二湖に向い下ってゆく。

約1時間で十二湖の登山口に到着する(10・45)。

紅葉の鶏頭場の池のほとりの大町圭月の碑から青池に寄る。

落ち葉が三分の一くらい覆っているが、神秘的な青い水の色である。そこから、挑戦館という地元の物産館に出る。ここからバスが出るが、2時間以上待たなければ



十二湖青池

ばならず、歩いてビジターセンターに行き見学し、その後、十二湖駅まで歩く。十二湖は紅葉の最後の輝きを見せていた。

途中、黄金崎の不老不死温泉に電話すると、今夜は泊まれるとのこと。

約1時間で十二湖駅に出るが、電車は3時間ない。電話でタクシーを呼び黄金崎不老ふ死温泉に向かう。約20分で宿に着く。

チェックインをすませ、2日間雨の中を歩いて濡れネズミになった身体を温泉に。天国の一時である。不老ふ死温泉は、海のすぐ傍にある温泉で、夕日の見える海岸の露天風呂は有名である。湯治場もある。入浴の後の海の幸にあふれた夕食は天国の続きであった。

秋田経由で戻る

11月3日、朝食の後、7:50に宿を出る。五能線の上りがこの次は2時過ぎまでない。天候は回復しており、いい天気だ。残念！

良く晴れ渡った海岸線を列車は進む。海と紅葉の山がすばらしい。能代で1時間、秋田で1時間の待ち合わせのために、新幹線こまちを使っても、大宮に着いたのは夕方17:00であった。白神は遠い。

その他

交通アクセス非常に悪し。

五能線は一日5本。昼間は空白。

バスも本数少なく、列車と接続してない。

タクシーは岩崎村に2台のみ。



不老ふ死温泉



## あとがき

数えてみると、早いもので、15歳の高校入学以来始めた山歩きは、43年になる。その当時は、「山登り」遭難」という感覚が報道により作られていて、親を始めとしているいろいろな人から「大丈夫ですか？」と心配の声をかけられたものである。それが今や、「中高年登山」や、近年には「山ガール」が出現するなど、山歩きに対する見方は変わっている。時代の流れであるうか。

この間、山歩きをいろいろな人から教えていただき今に至った。その一部なりを次の世代に渡さなければいけない年になったな、と感じている。身の回りには、高校の生徒や、山の会の仲間があり、少しだけは還元してきた。また、時折、インターネットを通じて問い合わせのメールが飛び込んできて、それに対してもわかる限りのことを伝えている。

インターネットといえば、数年前に、見知らぬ英国人からメールが来て、本の出版をするので私のサイトにある写真を使わせてほしい、という問い合わせがあった。承諾したところ、一冊の本が送られてきて、サイトにあった写真が撮影者の名前入りで掲載されていた。ちなみにその本の名は、Europe's High Points という。考えてみると、英国人が、遙か彼方の私の撮影した写真を居ながらに見て、撮影者である私にメールを送り、自著の



画像として用いるというのは、数年前には考えられないようなことである。旅先から出した絵はがきが帰国後バラバラと届いたのは、たった十数年前のことであった。世界は変わりつつあることを実感している。こういう時代に、「本」という古典的な形で一区切りつけることをうれしく思う。

体力が落ちたとはいえ、まだまだ行きたいところも数多くあり、山歩きを続けたいものであるが、ここではひとまず、これまで永年にわたり、こういう「道楽」に時間と莫大な費用をつぎ込むことを心配しながらも許してくれた家族に感謝したい。また、この本を形にしてくれた雄文社の編集者村上寿海氏に感謝を捧げます。

P. S. Webで写真をごらんになるには、検索エンジンで「うらかわさんの」をキーワードにし検索すると辿れます。美しい景色をご覧下さい。地上には、思いもよらない美しい風景があるものです。



私の山、私の旅

二〇二一年三月三十一日 発行

著者 浦川明彦

越谷市登戸町三六十八

電話 〇四八九八五八五三五

urakawa@post.officenet.ne.jp

印刷

株式会社 雄文社

さいたま市浦和区常盤九十一

電話 〇四八八三一八二二五

ISBN978-4-89693-129-7



9784896931297

ISBN978-4-89693-129-7

